

鳴門市人口ビジョン



平成27年10月
鳴門市

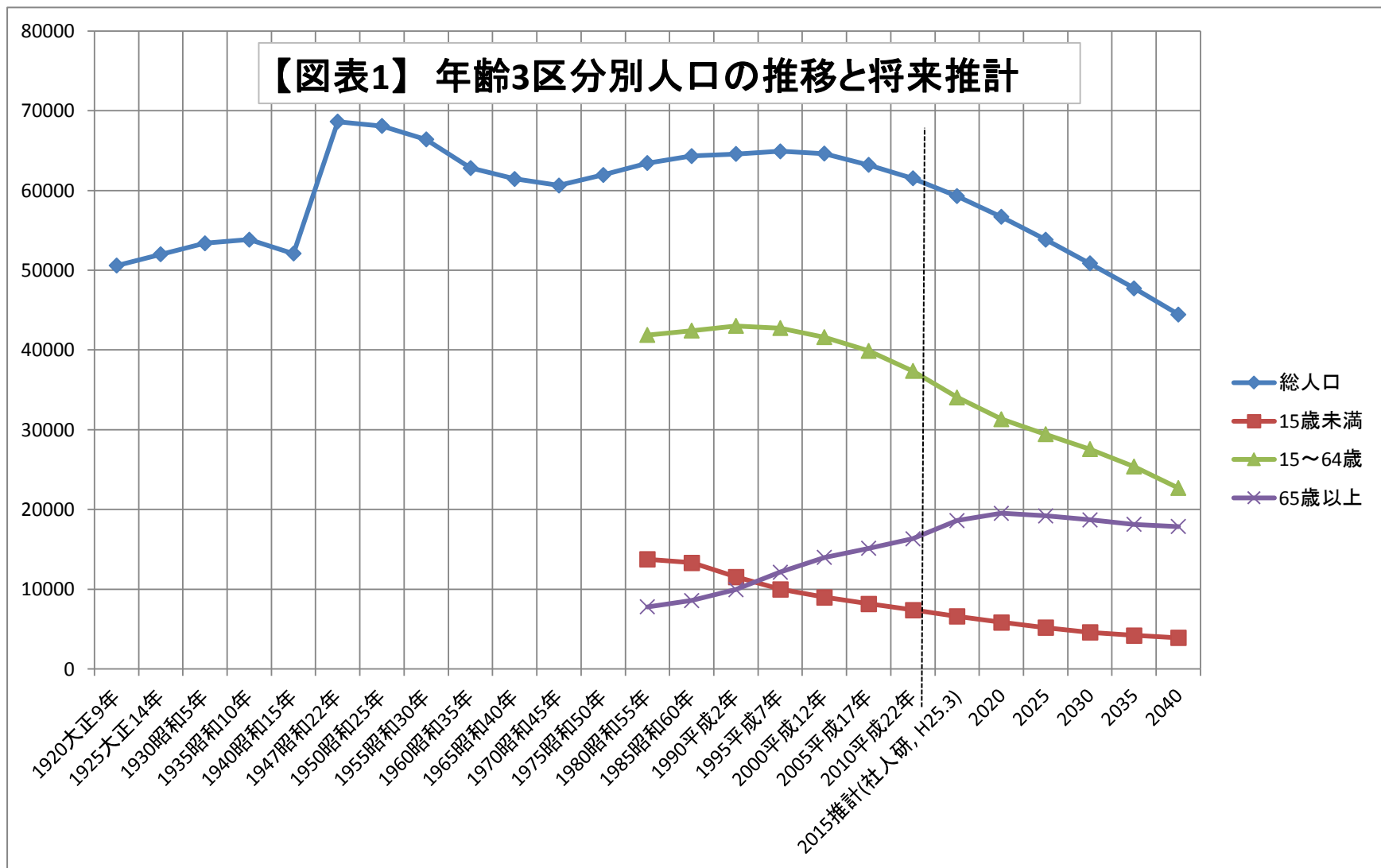


目 次

第1章	鳴門市の人口	1
1	総人口の推移と年齢3区分別人口の推移	1
2	鳴門市の人口ピラミッド	2
第2章	鳴門市の人口移動	4
1	出生・死亡、転入・転出の推移	4
2	年齢階級別の人口移動の状況	7
3	鳴門市における転入・転出の分析	9
4	転出・転入アンケート	21
第3章	鳴門市の産業別人口	32
1	産業別就業者数の推移	32
2	男女別産業別人口	33
3	年齢階級別産業別人口	34
4	鳴門市民の通勤通学先	35
第4章	鳴門市の人口推計	36
1	鳴門市の人口推計	36
2	鳴門市の人口減少段階	37
3	鳴門市人口推計のシミュレーション	38
4	鳴門市の総人口分析	39
5	老年人口比率の分析	40
6	鳴門市の目標人口	41
第5章	まとめ	42
1	鳴門市の人口減少に対する再認識	42
2	自然減少の趨勢	42
3	社会減少の趨勢	42
4	鳴門市が取り組む基本的視点	42

第1章 鳴門市の人口

1. 総人口の推移と年齢3区分別人口の推移



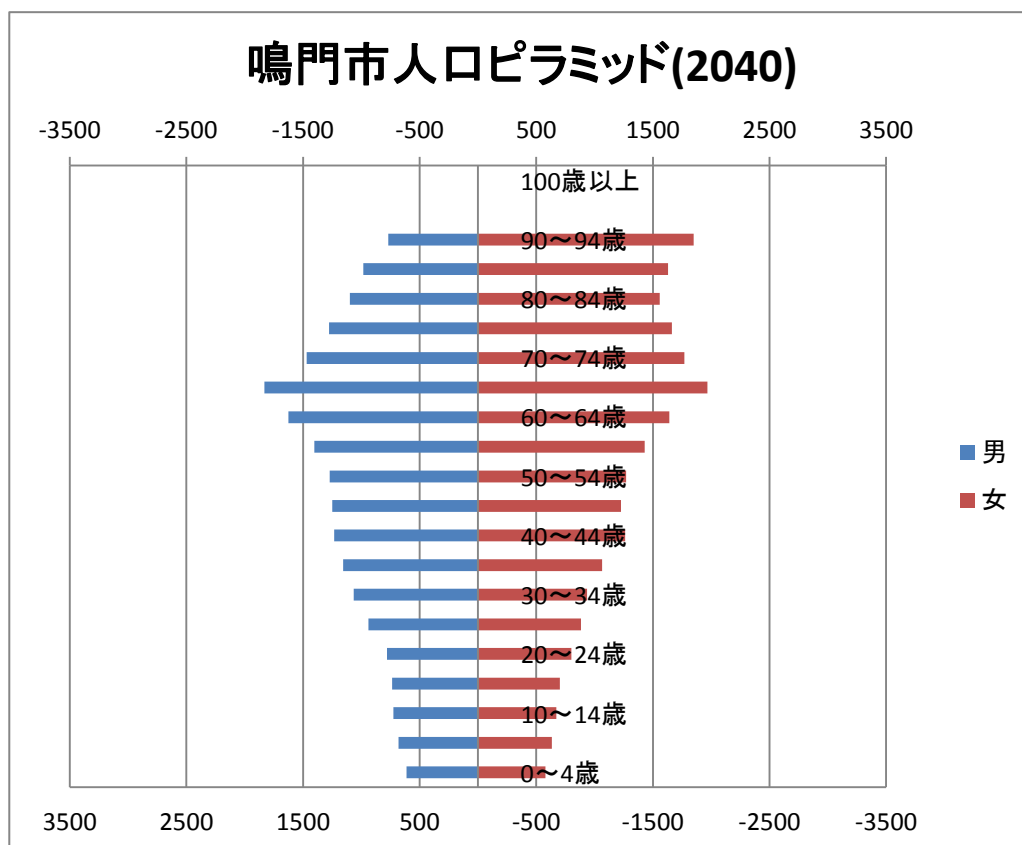
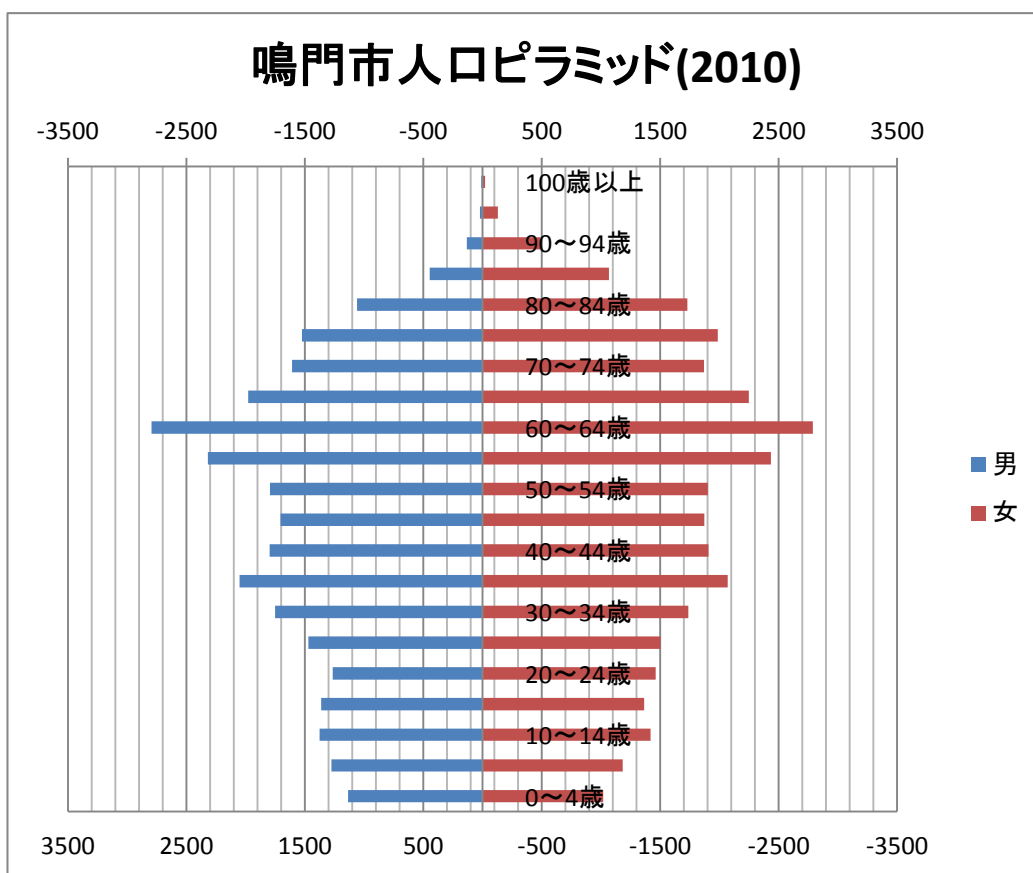
(出典) 2010年までの総人口、3区分人口は国勢調査より。
2015年以降の総人口、3区分人口は社人研推計値を使用。

鳴門市の総人口は昭和45年(1970年)までは減少を続けていたが、昭和45年(1970年)を境に増加に転じた。その後増加を続けていたが、平成7年(1995年)の64,923人をピークとして、その後再び減少に転じており、平成22年(2010年)の61,513人となっている。

15歳未満の年少人口は昭和55年(1980年)の調査開始以来、減少を続けている。15歳-64歳の生産年齢人口は平成2年(1990年)をピークに減少に転じ、以降減少が続いている。

65歳以上の老年人口は、現在まで微増が続いており、社人研による推計では2020年に減少に転じる予定である。

2. 鳴門市の人口ピラミッド



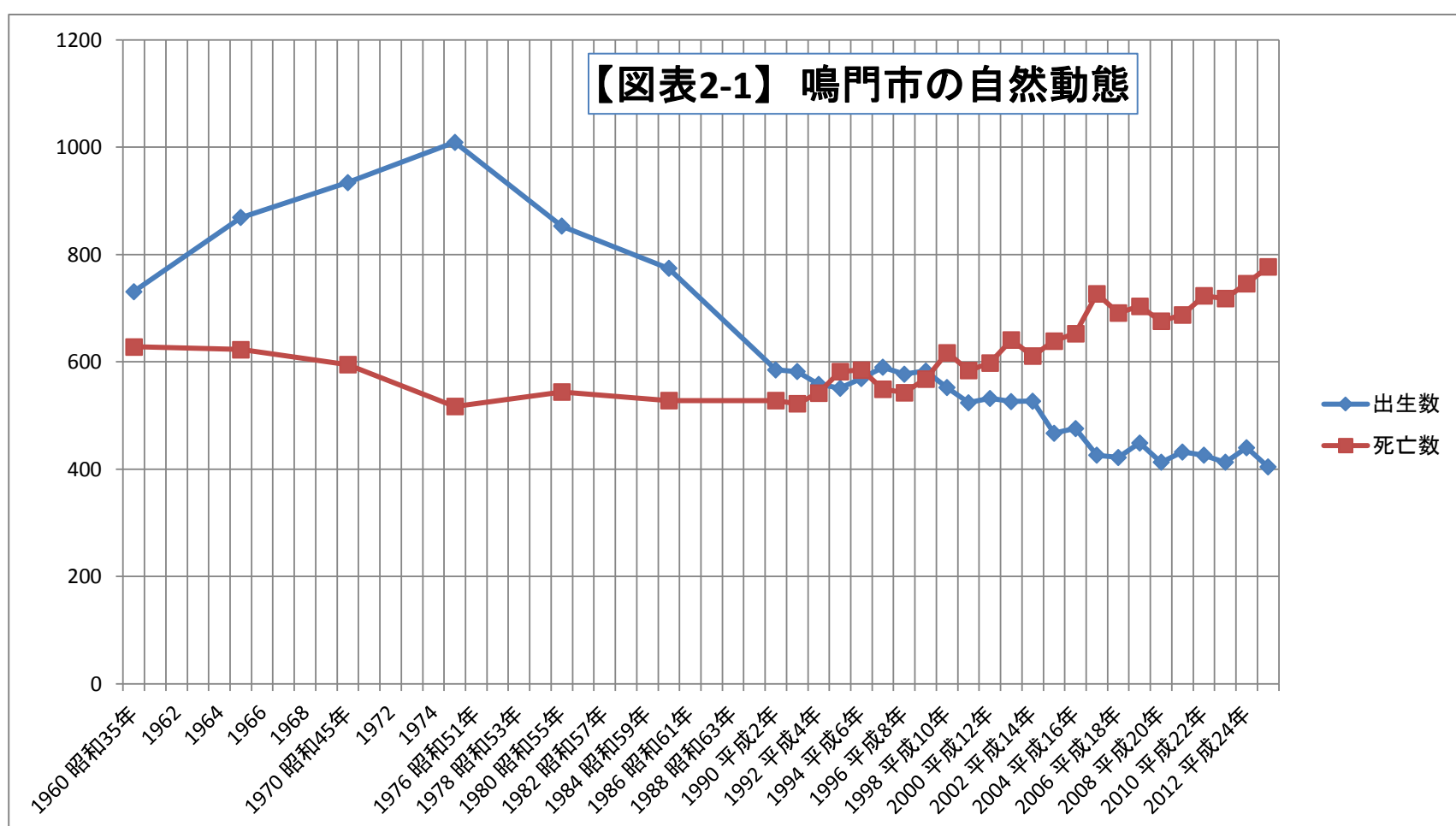
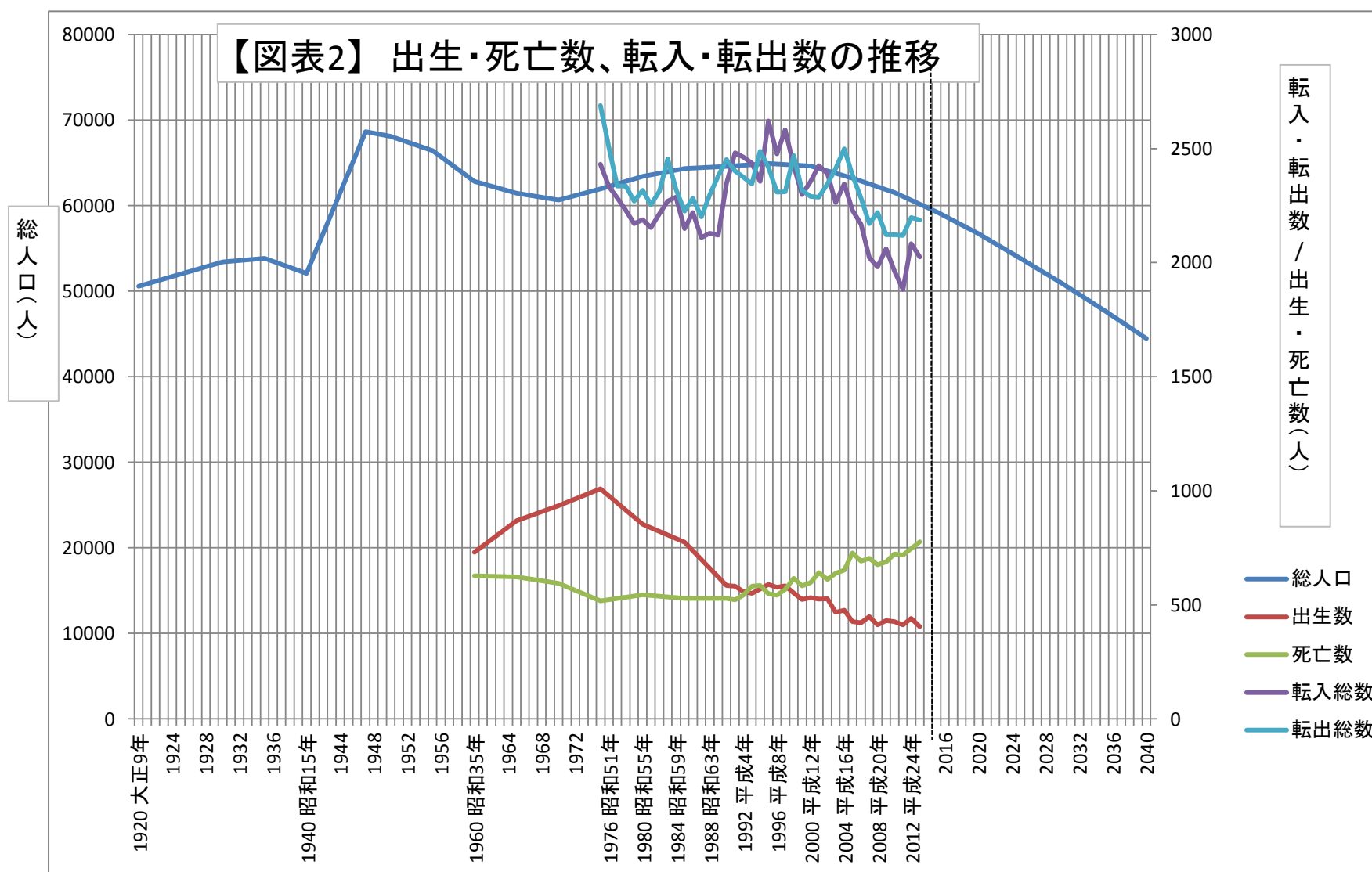
(出典) 2010年は国勢調査より。
2040年以降は社人研推計値を使用。

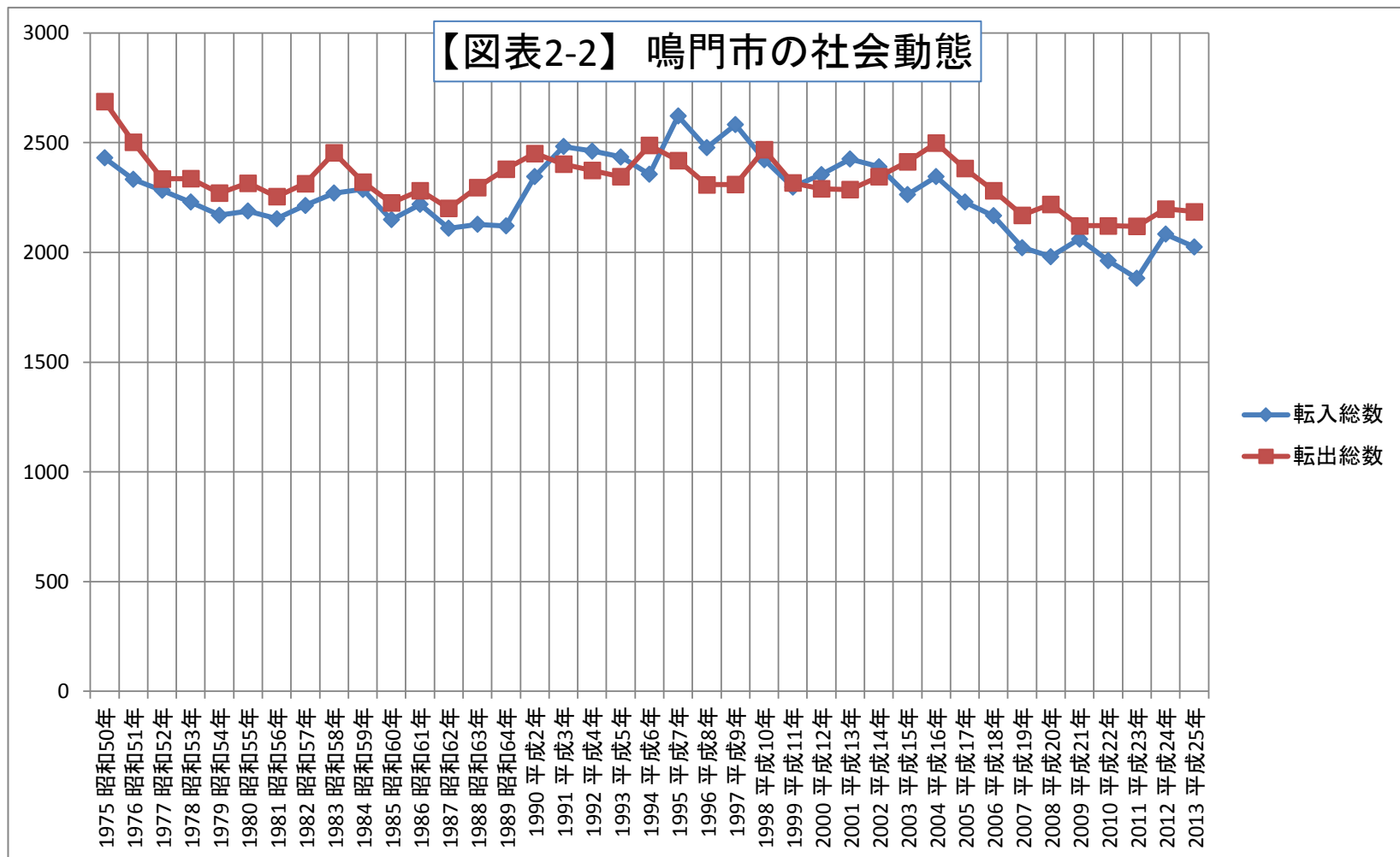
2010(平成22)年ですでに、鳴門市の人口ピラミッドは、60~64歳の人口をピークに、若い世代なるにつれ人口減少傾向となる「つぼ型」になっている。

2040(平成52)年の推計人口による人口ピラミッドでも「つぼ型」と言えるが、全体的に細く、年少人口はより細い「つぼ型」となっている。

第2章 鳴門市の人口移動

1. 出生・死亡、転入・転出の推移



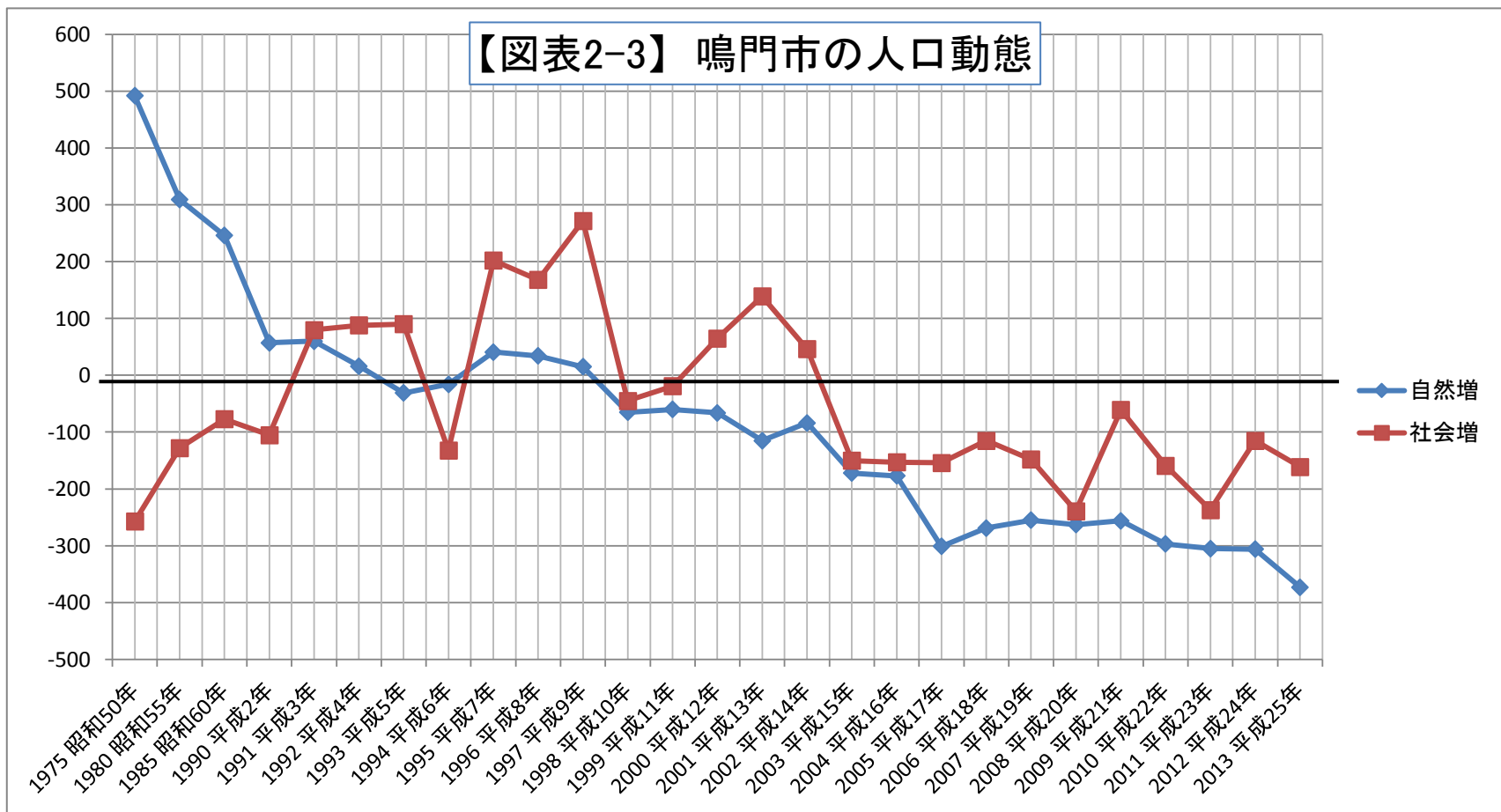


(出典) 2010年までの総人口は国勢調査より。
 2015年以降の総人口3区分人口は社人研推計値を使用。
 出生・死亡数、転入・転出数は徳島県人口動態調査より。

鳴門市の出生数は、第二次ベビーブームの昭和49年(1974年)をピークに減少に転じた。平成元年(1989年)まで減少は続き、その後現在まで微減している。

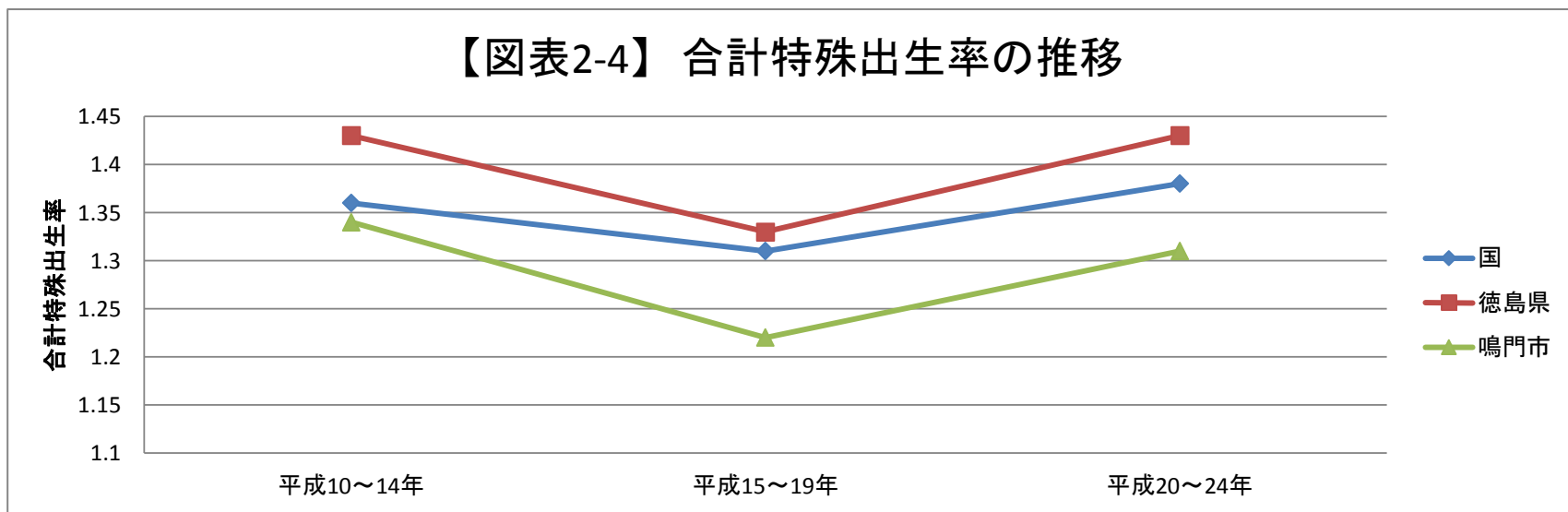
死亡数は昭和49年(1974年)まで微減しており、その後しばらく横ばいであったが、平成2年(1990年)より増加に転じている。平成5年に初めて自然減となり、その後、平成7年から平成9年までは再び自然増になるも、平成10年に自然減に再び転じて以降は、自然減が増加し続けている。平成25年(2010年)の自然減は373人となっている。

転出・転入数は2,000人から2,500人の間を増減している。概ね転出数の方が、転入数より多く、毎年100人前後の転出超過となっている。



社会減が100人強、自然減が400人程度。合わせて、約500人の人口が年間減少している。この減少数は今後増加していく見込み。

この減少数増の最大の原因は死亡数の増加。そして出生数の減少、近年の転出超過によって、人口が減少している。

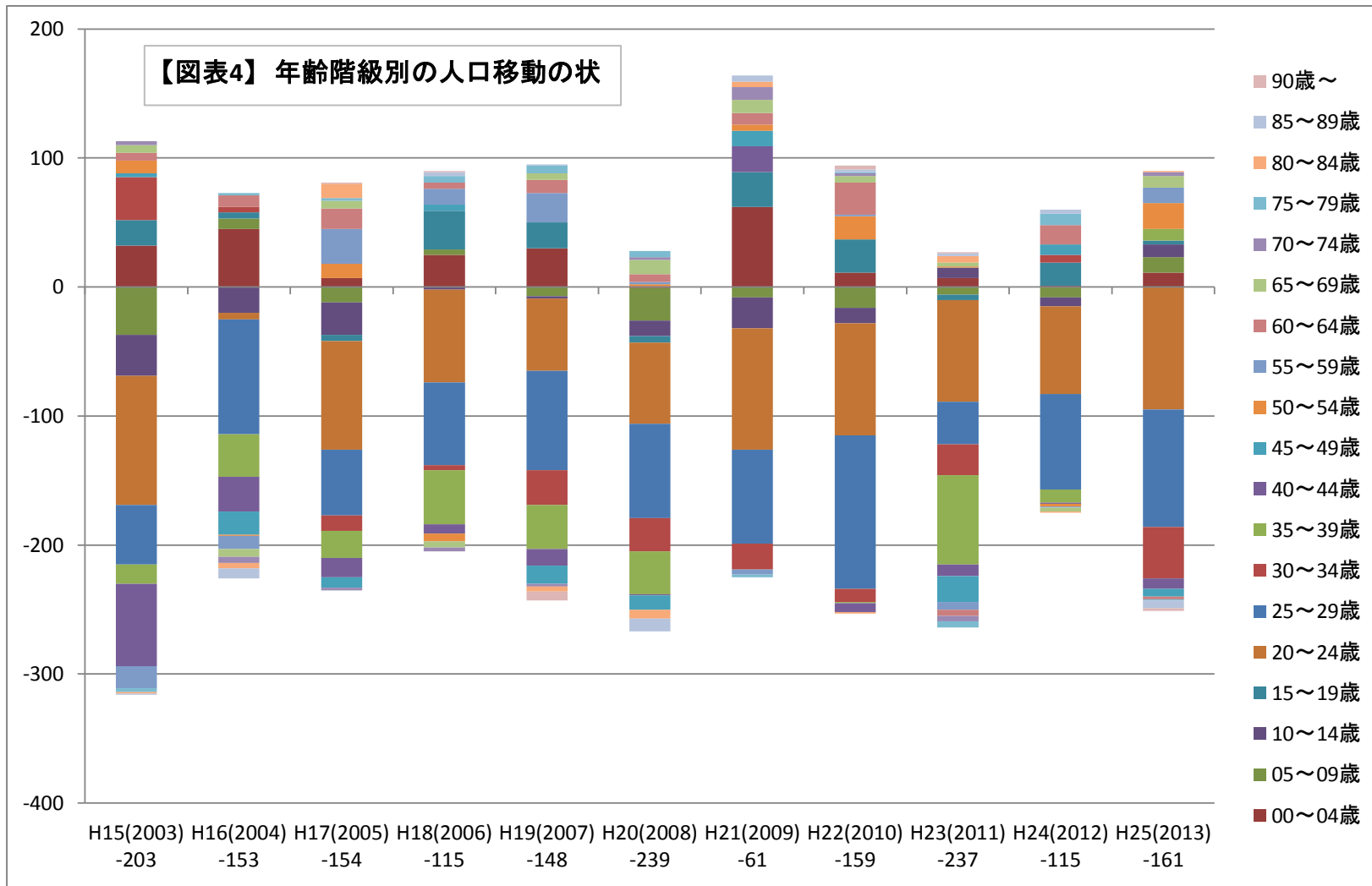


(出典) 厚生労働省「人口動態保健所・市区町村別統計」

鳴門市の合計特殊出生率は、平成20から24年で1.31となっており、県内8市の中でも最も低い値となっている。

また平均寿命も男78.5歳、女85.4歳となっており、県の平均（男79.4歳、女86.2歳）より低くなっており、県内8市の中でも2番目に低い値となっている。

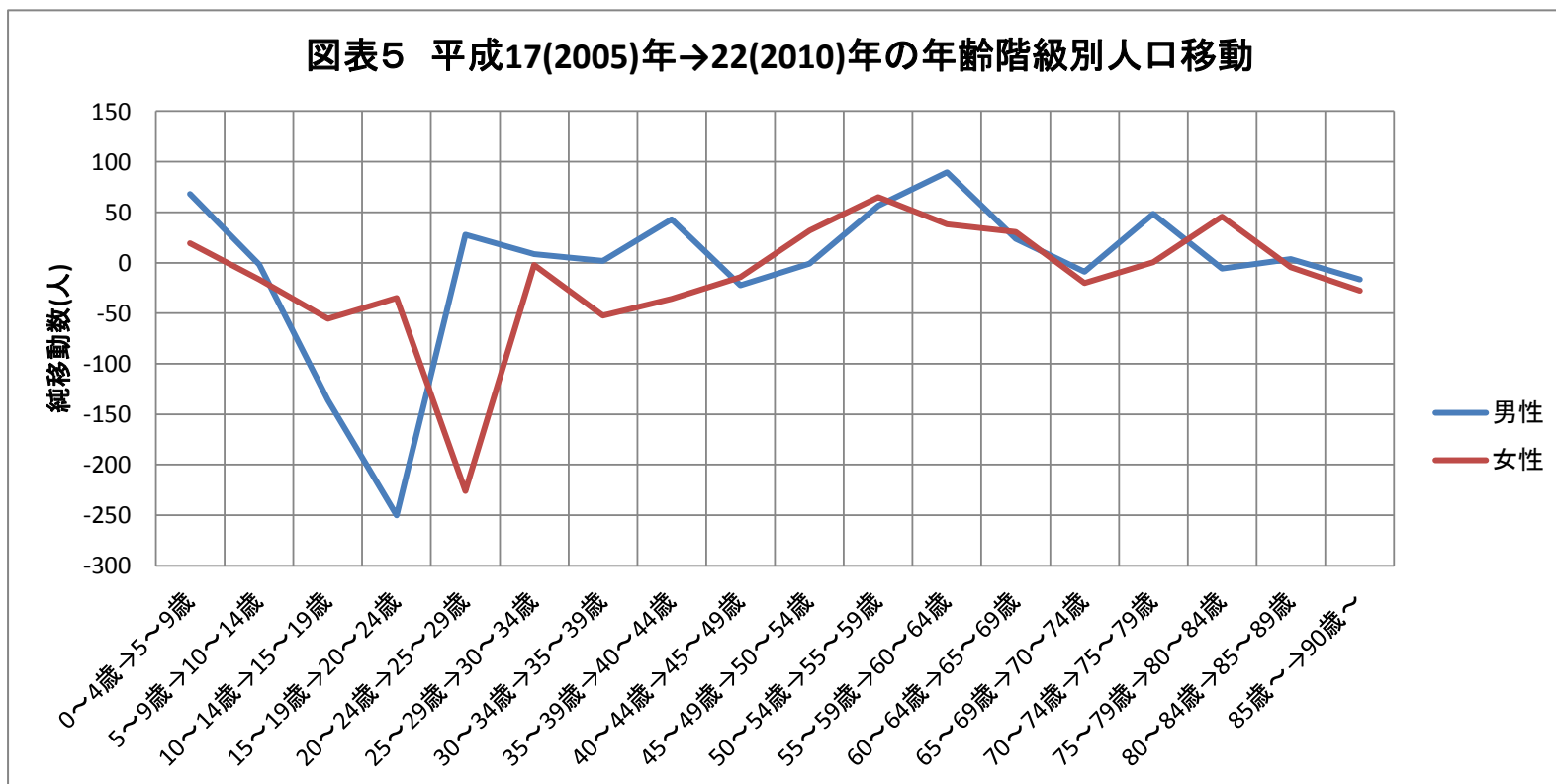
2. 年齢階級別の人口移動の状況



(出典) 徳島県人口移動調査より。

H15より転出超過が続いている。転出している世代は主に20-24歳、25-29歳の世代となっている。

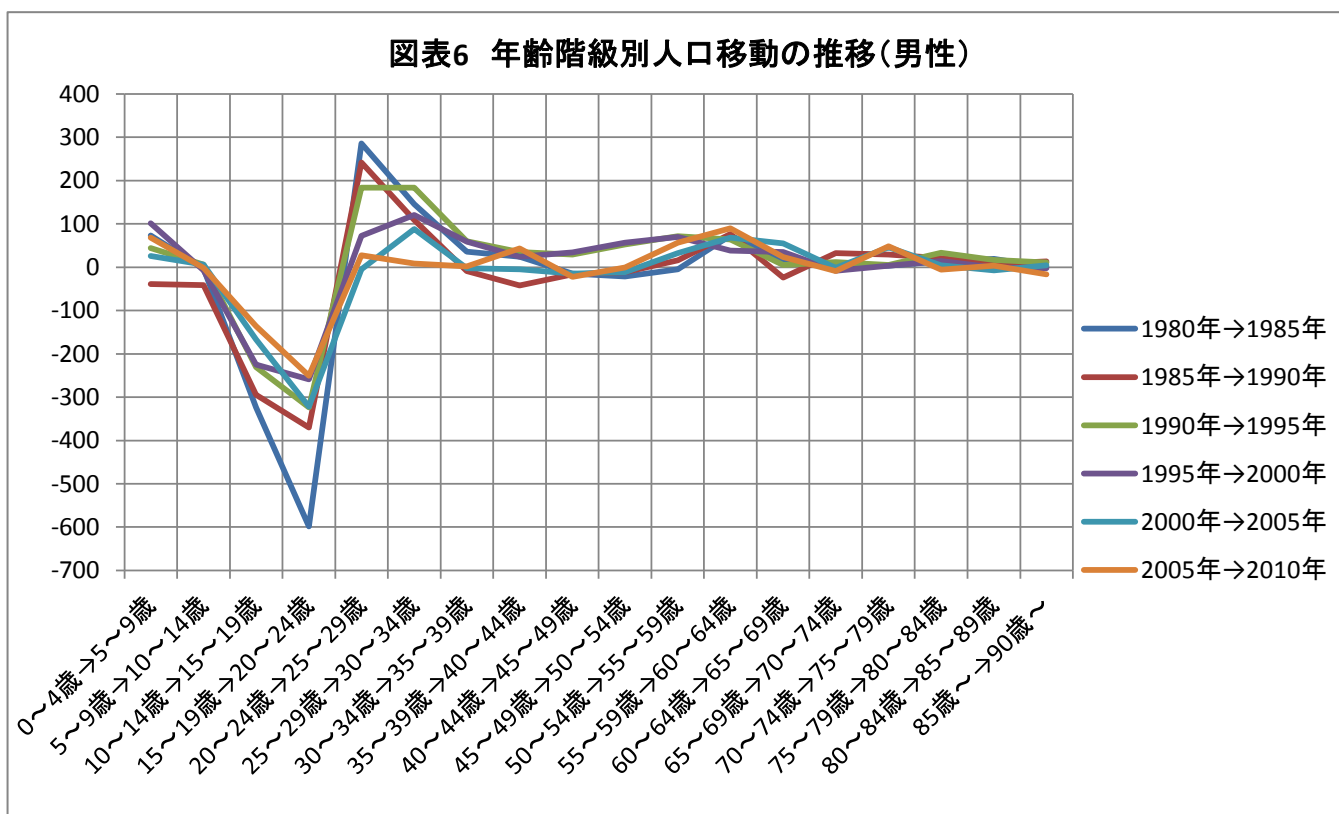
2-1. 平成17(2005)年→22(2010)年の年齢階級別人口移動



男性は15-19歳から20-24歳になるときに大きく移動がある。進学、就職を機に市外に転出する人が多いと推測される。

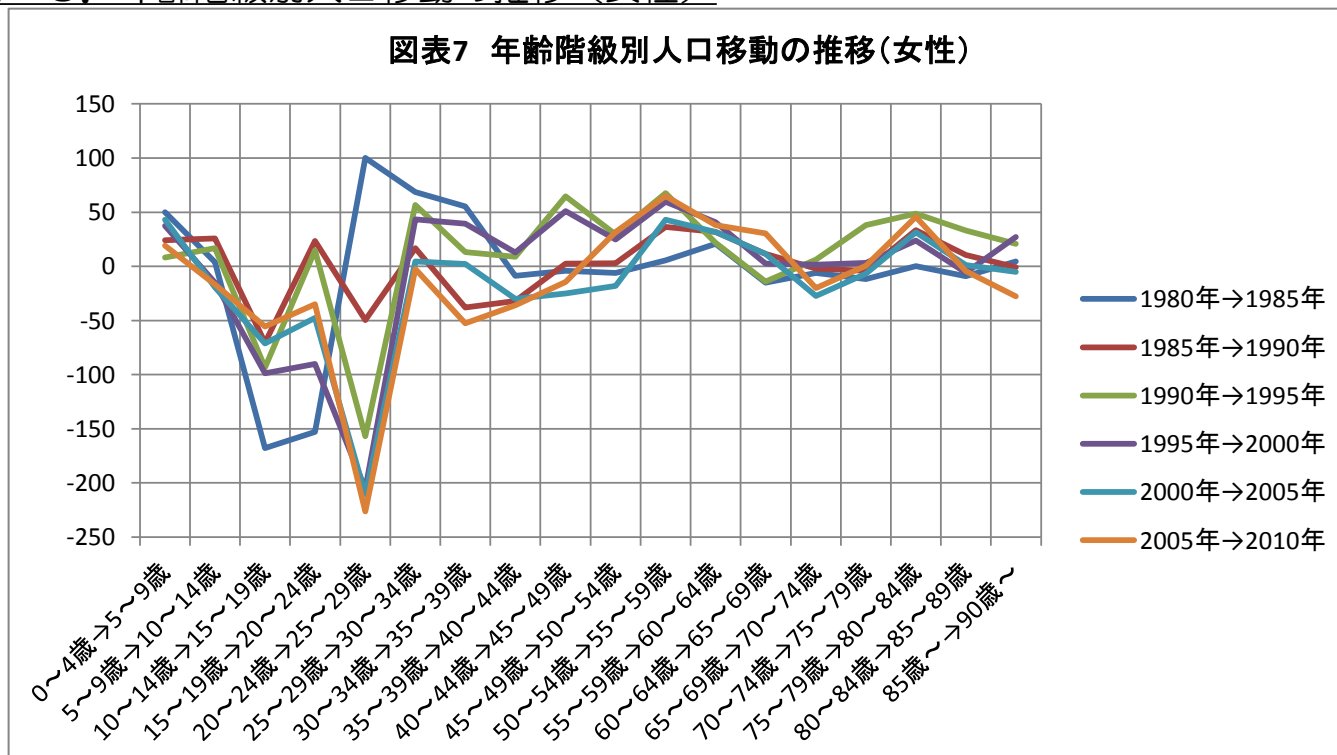
女性は20-24歳から25-29歳になる時に大きく移動がある。就職、結婚を機に市外に転出する人が多いと推測される。

2-2. 年齢階級別人口移動の推移（男性）



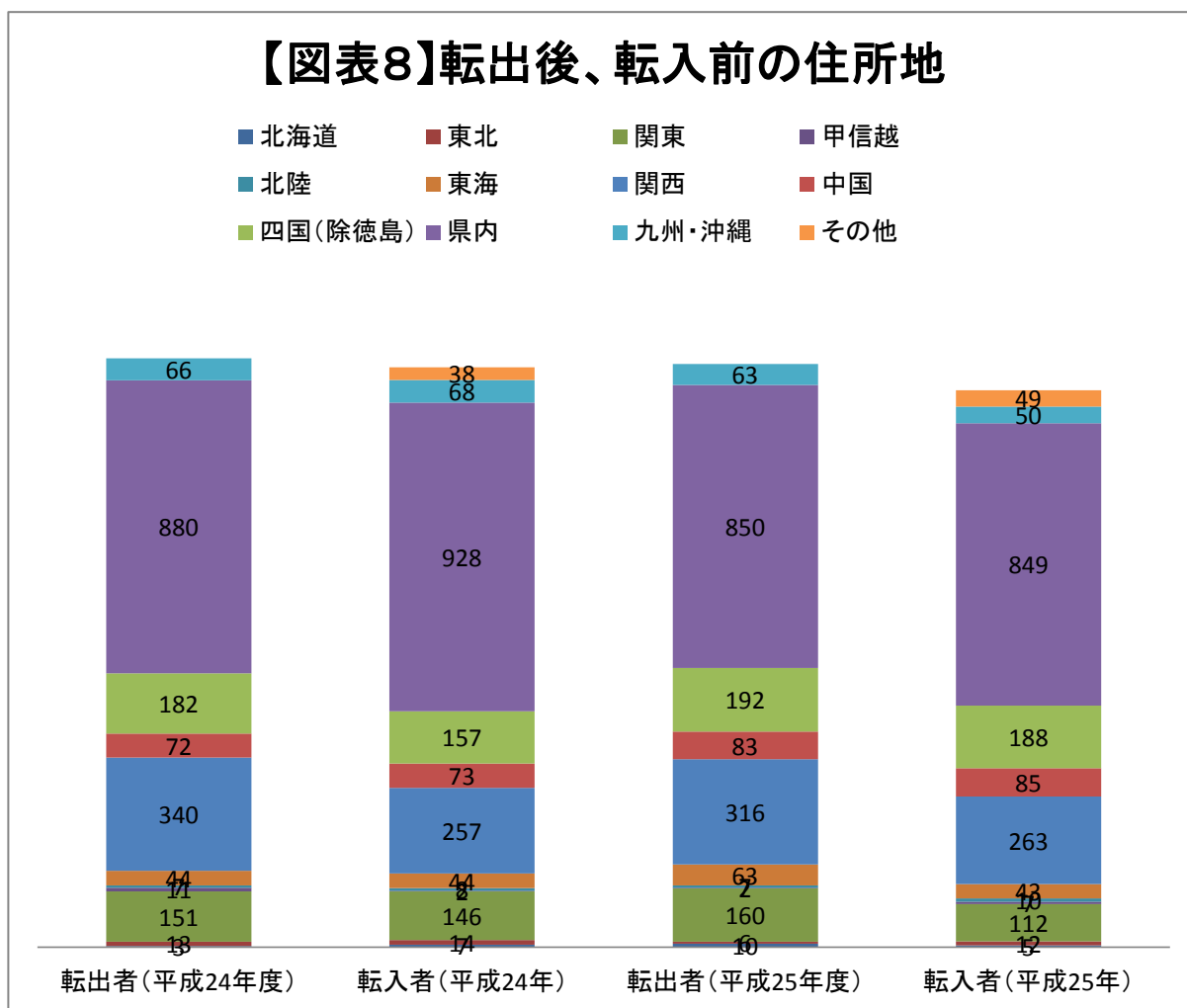
15-19歳から20-24歳の移動が一番多いが、年々この山が小さくなってきている。
20-24歳から25-29歳の移動は転入超過になっている。これは転勤および転職が関係あると推測される。

2-3. 年齢階級別人口移動の推移（女性）



20-24歳から25-29歳の移動が一番多い。これは、就職、転職が契機となっていると考えられる。年々この傾向は大きくなっている。

3. 鳴門市における転入転出の分析

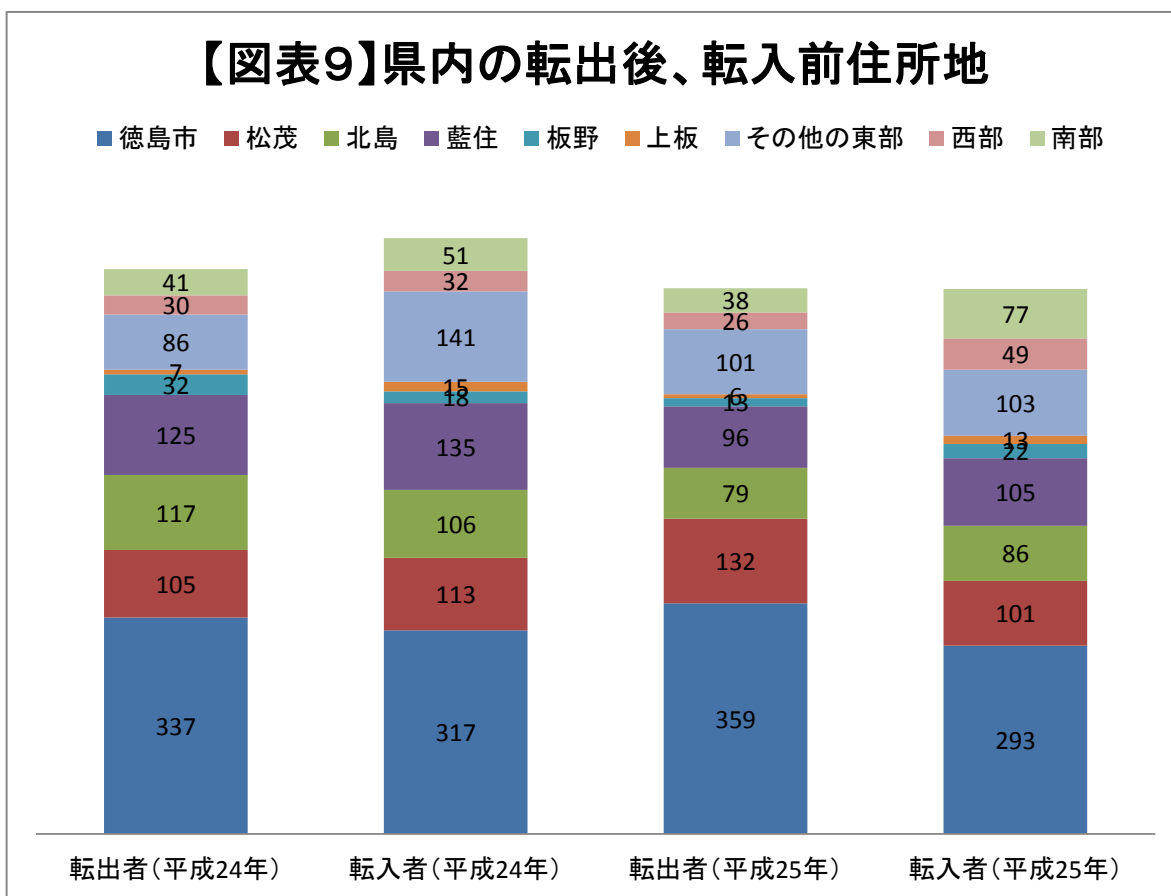


(出典) 住民基本台帳より

最も転出・転入が多いのは、県内移動となっている。ただ、単純に転出超過にはなっておらず、平成24年は48人の転入超過、平成25年は1人の転出超過である。続いて近畿圏への転出・近畿圏からの転入が多くなっており、こちらは平成24年は83人、平成25年は49人の転出超過となっている。県内と近畿圏の移動で、鳴門市の転出・転入の約8割を占めている。

続いて、四国内への転出・四国内からの転入が多く、その次が関東圏への転出・関東圏からの転入である。

3-2. 鳴門市から県内へ転出した後の住所地、県内から転入する方の前の住所地

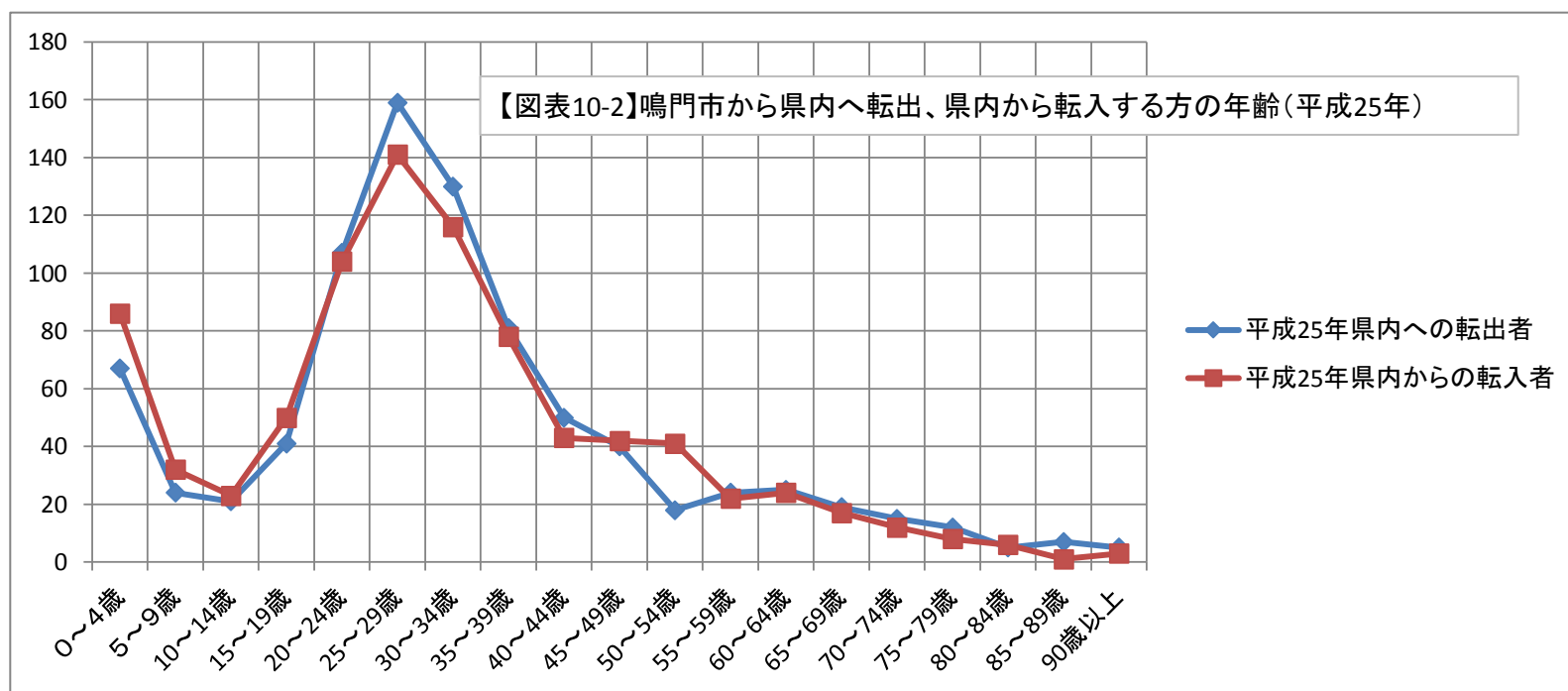
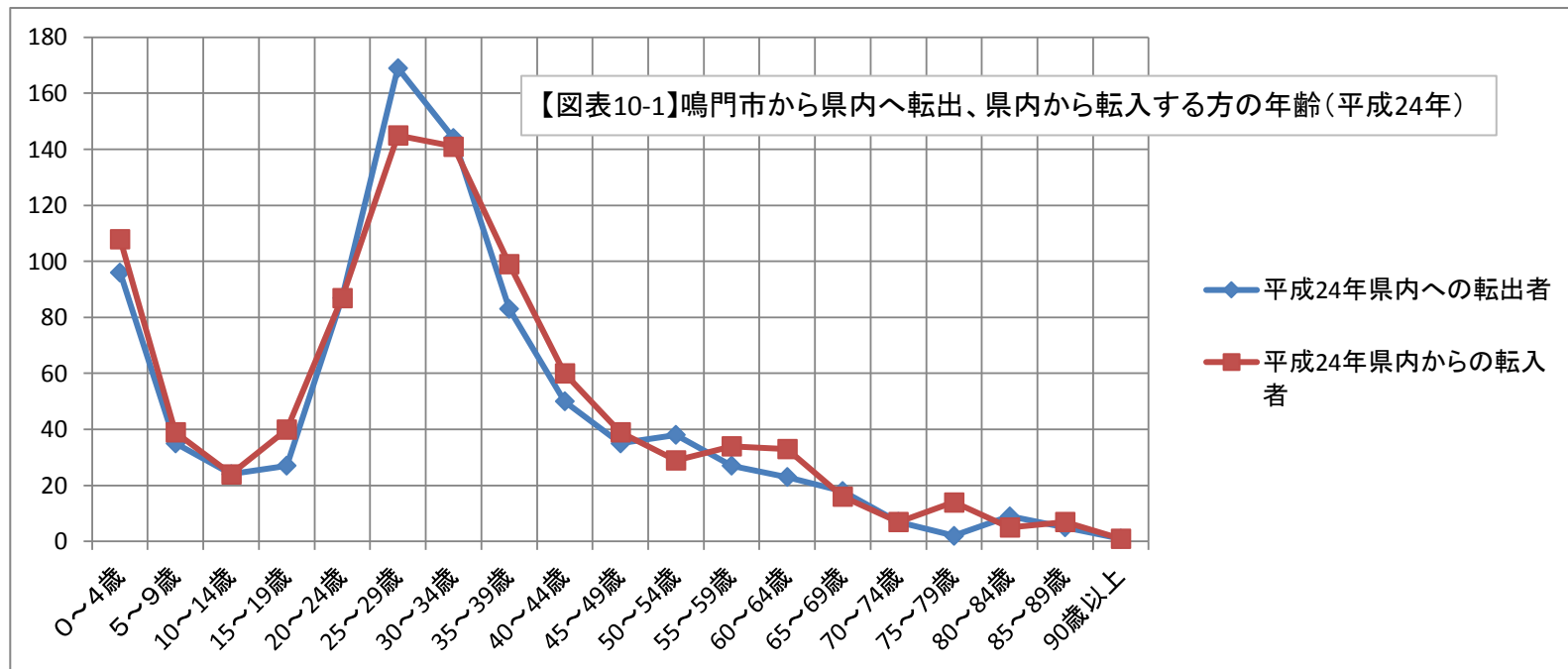


(出典) 住民基本台帳より

県内においてもっとも転出・転入が多いのは、徳島市となっており、平成24年は20人、平成25年は66人の転出超過となっている。

続いて多いのは板野郡への転出、板野郡からの転入で、平成24年、平成25年とも板野郡全体では1人の転入超過である。特に松茂、北島、藍住の三町との移動が多い。三町とも単純な転出超過、転入超過になっておらず、転出超過が、転入超過が交互に入れ替わっている。

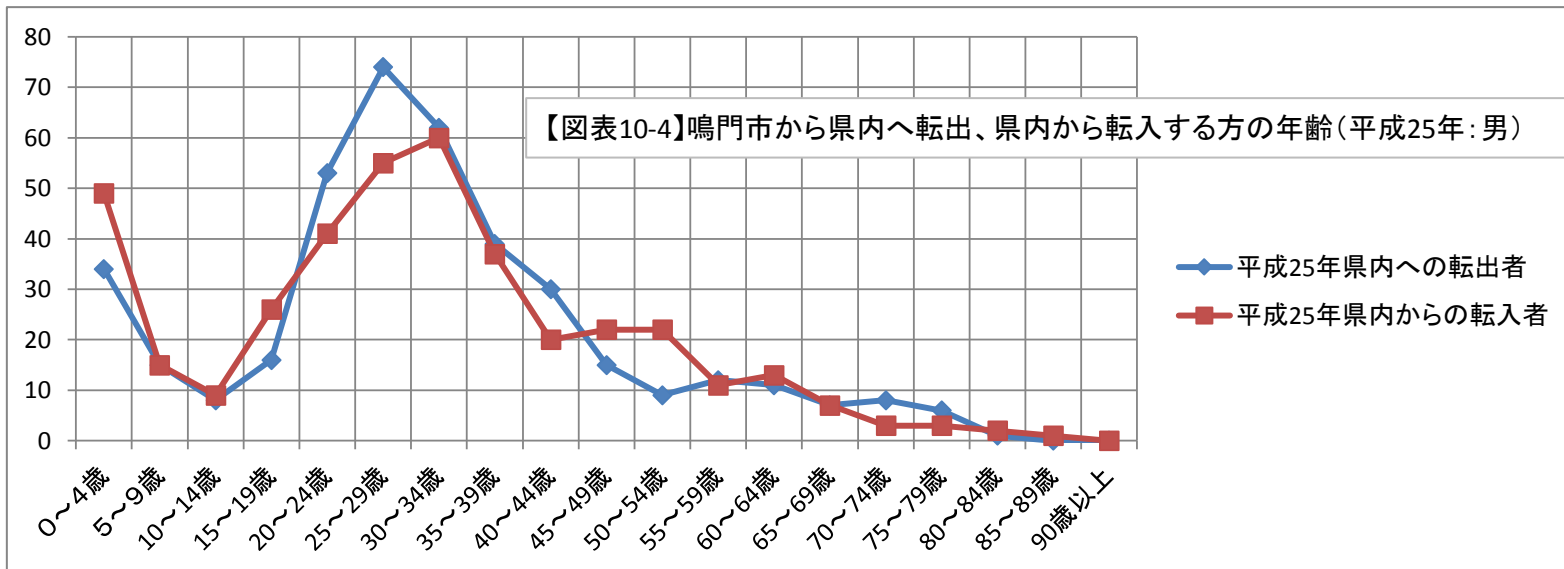
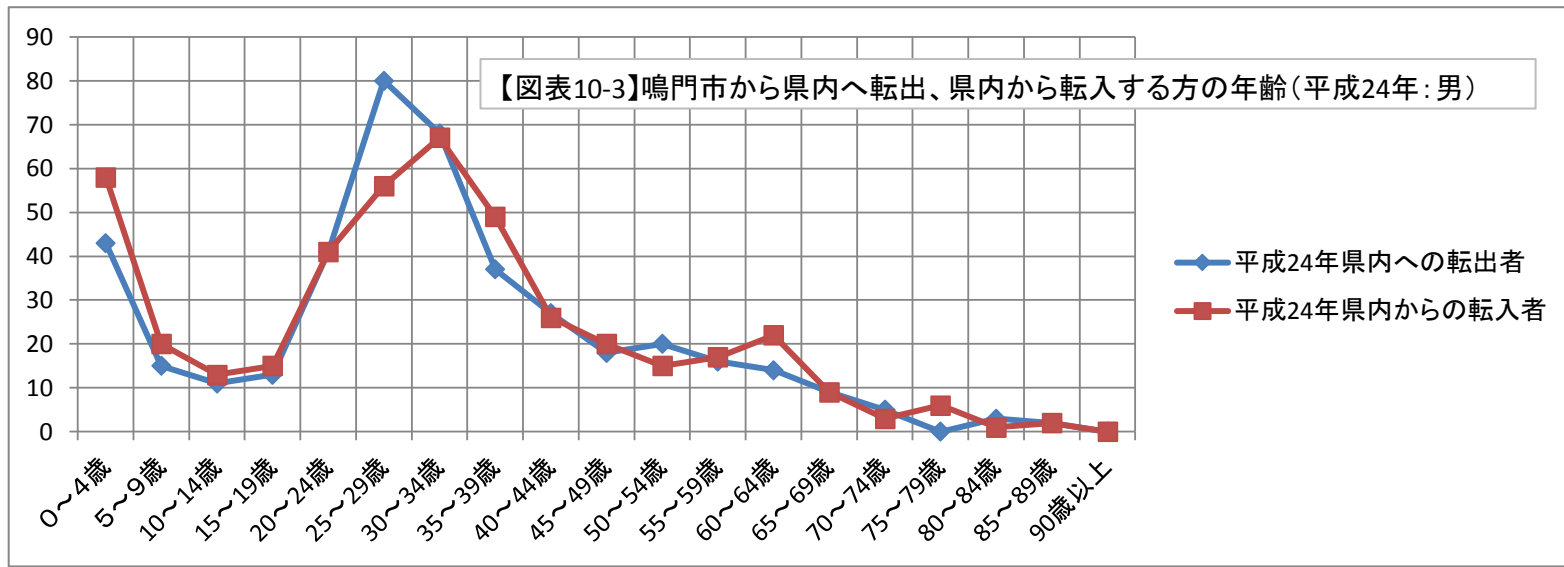
3-3. 鳴門市から県内への年齢別転出数、県内からの年齢別転入数



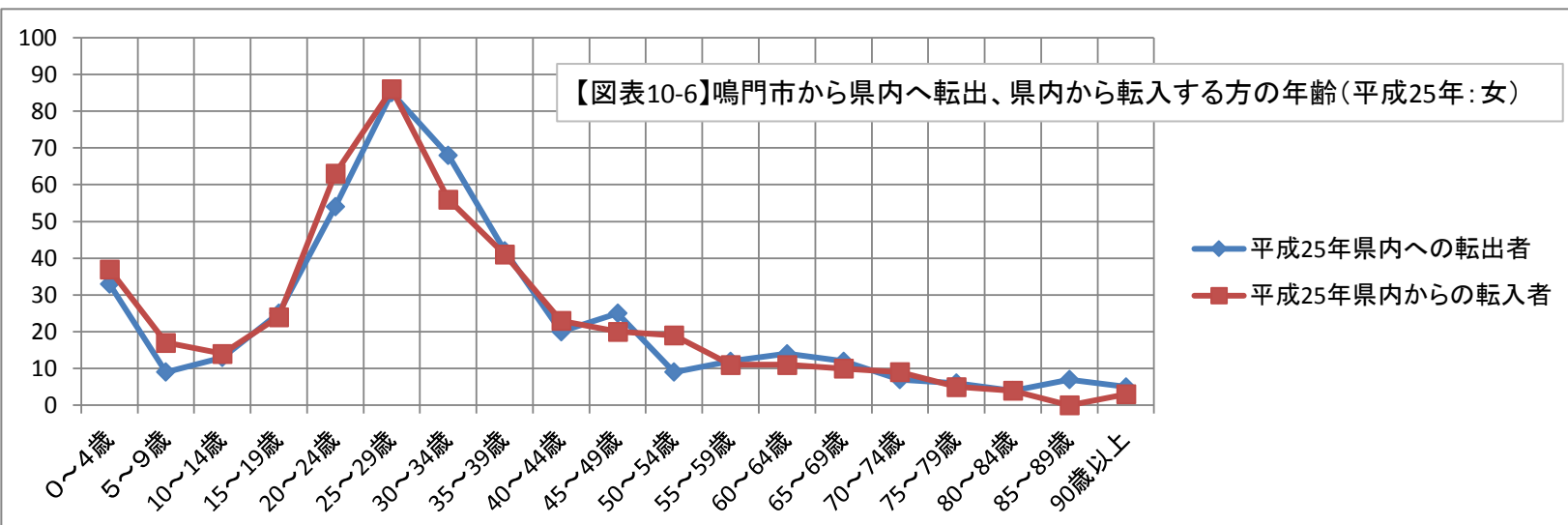
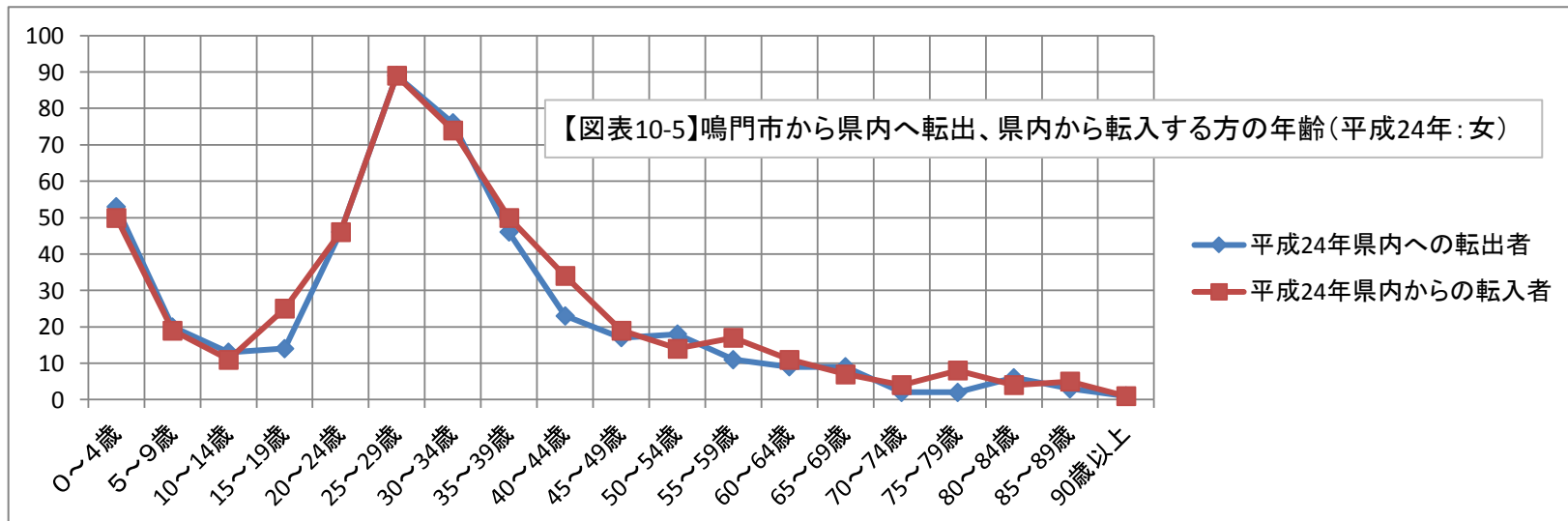
(出典) 住民基本台帳より

20-24歳、25-29歳、30-34歳、35-39歳の移動が多く、転出、転入とも25-29歳がピークになっており、ピークに於いては若干の転出超過。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと推測される。

また0-4歳の移動が多い。つまり家族構成の中に子どもがいる場合、子どもの年齢が0-4歳の間に転出・転入するケースが多いと考えられる。

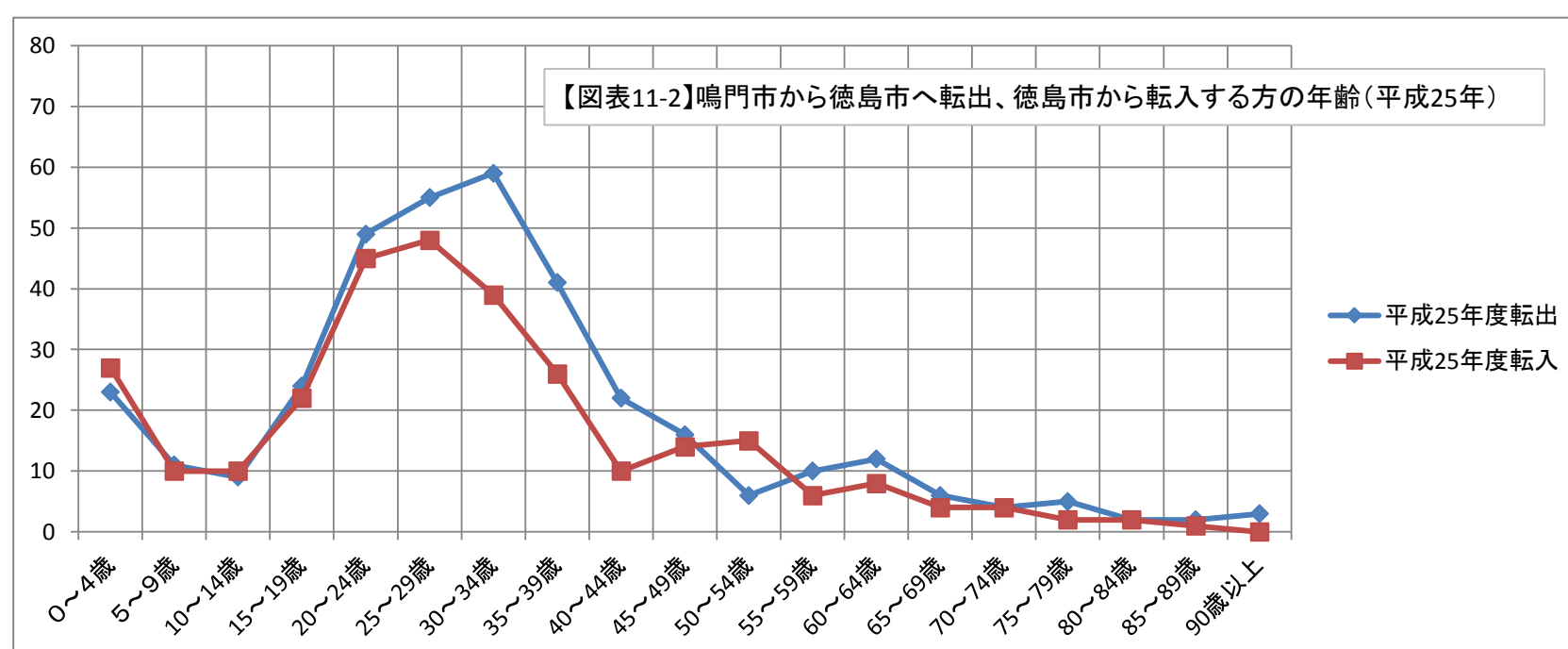
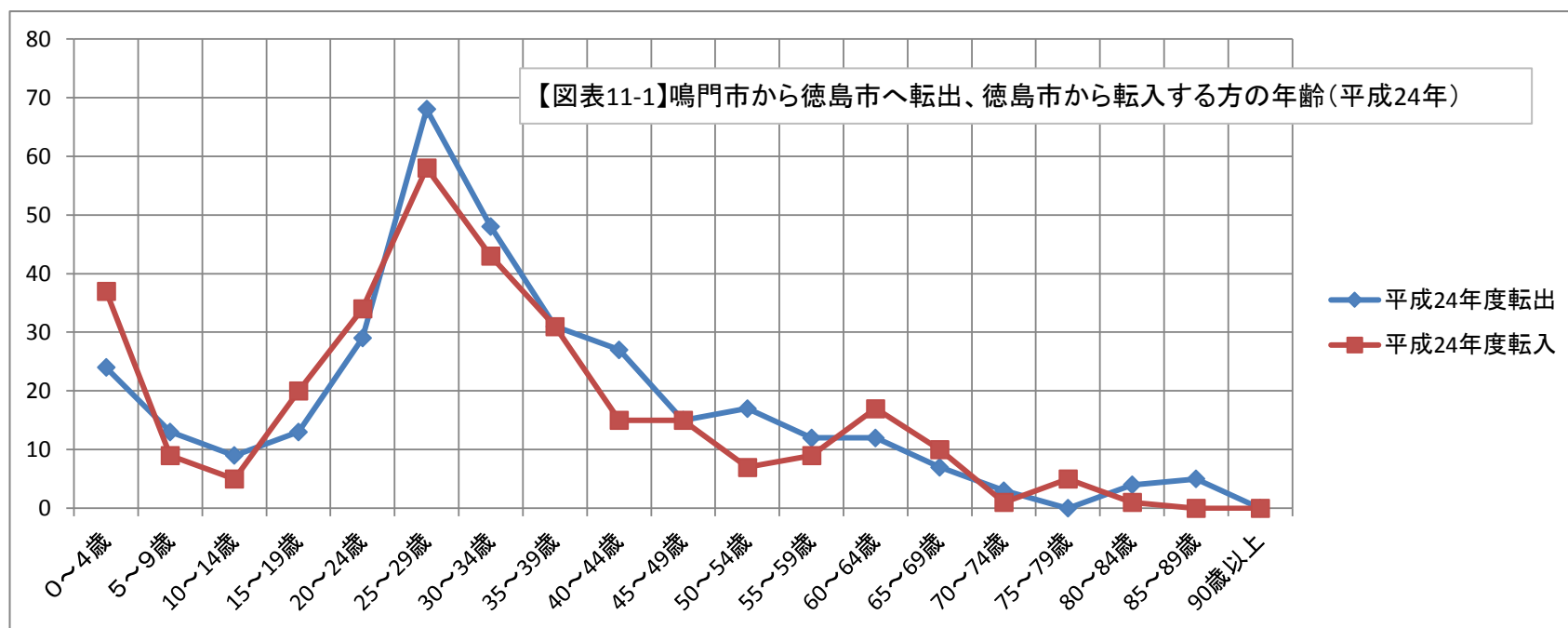


20-24歳、25-29歳、30-34歳、35-39歳の移動が多く見られるが、転出のピークが25-29歳、転入のピークが30-34歳と、ピークがずれている。転出が就職・転職・結婚・転居、転入が転職・結婚・転居を機とした移動が多いと思われる。



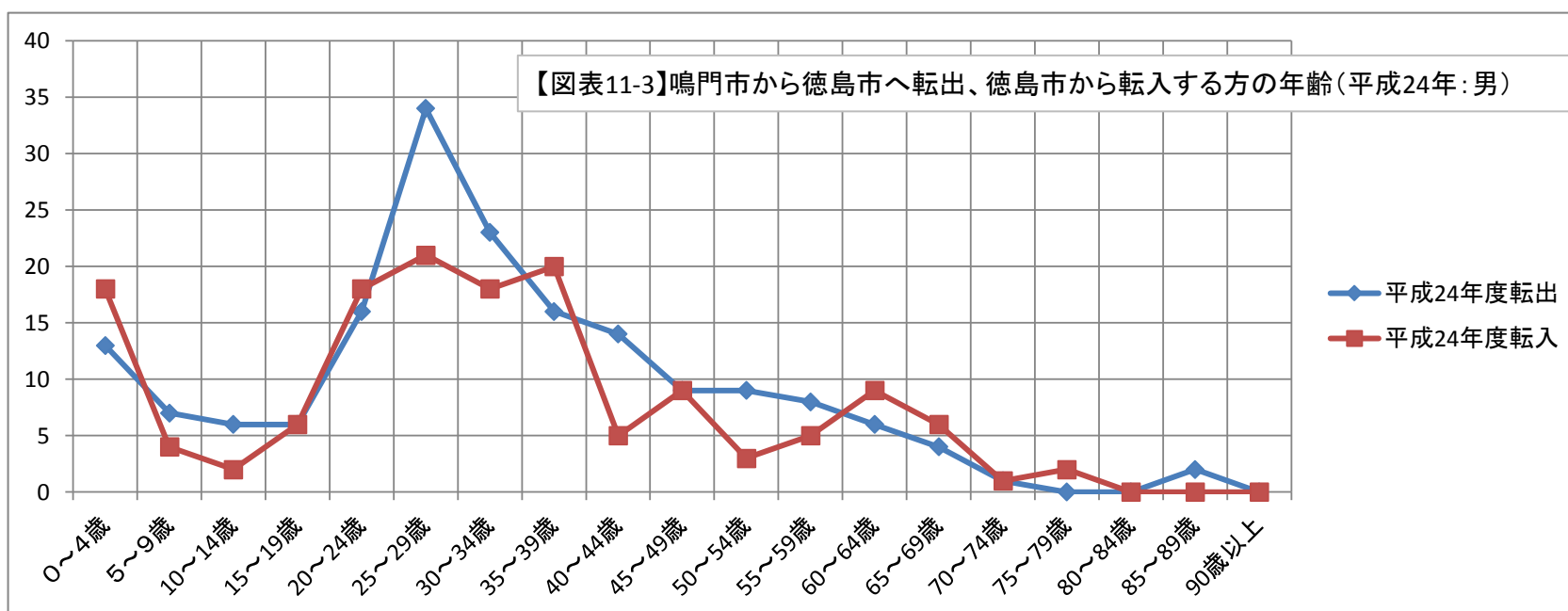
20-24歳、25-29歳、30-34歳、35-39歳の移動が多く見られ、転出・転入ともピークが25-29歳となっており、就職・転職・結婚・転居を機とする移動が多いと思われる。

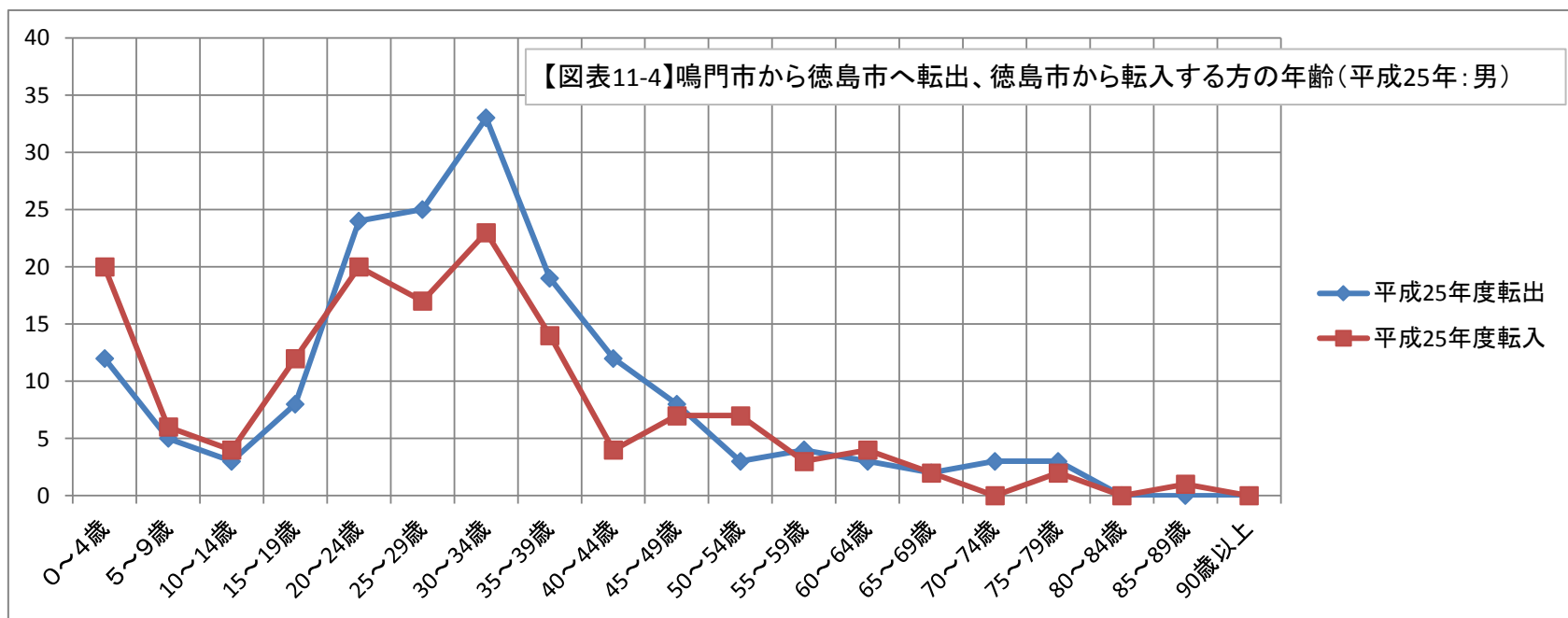
3-4. 鳴門市から徳島市への年齢別転出数、徳島市からの年齢別転入数



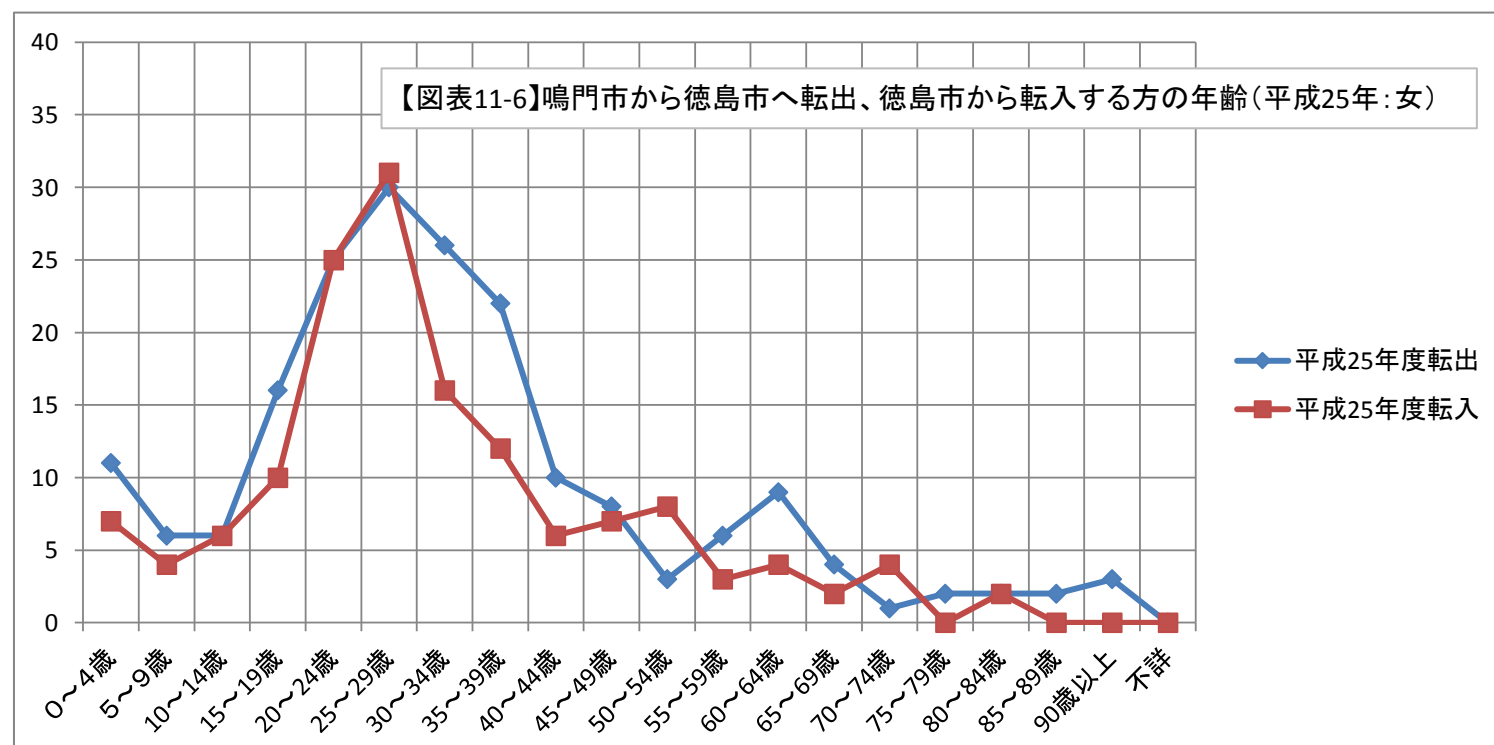
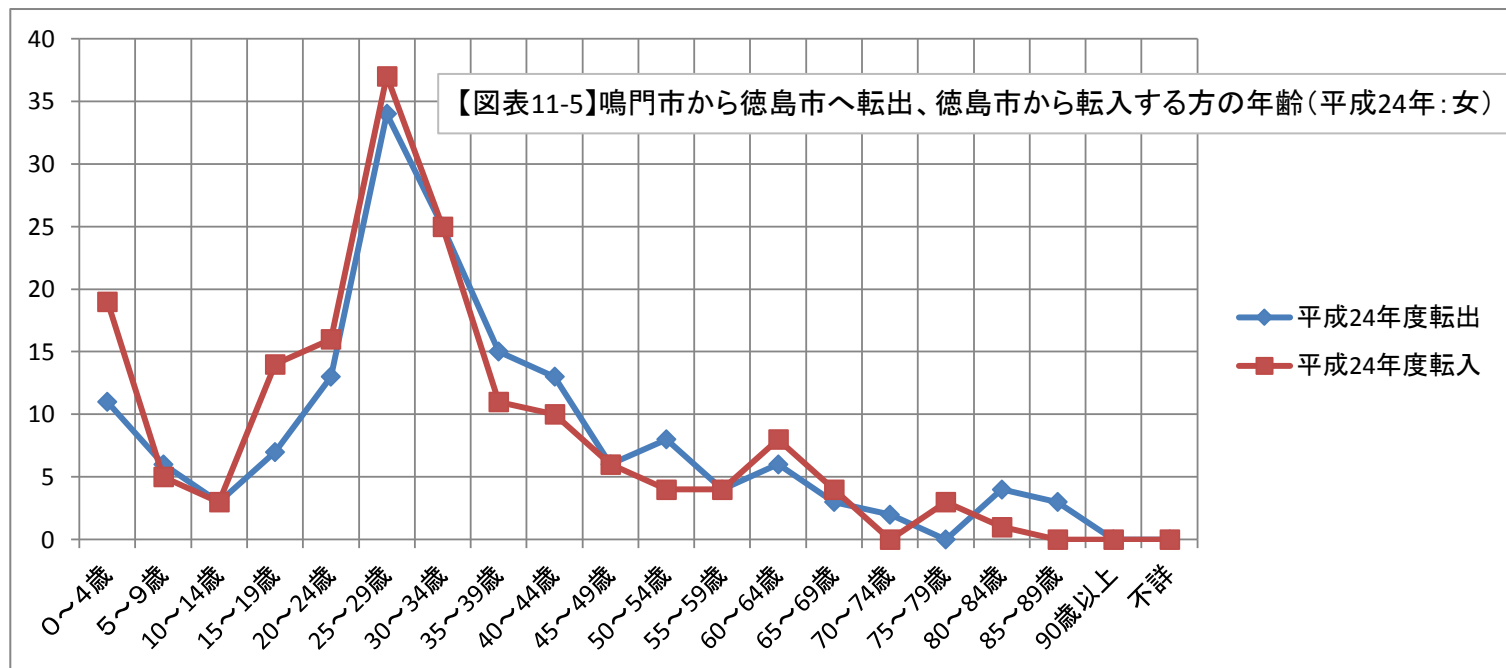
(出典) 住民基本台帳より

平成24年の転出・転入、平成25年の転入は25-29歳がピーク。平成25年の転出のみ、30-34歳がピークとなっている。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと思われる。



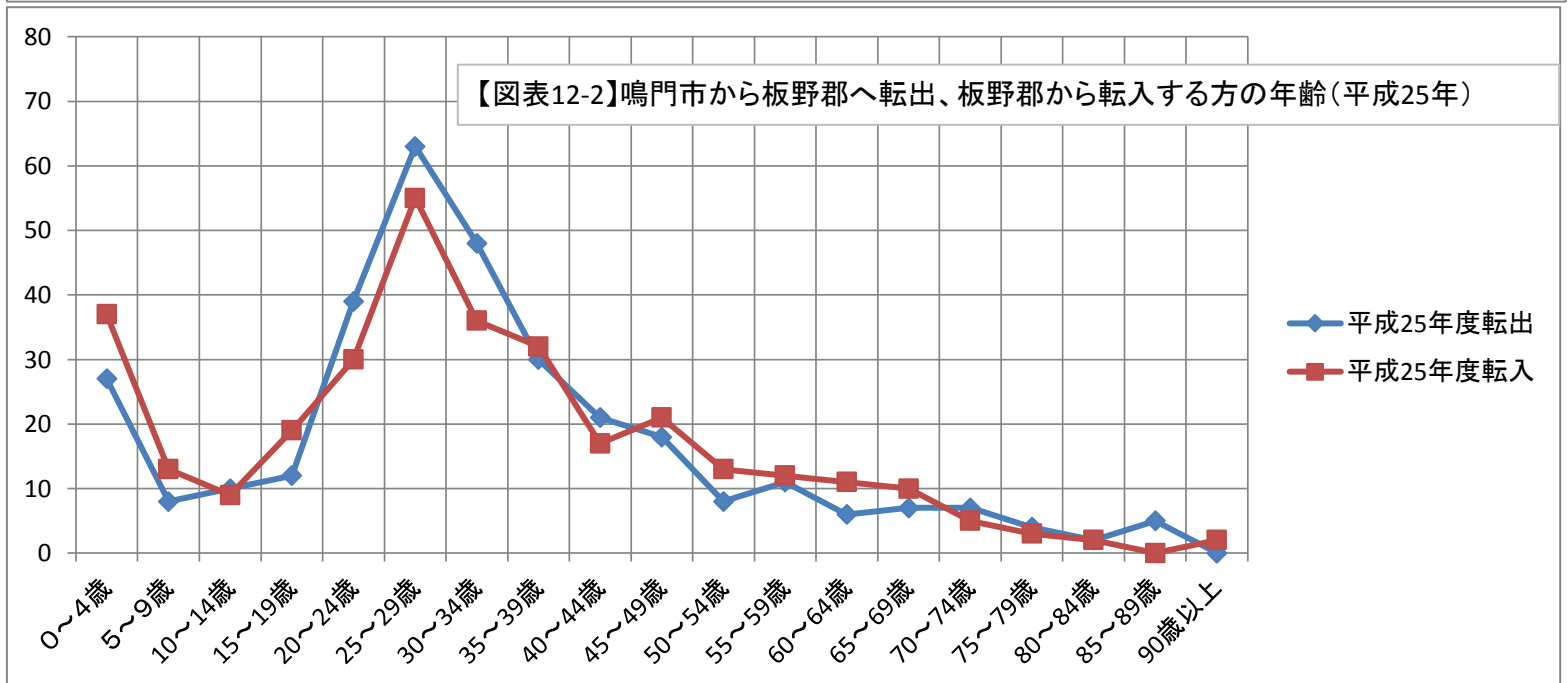
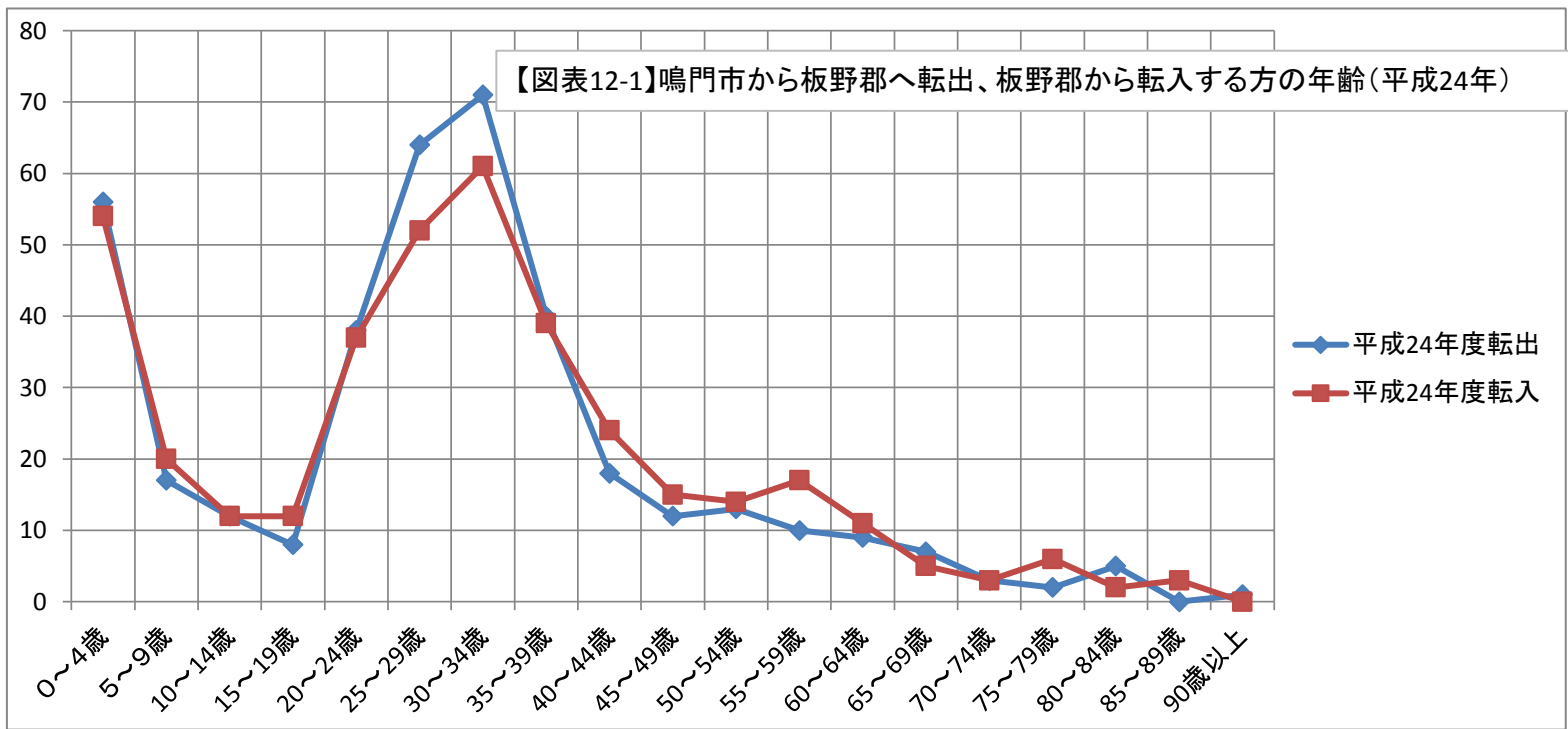


平成24年の転出は25-29歳、平成25年の転出は30-34歳がピーク。転入のピークは突出した年代がなく、20-24歳、25-29歳、30-34歳で20人前後の転入数がピークとなっている。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと思われるが、転入のピーク値の低さは、鳴門市から徳島市への人口のプル要因の弱さに起因すると考えられる。



平成24年、平成25年の転出・転入とも25-29歳でピークとなっている。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと思われる。

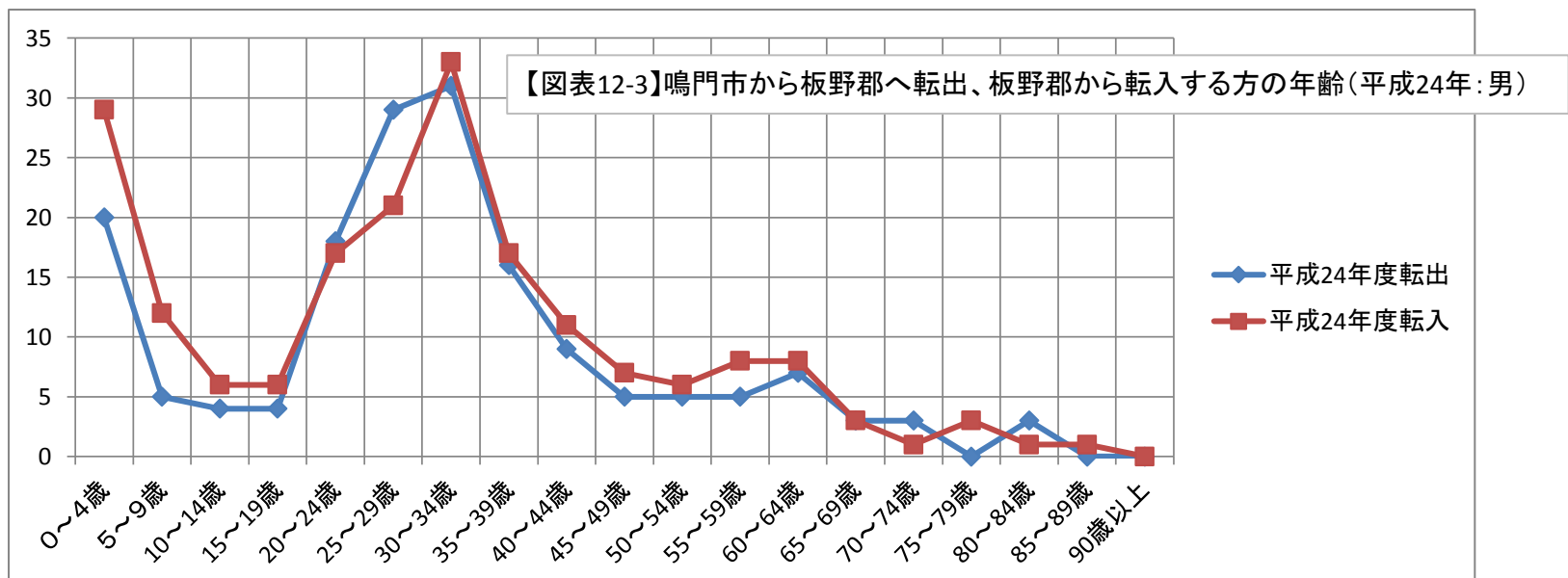
3-5. 鳴門市から板野郡への年齢別転出数、板野郡からの年齢別転入数

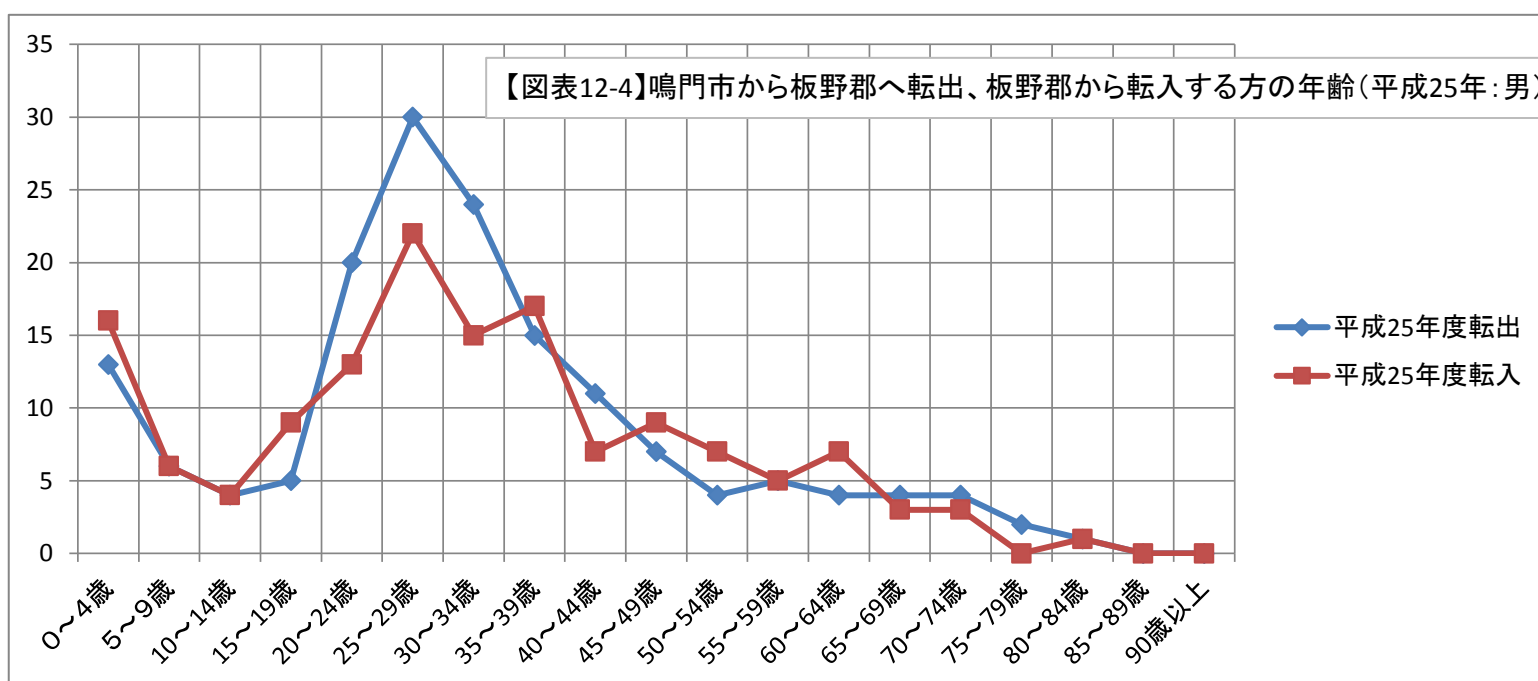


(出典) 住民基本台帳より

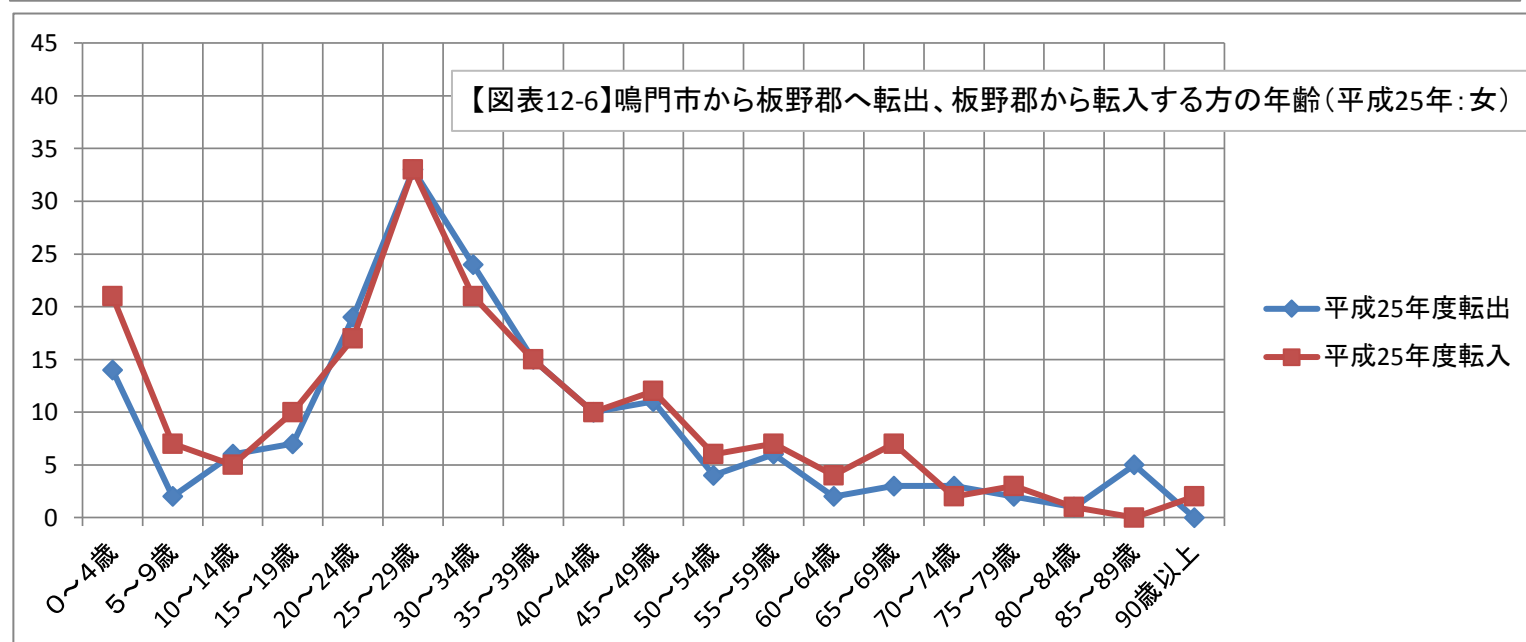
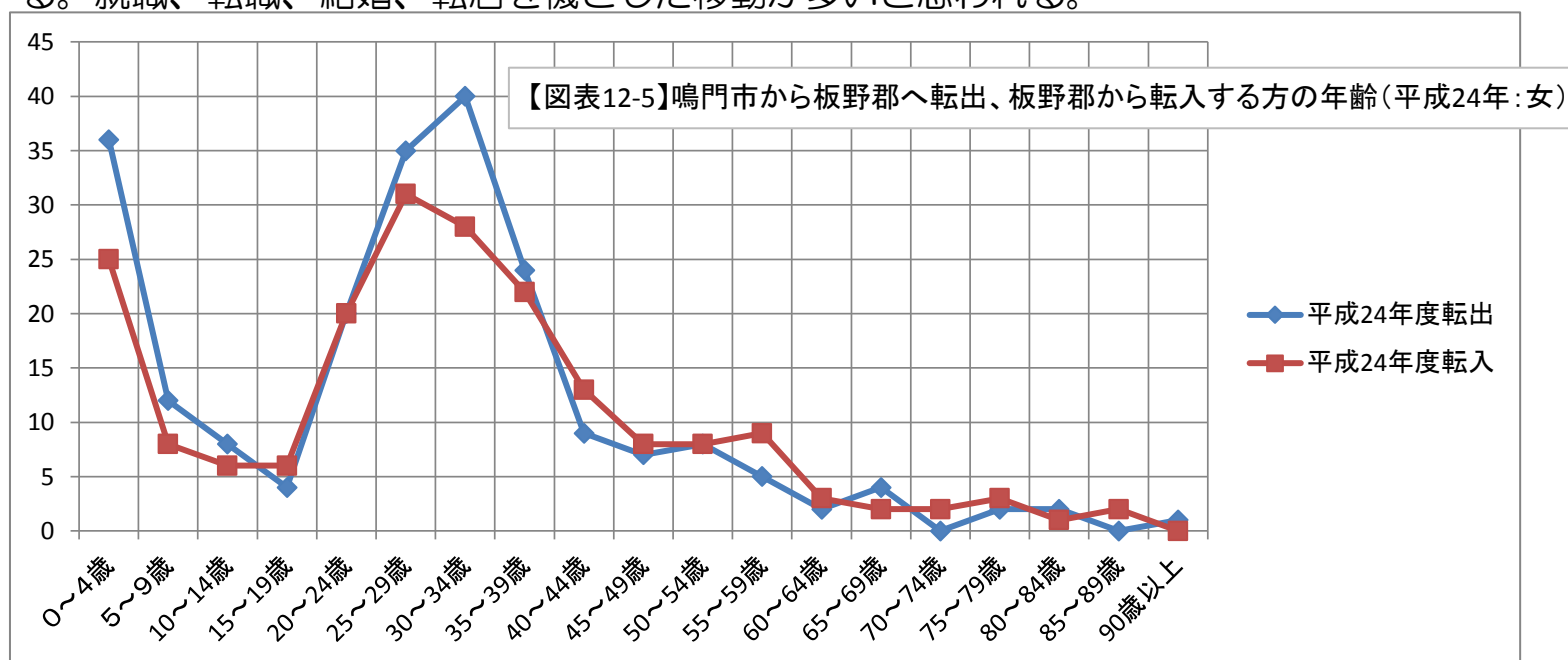
転出、転入ともにピークは平成24年は25-29歳、平成25年は30-34歳となっており、転出超過となっている。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと思われる。また0-4歳の移動も多く、その年齢の子どもがいる世代の移動が多いと推定される。

しかし、全体では転入超過となっており、子供世代や40代、50代の転入で、超過がある。



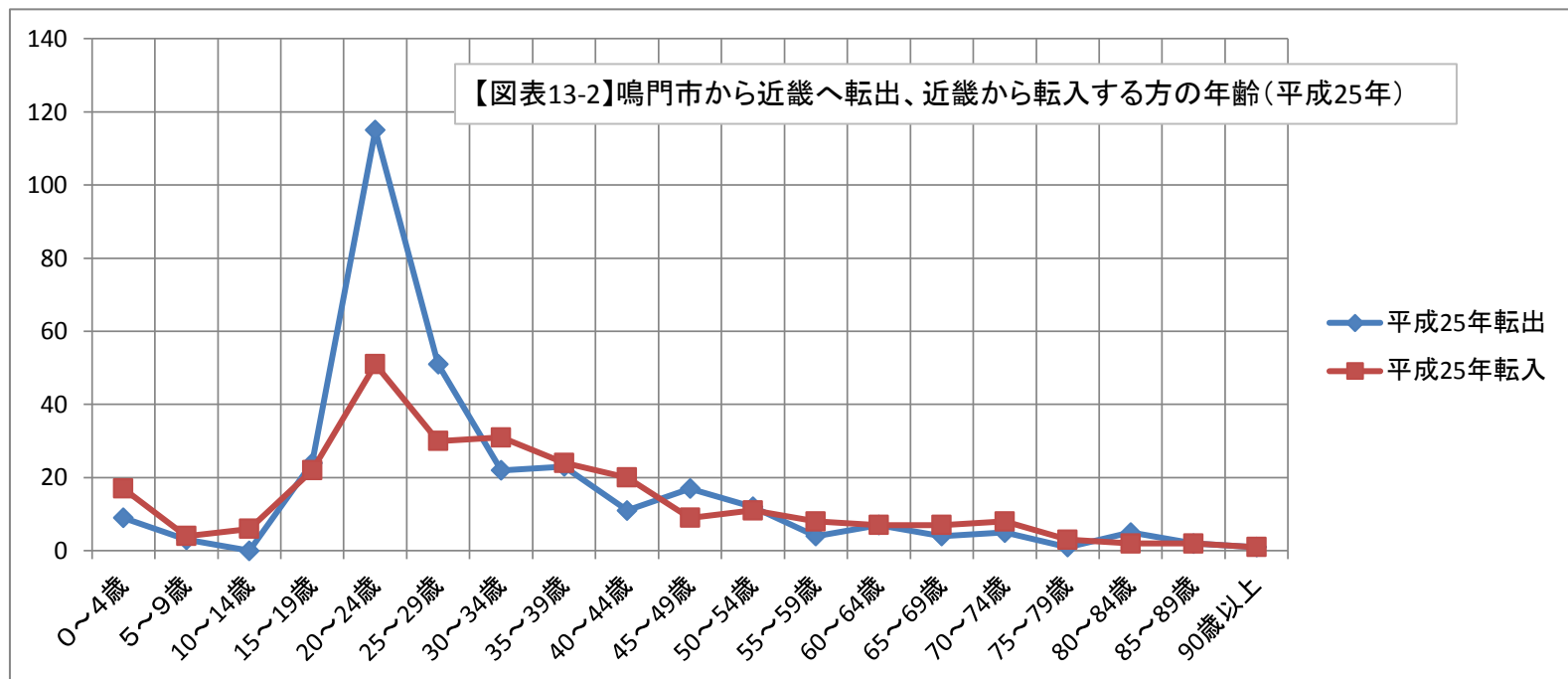
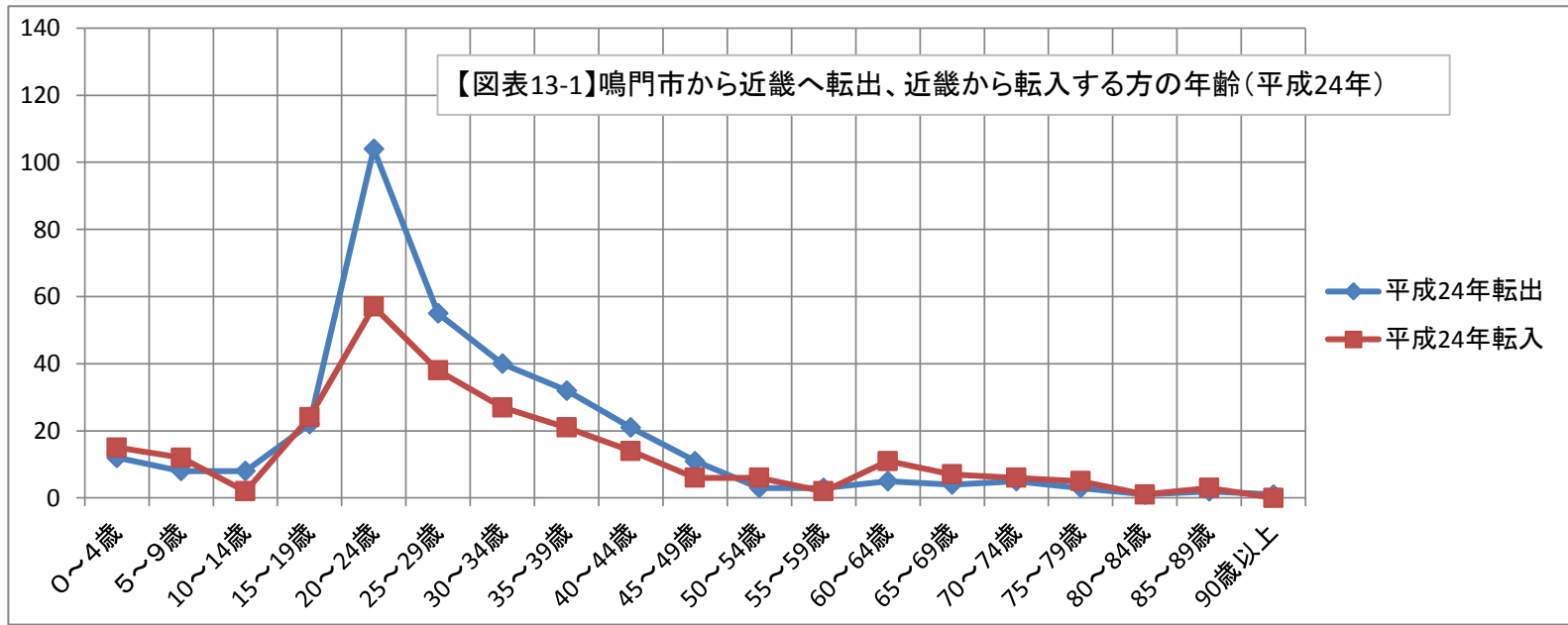


平成24年のピークは30-34歳代、平成25年のピークは25-29歳代である。全体数では、平成24年は転入超過で、30-34歳、0-4歳、40代、50代で転入超過となっている。平成25年は転出超過となっており、20代、30-34歳で大きく転出超過となっている。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと思われる。



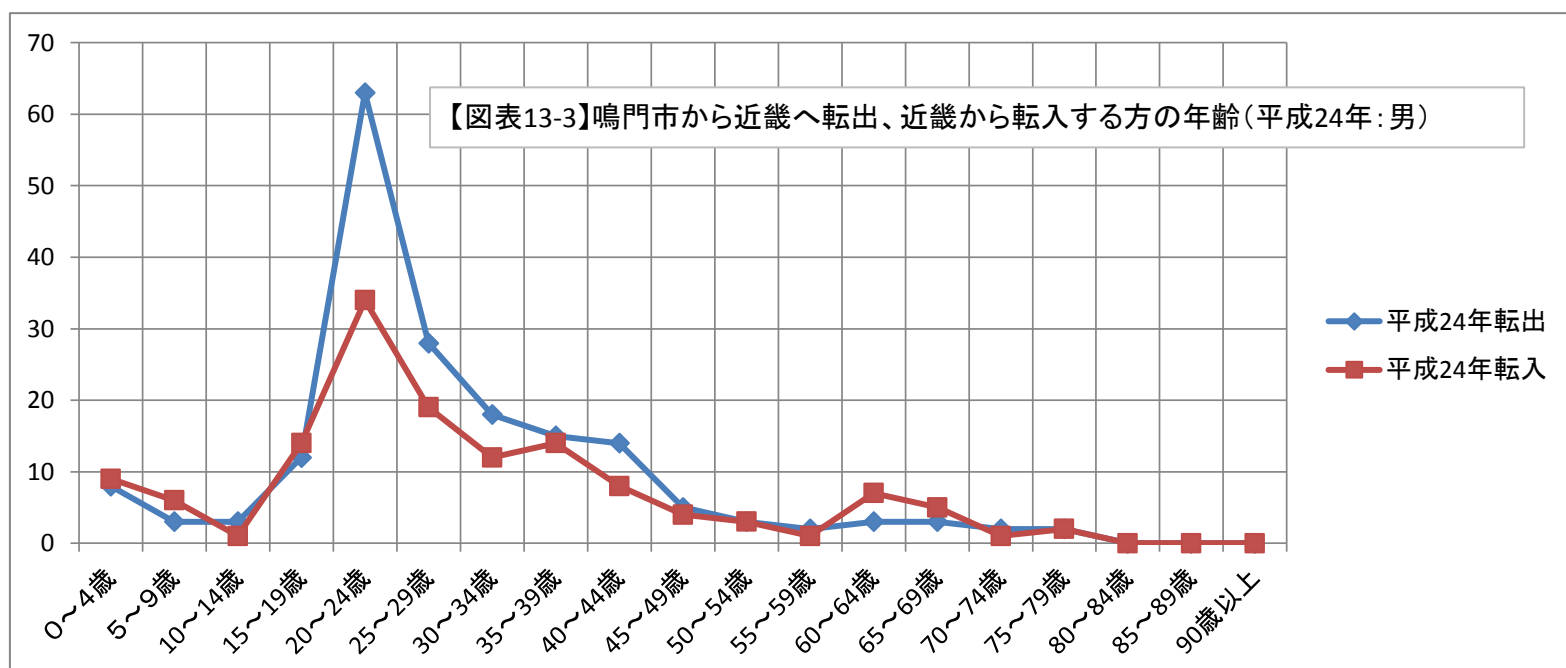
平成24年は転出のピークは30-34歳、転入のピークは25-29歳で転出超過となっており、0-4歳、25-29歳、30-34歳で大きく転出超過となっている。平成25年のピークは25-29歳となっており、全体では転入超過であり、0-4歳、50代、60代の転入が超過である。就職、転職、結婚、転居を機とした移動が多いと思われる。

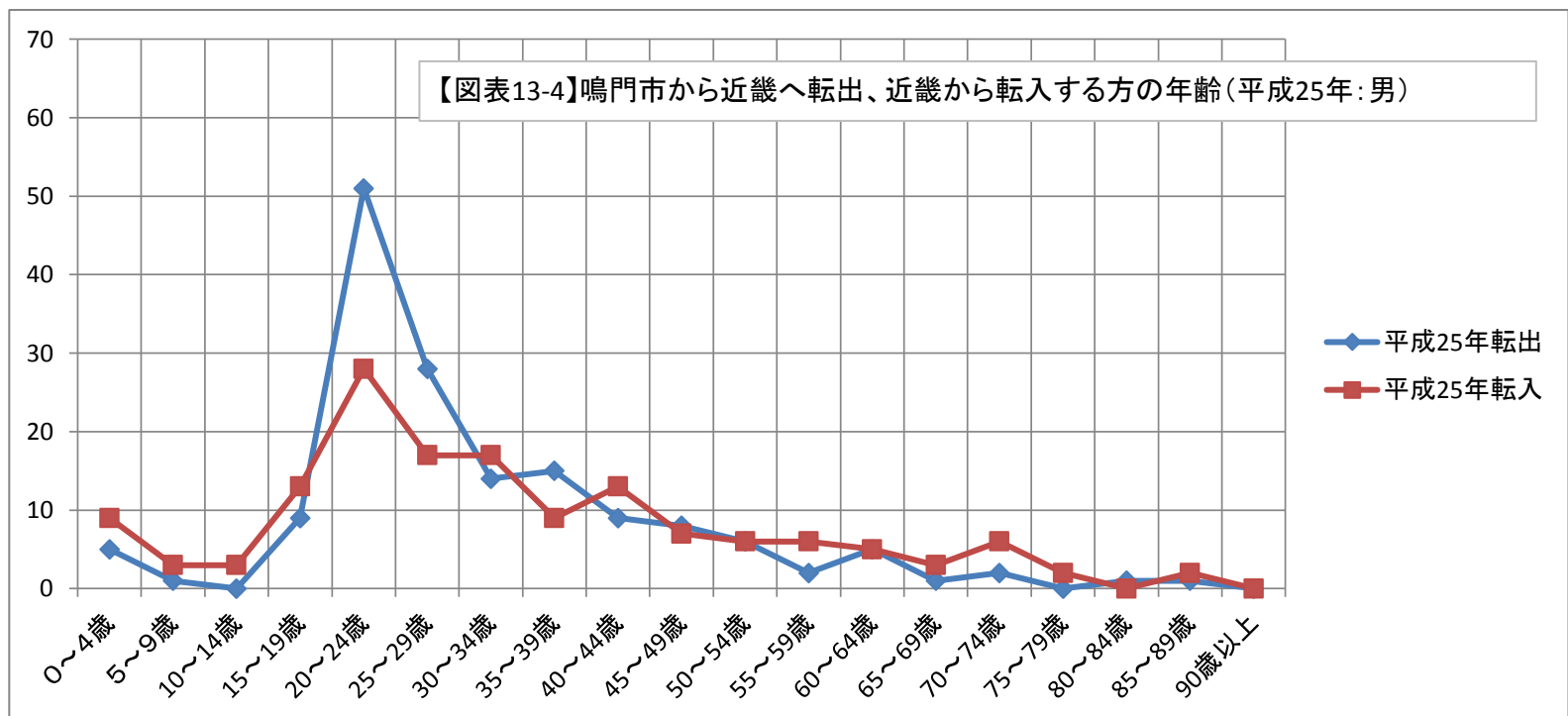
3-6. 鳴門市から近畿への年齢別転出数、近畿からの年齢別転入数



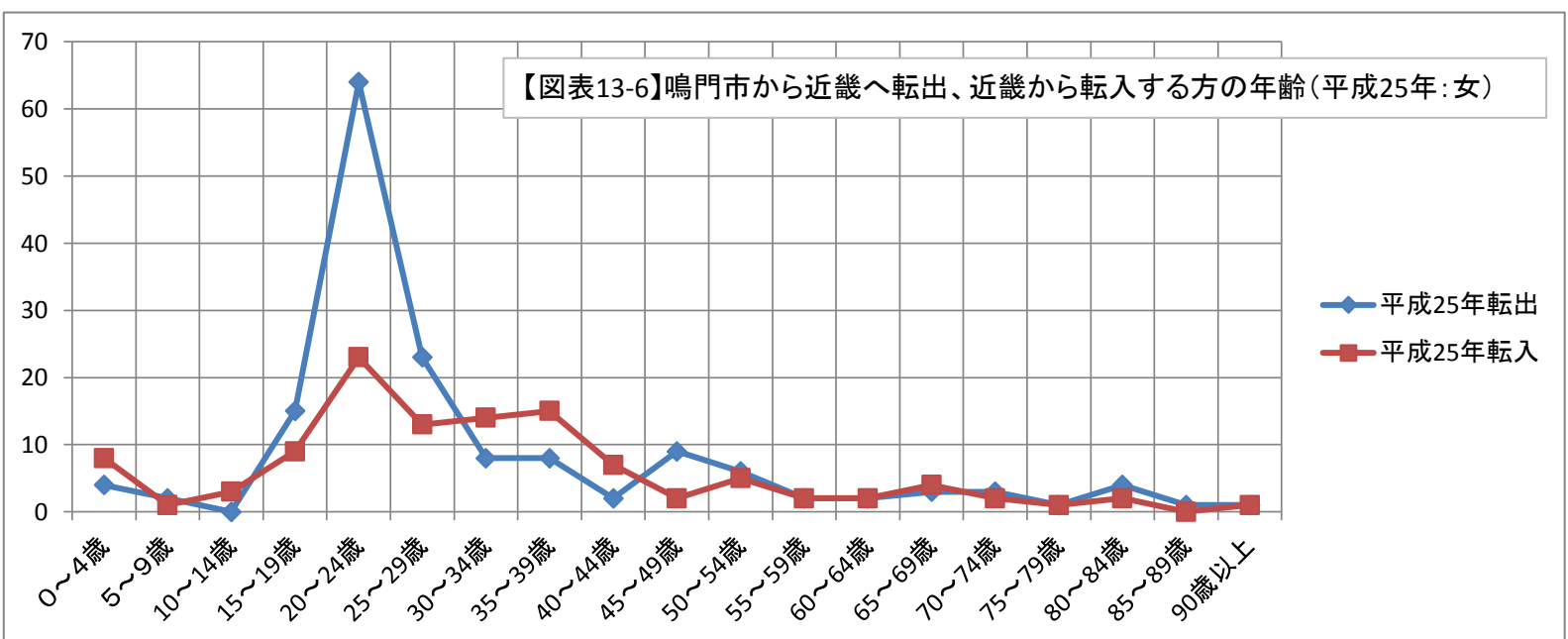
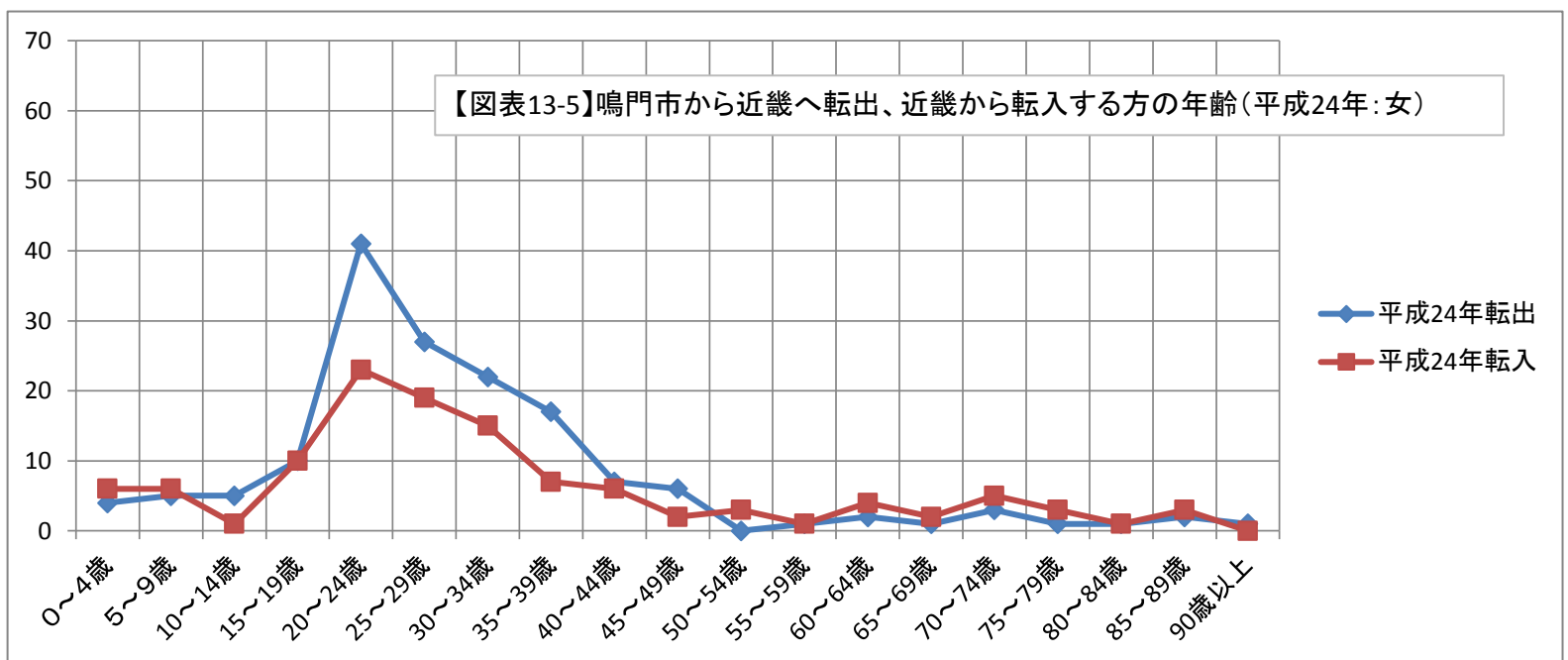
(出典) 住民基本台帳より

平成24年、25年ともに転出、転入のピークは20-24歳で転出超過となっており、転入数の約二倍の転出数となっている。0-4歳の移動が少ないことより、単身の就職機会による移動と考えられる。



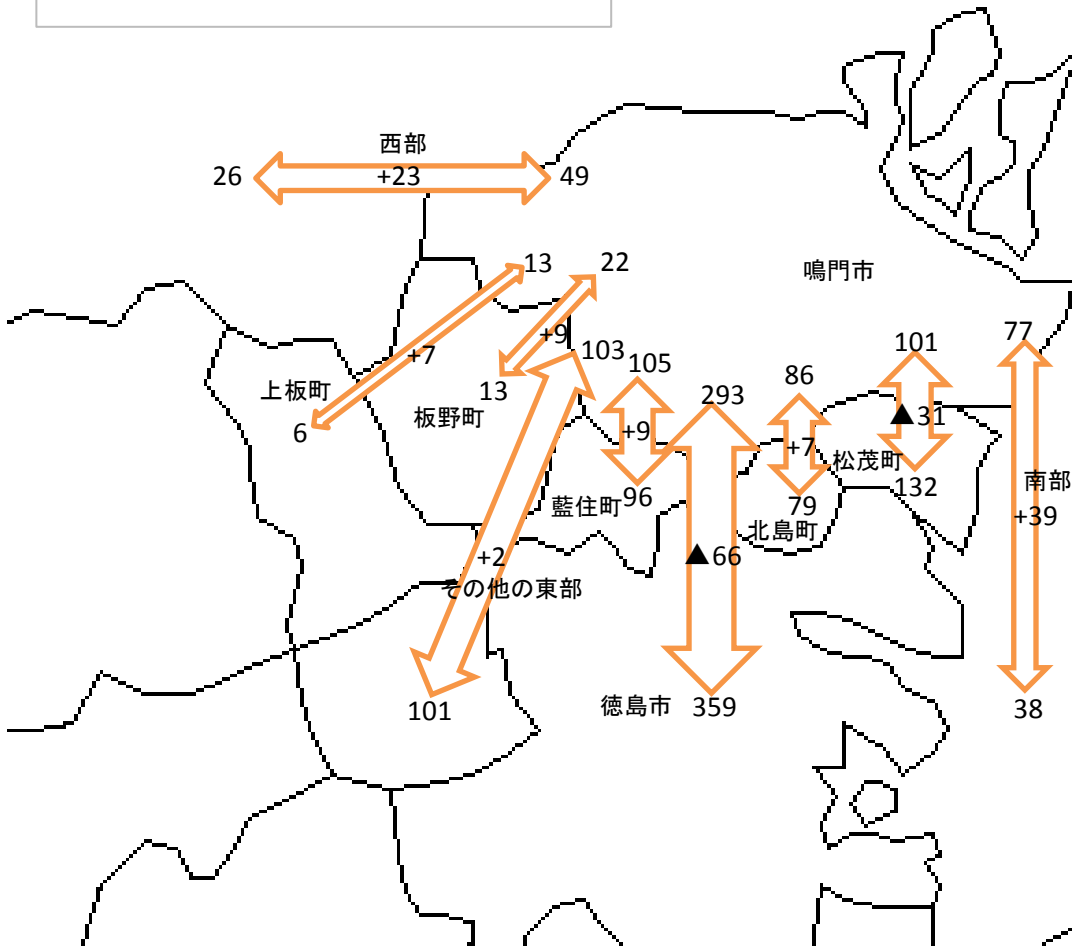


平成24年、25年ともに転出、転入ともに20-24歳がピークで、大幅に転出超過である。就職機会の転出が多いと考えられる。

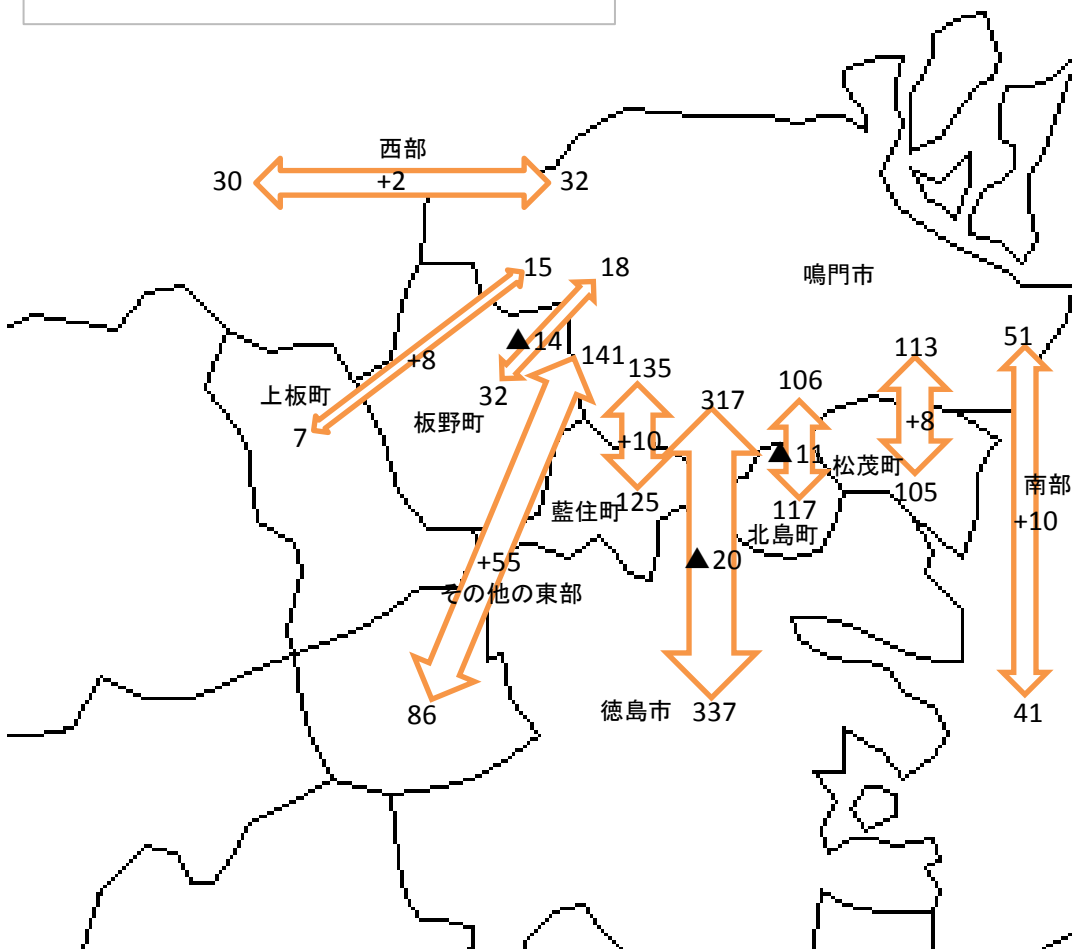


平成24年、25年ともに転出、転入ともに20-24歳がピークで、大幅に転出超過である。就職機会の転出が多いと考えられる。

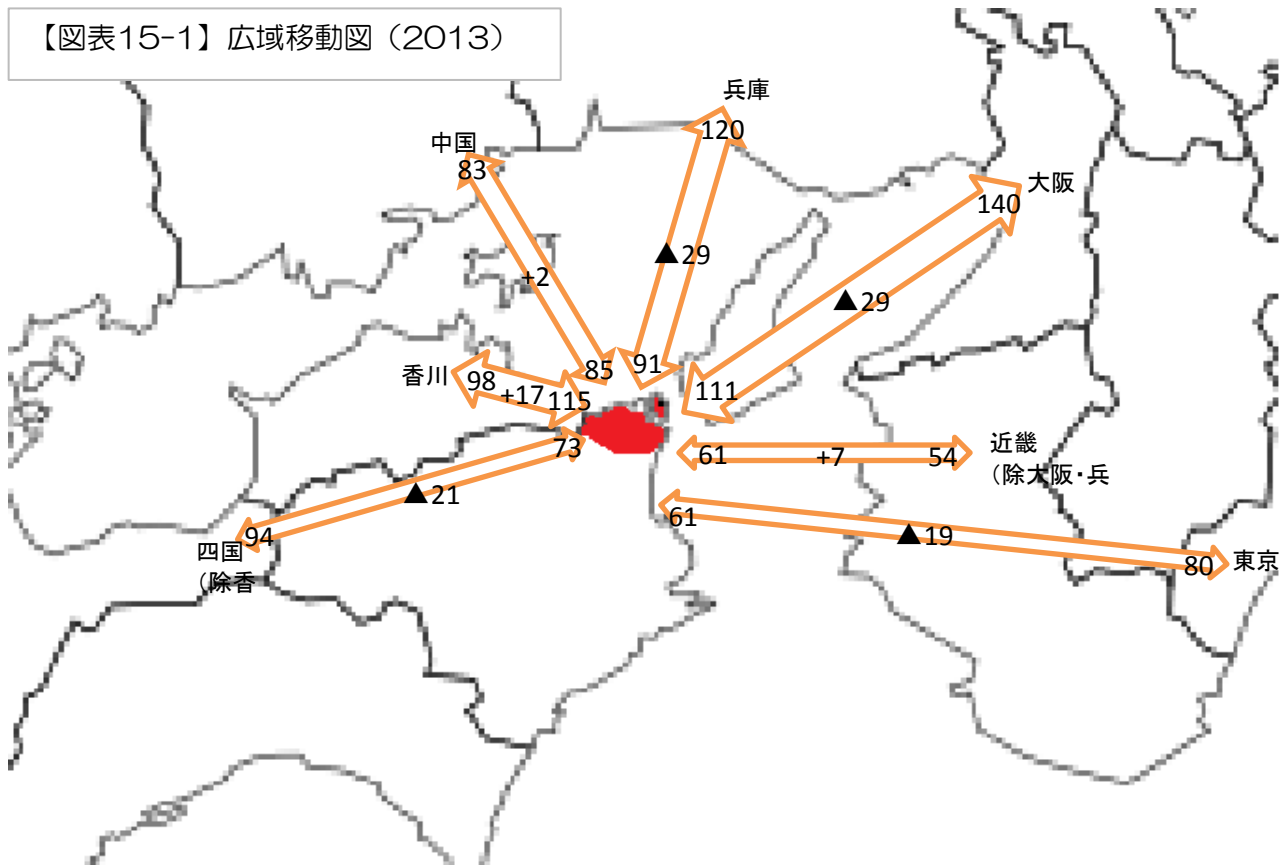
【図表14-1】 県内人口移動図



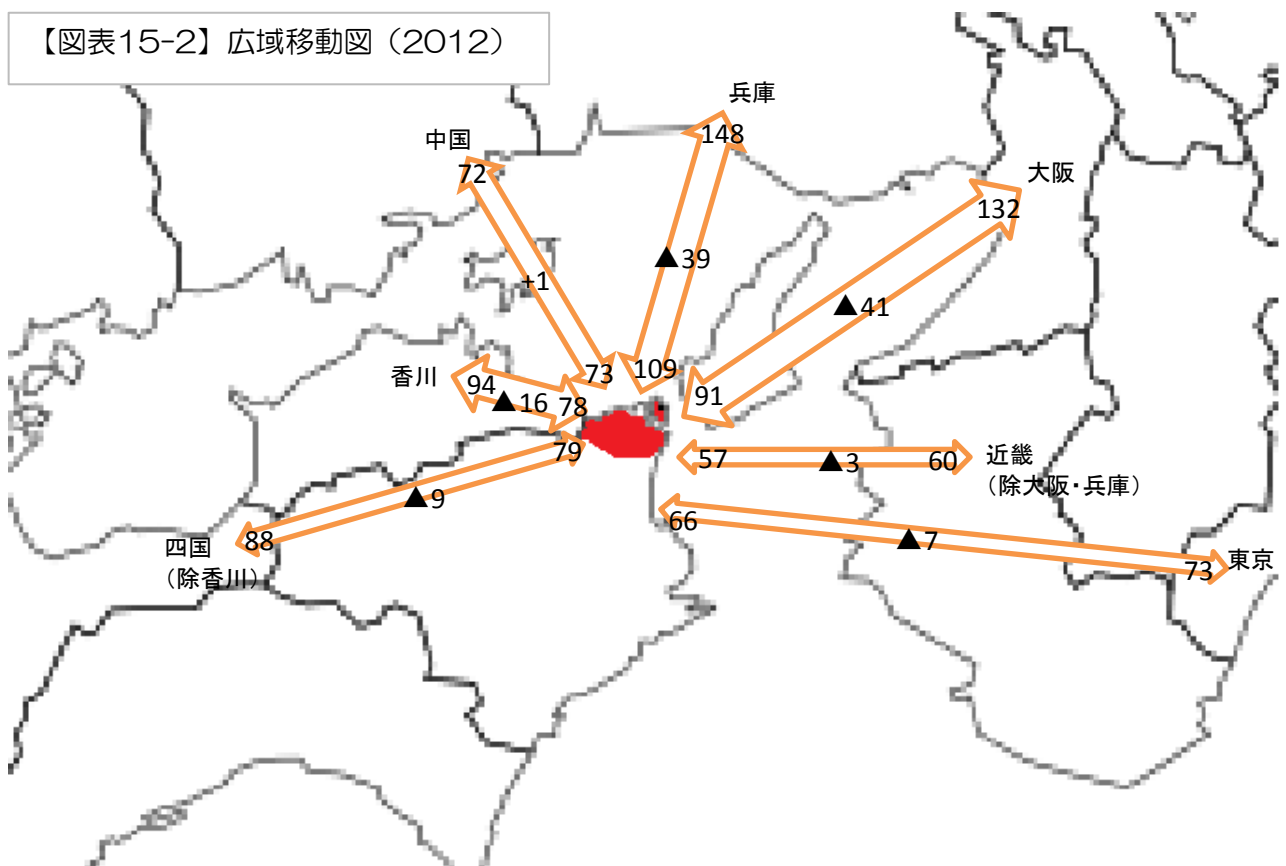
【図表14-2】 県内人口移動図 (2012)



【図表15-1】広域移動図（2013）



【図表15-2】広域移動図（2012）



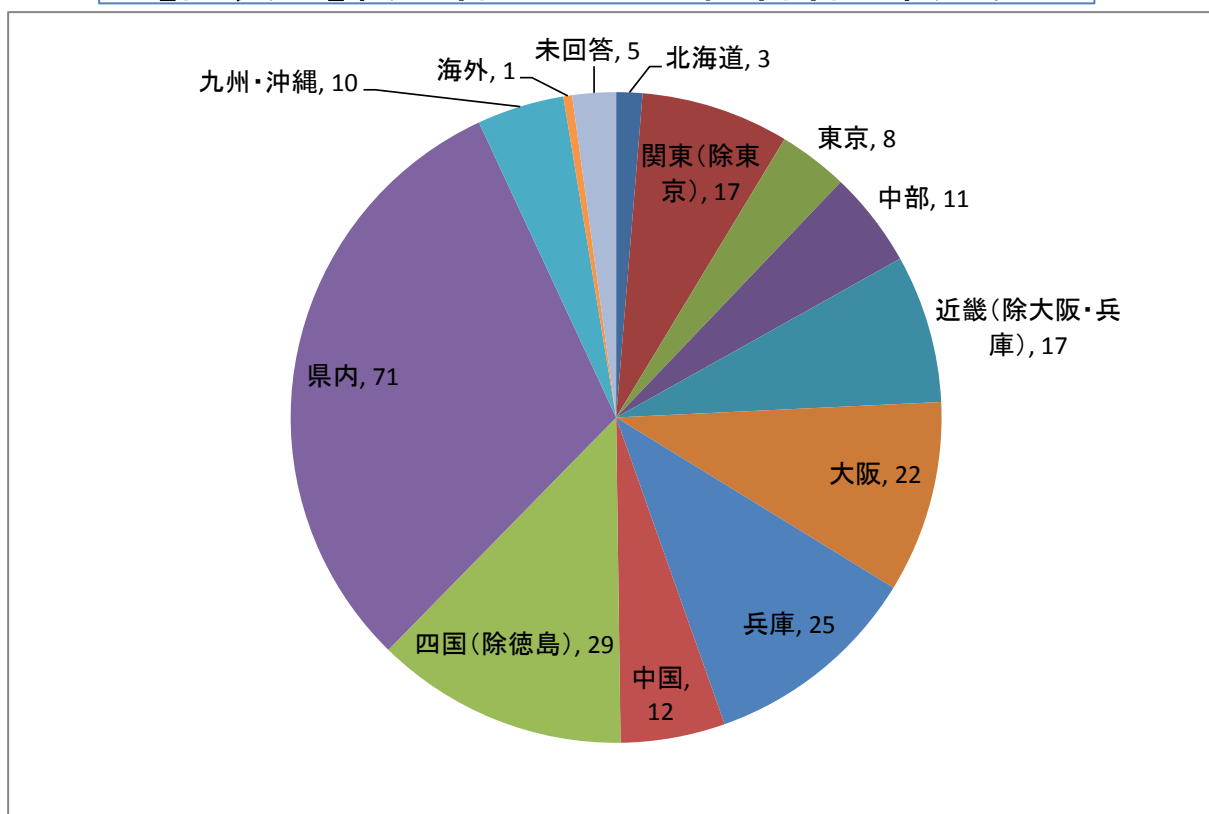
4. 転出・転入アンケートの実施

○転出・転入アンケートの実施

- ・期間 平成27年3月1日から平成27年4月30日まで
- ・方法 市民課窓口に転出届・転入届の受付に来られた方に回答してもらう。
- ・回答数 転出アンケート 231人
転入アンケート 138人

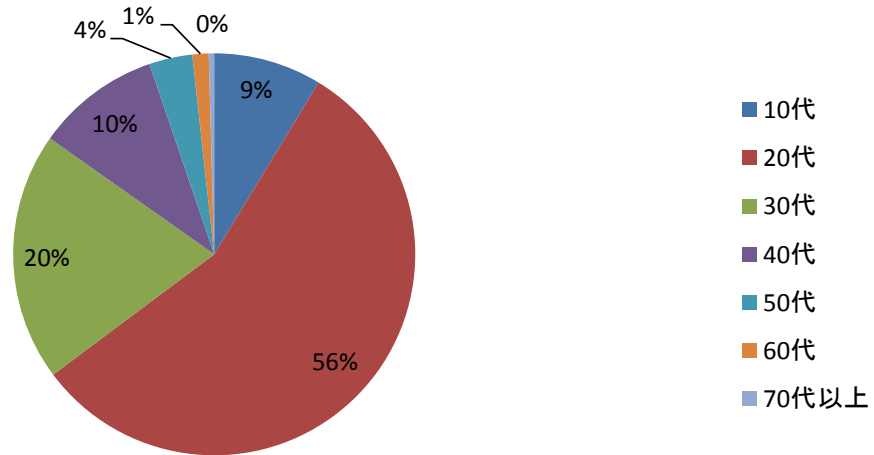
○転出アンケートの結果

【図表16】転出者アンケート回答者の転出先



転出先の最も多いのは県内、次いで大阪、兵庫を初めとする関西圏、次いで四国となっている。この3地域で約70%の転出者数となっている。

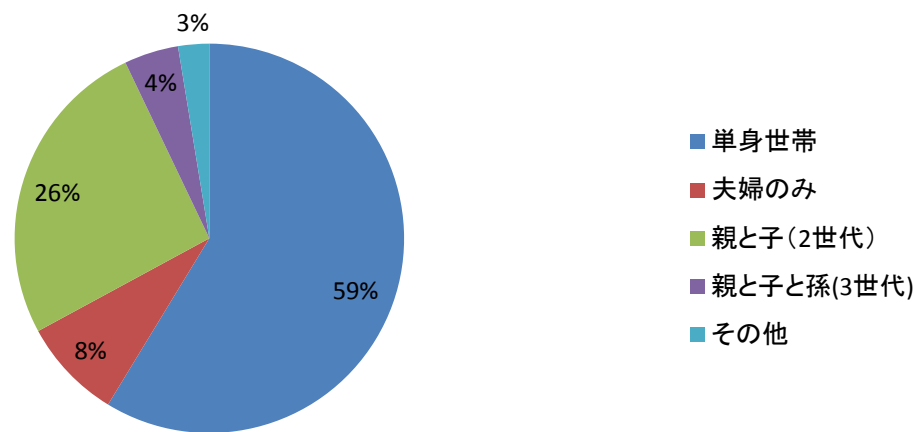
【図表17】転出アンケート回答者年代



転出者アンケートの回答者で多い世代は20代・30代となっており、次いで40代、10代となっている。

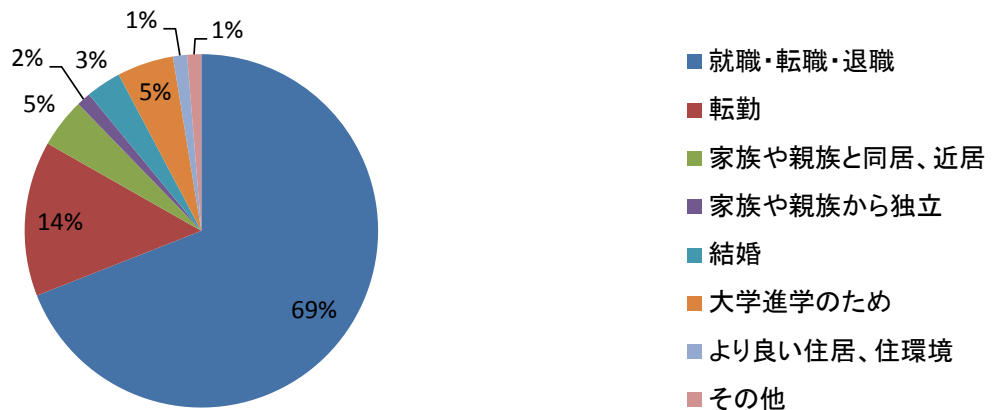
○県外への転出について

【図表18】転出後の家族構成(県外)

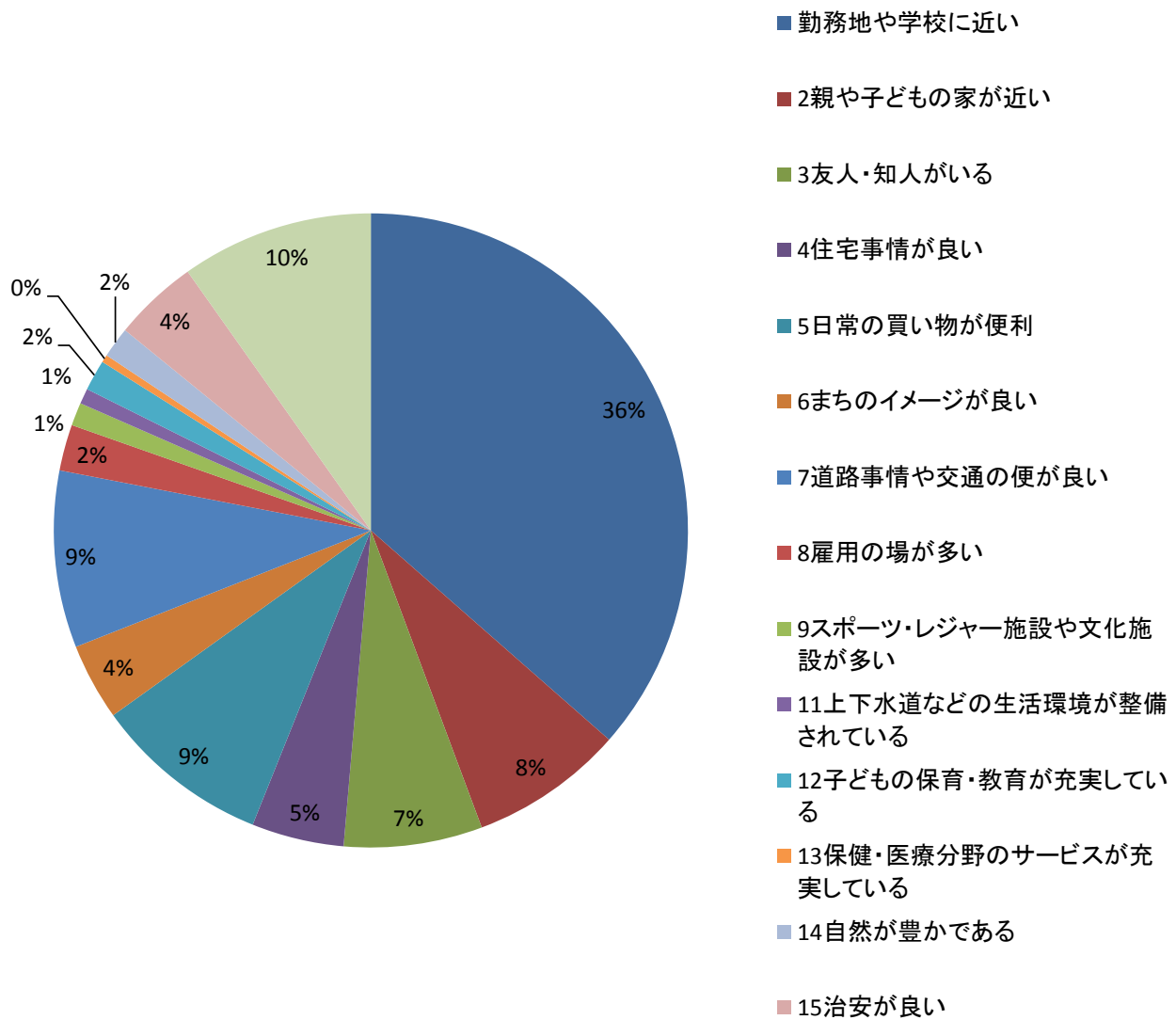


県外転出後の家族構成は単身世帯が59%を占め、次いで親と子の2世代が多くなっている。

【図表19】転出理由(県外)



【図表20】転居先で重視すること(県外)

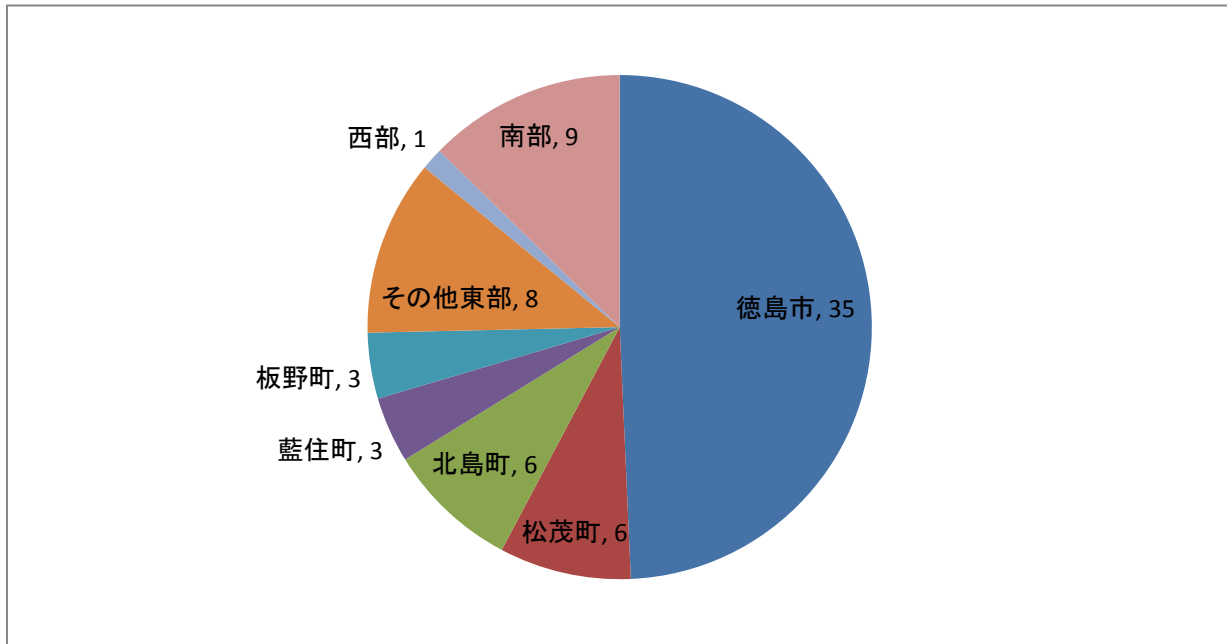


県外転出者の転出理由を見てみると、就職・転職・退職が69%、転勤が14%となり、仕事関係の理由が合計で83%と大部分を占めている。県外への転出については、仕事に関係した理由での転出が多いことがうかがえる。

また転居先で重視することも、勤務地が近いが36%と最も多く、次いで日常の買い物が便利、道路事情や交通の便が良いとなっている。

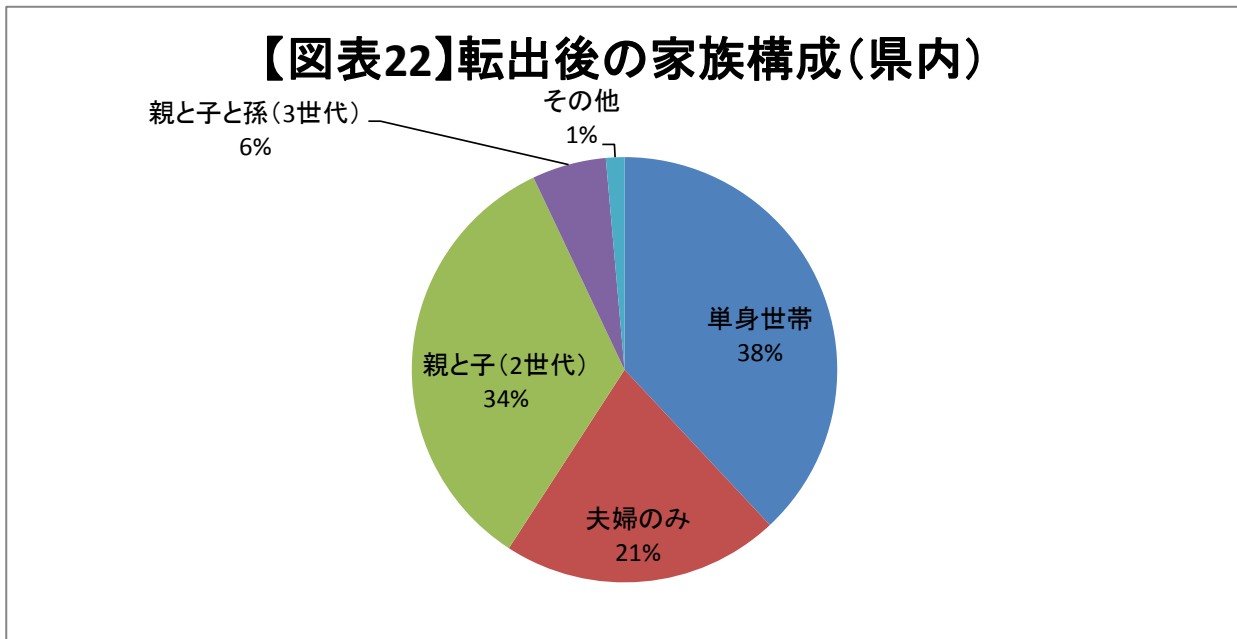
○県内への転出について

【図表21】県内転出先内訳



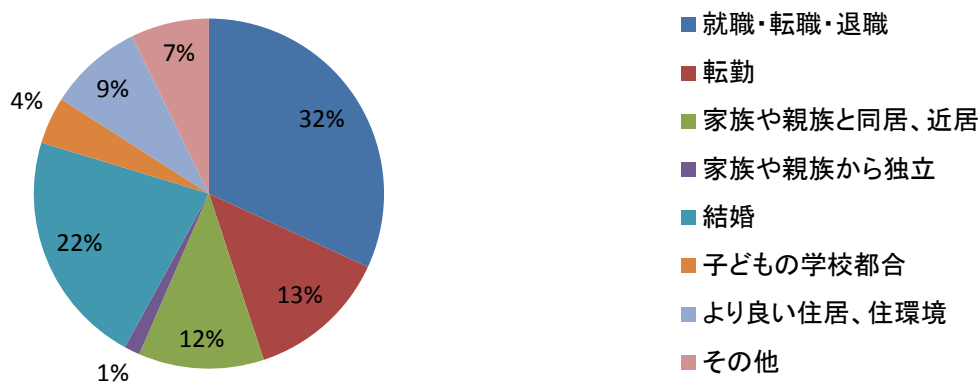
県内への転出者の転出先は、徳島市が35件と最も多くなっており、次いで松茂町、北島町の6件となっている。

【図表22】転出後の家族構成(県内)

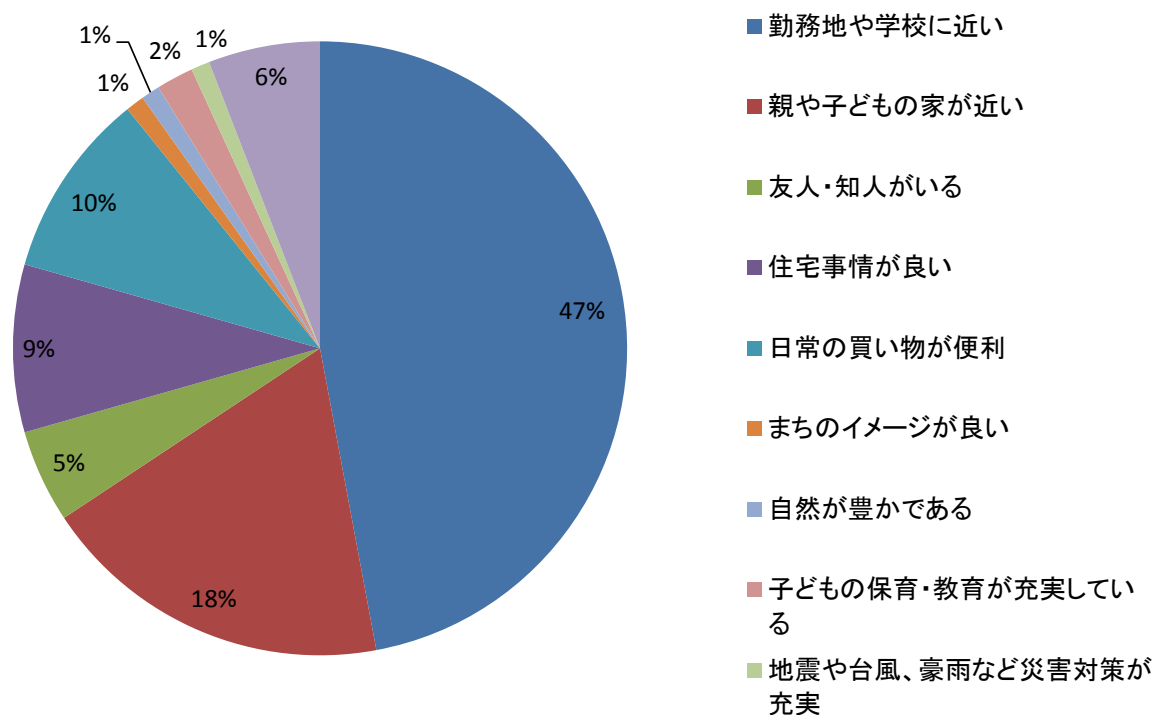


県内転出において、単身世帯が最も多く38%となっているが、親と子（2世代）も34%と割合が高く、夫婦のみも21%となっている。県内転出においては、県外転出と比べて、親と子（2世代）や夫婦のみの転出の割合が多くなっている。

【図表23】転出理由(県内)



【図表24】転出先で重視すること(県内)



県内転出において、最も多い転出理由は「就職・転職・退職」であり、「転勤」も含めると、仕事に関する理由が45%となりもっとも多くなっている。県外転出理由の83%と比べるとその割合は低くなる。また県内転出においては、「結婚」が22%、「家族や親族と同居、近居」12%となっており、その割合も県外転出より高く、「より良い住居、住環境を求めて」、も9%と、県外転出に比べてその割合が高くなっている。

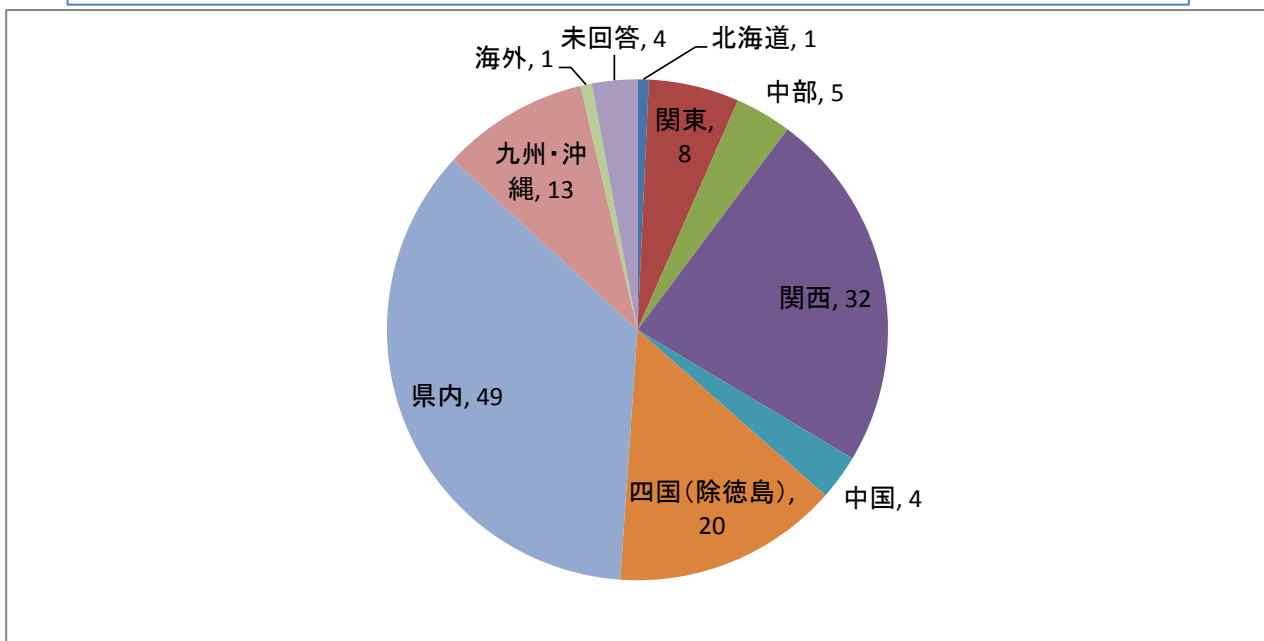
転出アンケートの結果をまとめると、まず転出先については、県内移動が30%を占め、そのほか関西圏と四国（除く徳島）への移動が多く、その3地域で70%を占める。この結果は先の住民基本台帳人口移動調査に基づく結果にほぼ同等の結果である。続いて、転出する年代を見ても、20代、30代の転出が多く、その点でも先の人口移動調査に見る結果とほぼ同じ結果が出ている。

続いて、県外転出についてみると、その転出後の家族構成は、単身での移動が多く、転出理由は仕事に関することが多い。その点から考えると、やはり県外転出については、就職や転職を機会に発生することが多いと考えられる。

また県内転出を見ると、転出後の家族構成は単身での移動も多いが、親と子（2世代）や夫婦のみの移動も多く、また転出理由についても、仕事に関わるものが最も多いが、結婚、家族との同居近居、より良い住居、住環境を求めてのものも多い。県内転出については、仕事に関する移動が最も多いことは認識しつつも、県外転出に比して定住する場所を求めて移動する割合が多いことも確認しておかなければならない。

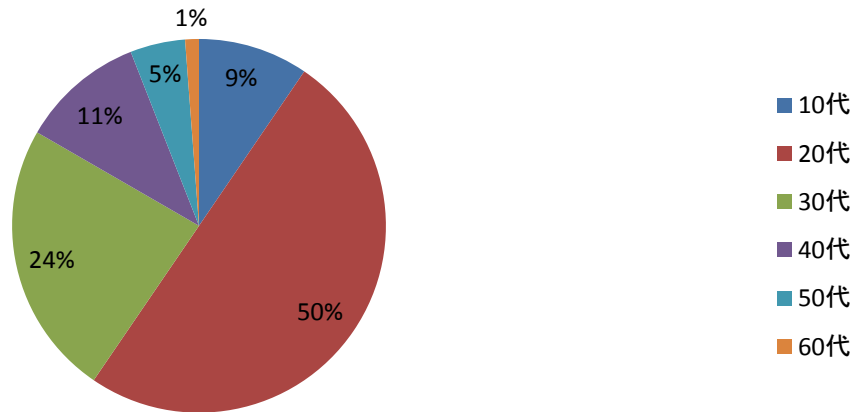
○転入者アンケートについて

【図表25】転入者アンケート回答者の転入前住所



転入アンケートの転入前の住所地を見てみると、県内からの転入が最も多く49件、次いで関西からの転入が32件、四国（除く徳島）からの転入が20件となり、この3地域からの転入が70%以上となっている。

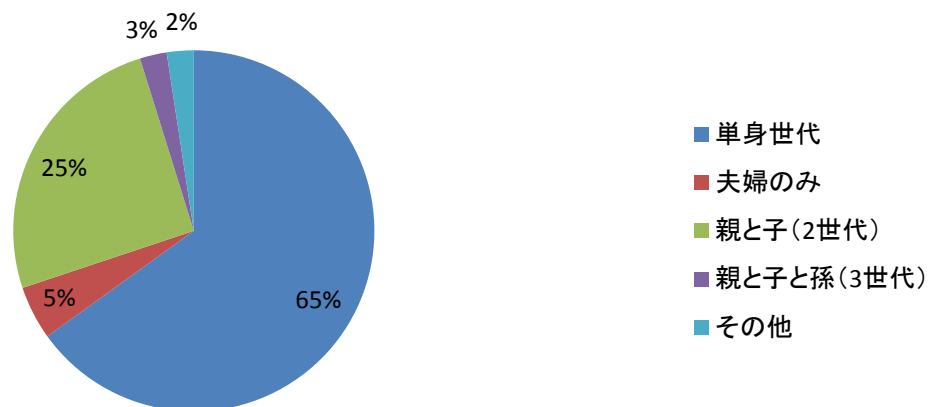
【図表26】転入者アンケート回答者年代



転入してくる年代について、20代が50%、30代が24%となっており、やはり20代、30代の移動が多くなっていることが確認できる。

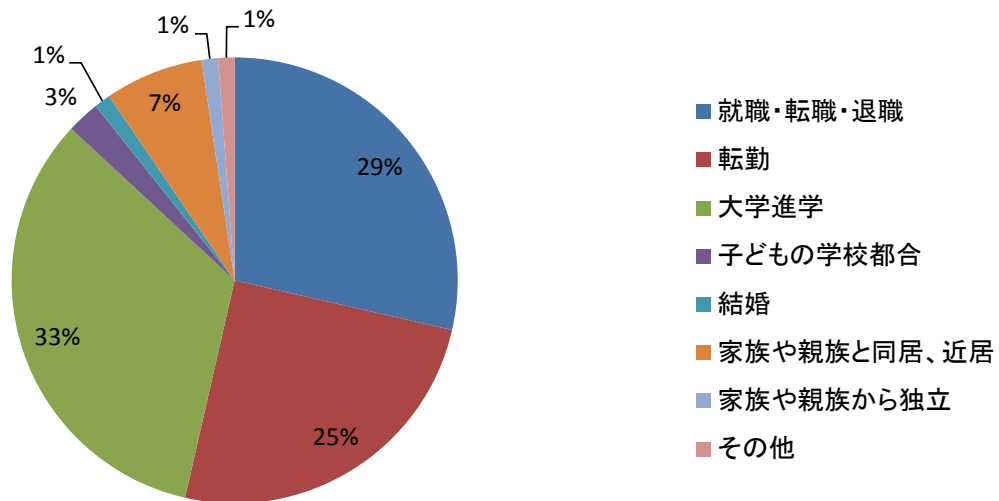
○県外からの転入について

【図表27】転入後の家族構成(県外)



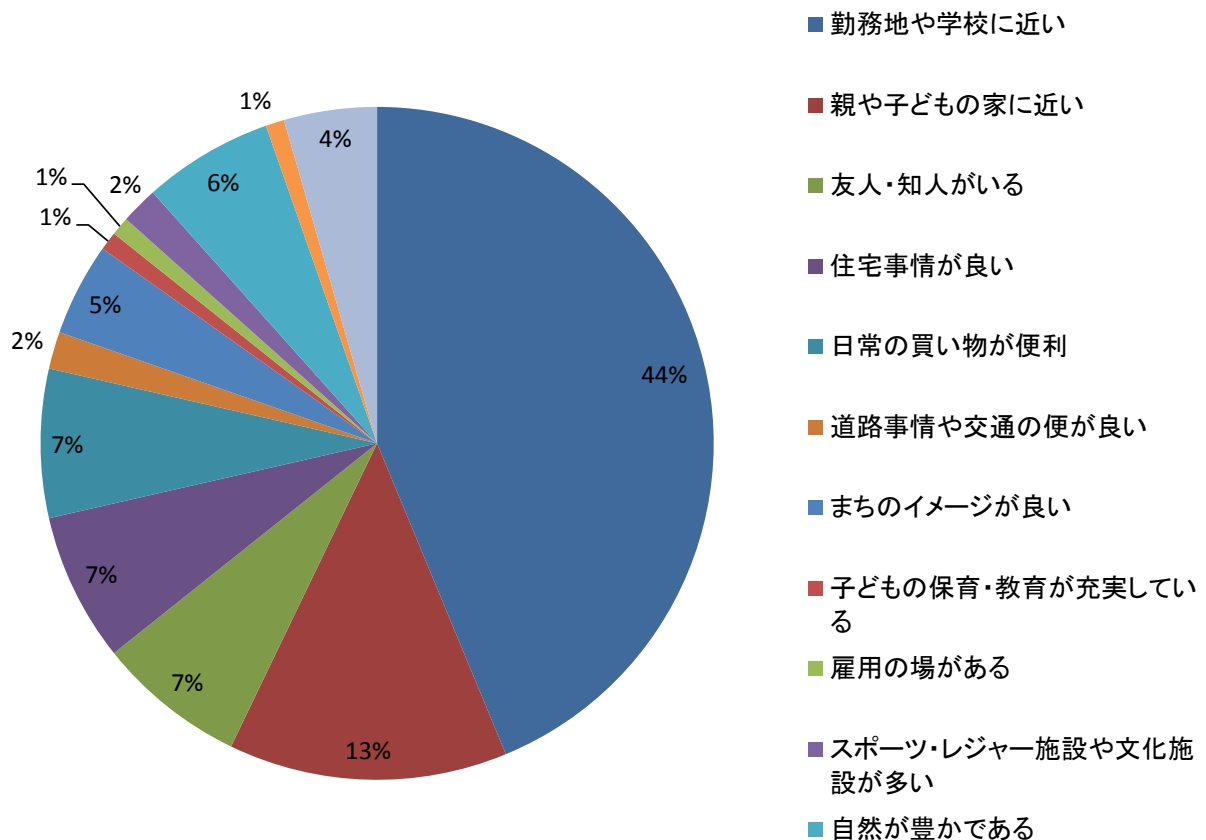
県外からの転入について、単身世帯での移動が多く65%となっており、次いで親と子(2世代)の25%となっている。単身世帯での転入が多いのが確認できる。

【図表28】転入理由(県外)



県外からの転入理由について、大学進学が最も多くなっており、鳴門教育大学への進学の影響が多いと考えられる。また就職・転職・退職も多く、転勤も含めると54%は仕事に関することとなっている。

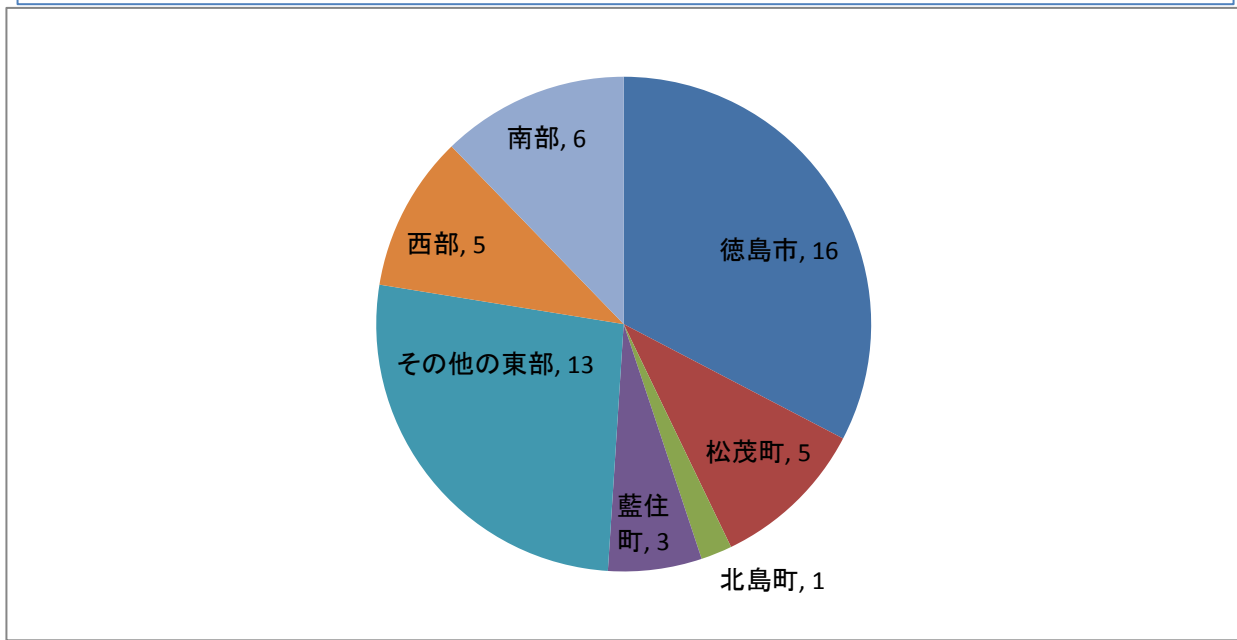
【図表29】転居先で重視すること(県外)



県外からの転居先で重視することについて、勤務地、学校に近いがもっとも多く44%となっている。次いで親や子供の家に近い(13%)、友人・知人がいる(7%)が多く、また住宅事情が良い(7%)、日常の買い物が便利(7%)の割合が続いている。

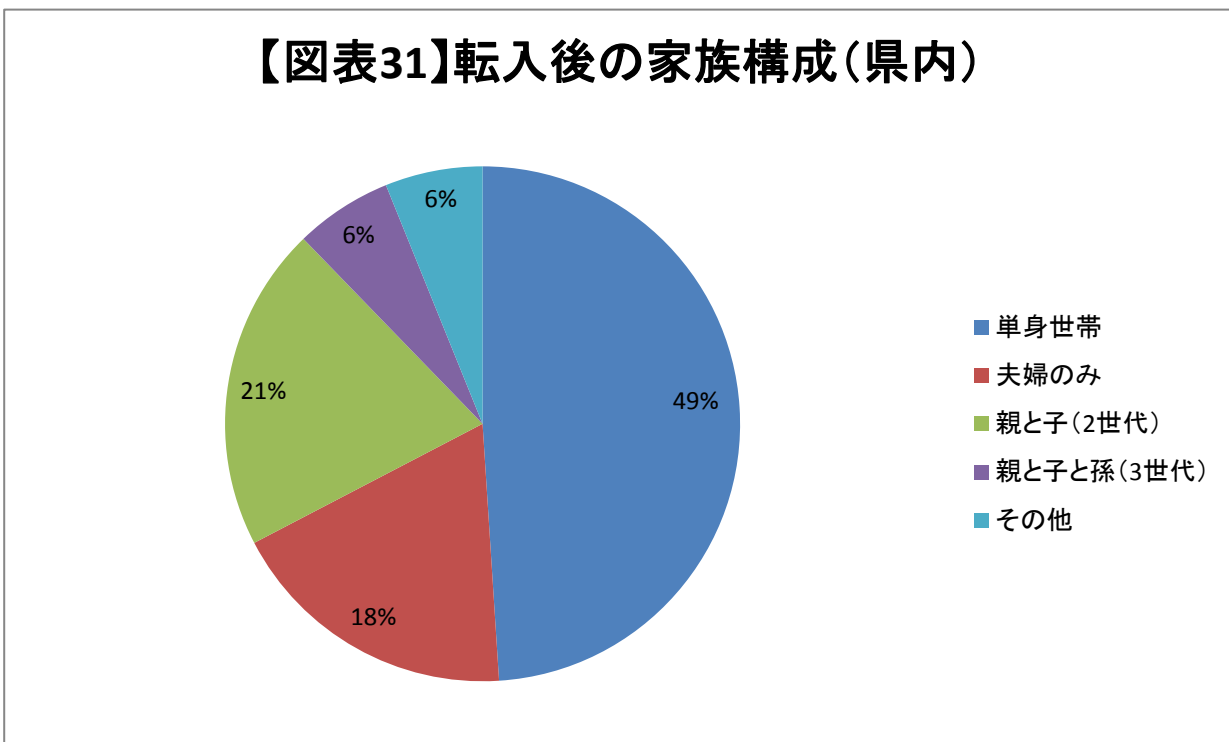
○県内からの転入について

【図表30】転入者アンケート回答者転入前住所(県内)



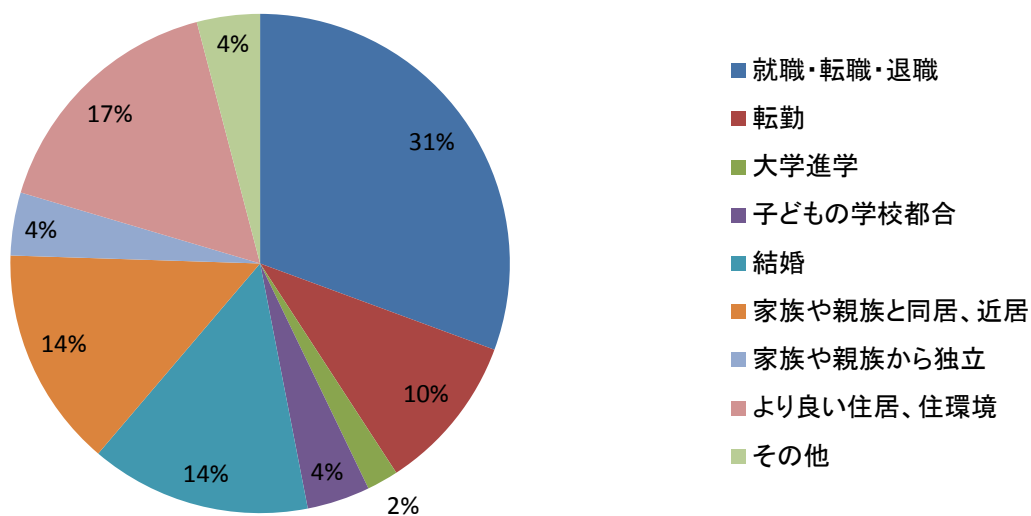
県内からの転入において、転入前の住所については、徳島市が16件と最も多く、次いで松茂町の5件となっている。またその他の東部からの転入が多い。

【図表31】転入後の家族構成(県内)



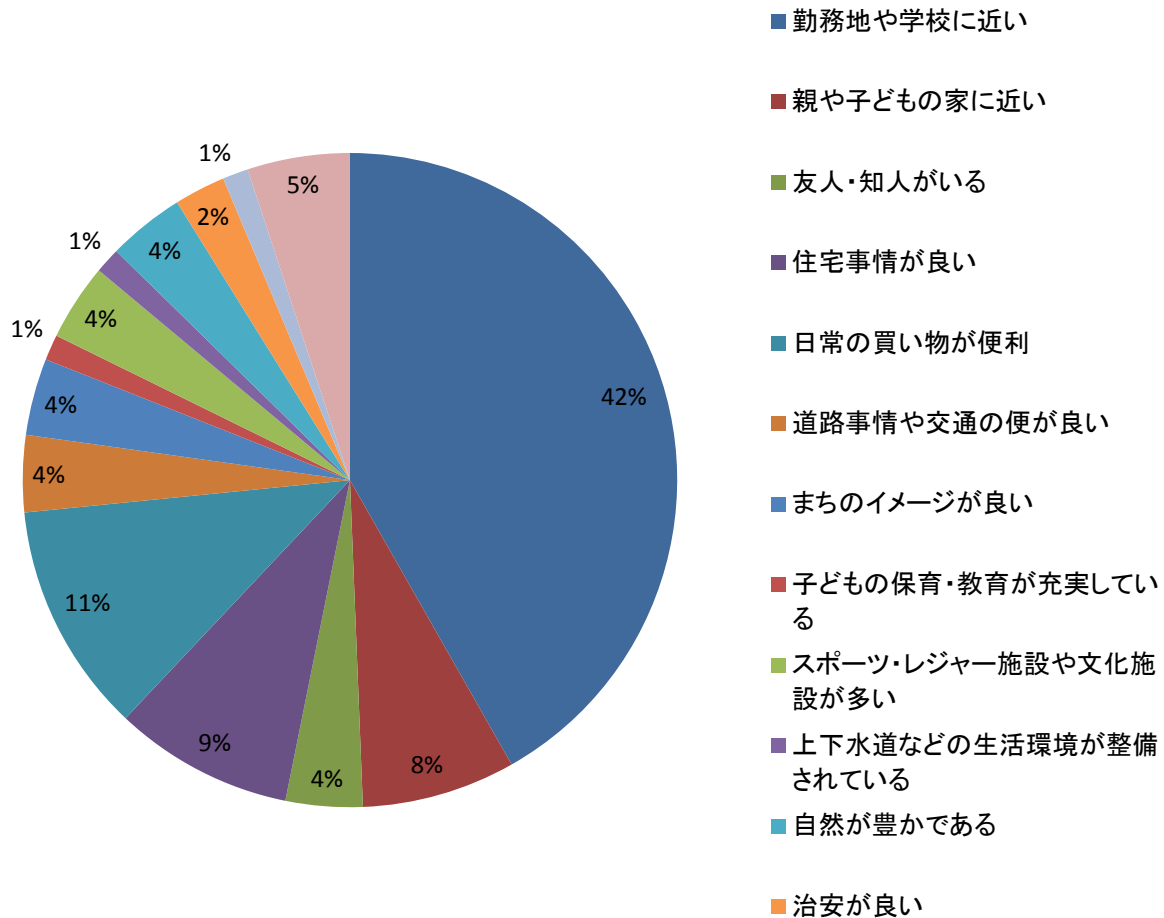
県内からの転入において、転入後の家族構成については、単身世帯が最も多く49%、次いで親と子（2世代）が21%となっているおり、また県外からの転入にくらべて、夫婦のみの移動が多くなっている。

【図表32】転入理由(県内)



県内からの転入において、転入理由については、転職・就職・退職についてが最も多く31%、転勤も含めれば仕事に関する移動が41%となる。ただ、結婚、家族や親族と同居、近居の移動もともに14%となっており、またより良い住居、住環境を求めてが17%となっており、県外からの転入にくらべて仕事に関する移動の比率は低い。

【図表33】転居先で重視すること(県内)



県内からの転入において、転居先で重視することは勤務地や学校に近いが42%と多くなっているが、次いで日常の買い物が便利が11%、住宅事情が良いが9%となっている。

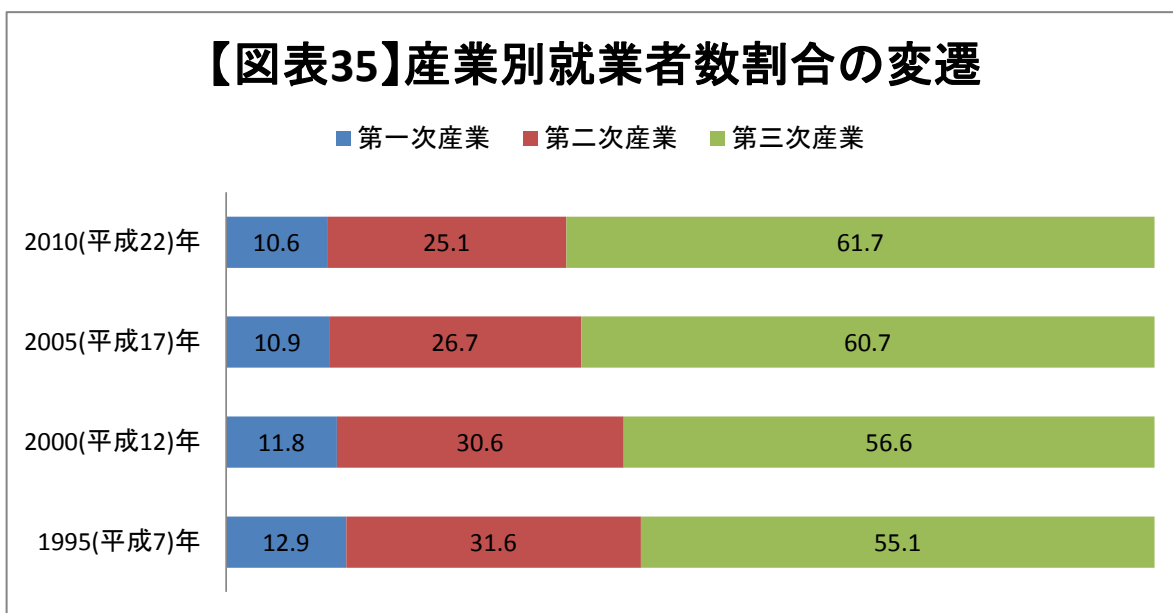
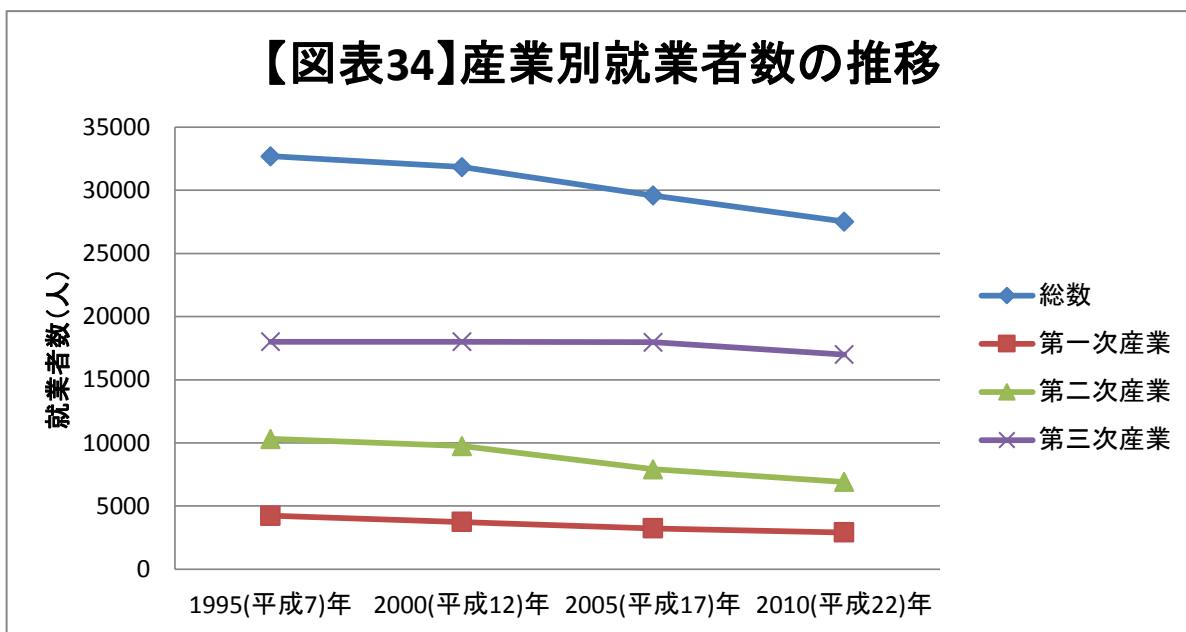
転入アンケートの結果をまとめると、まず転入先については、県内、関西圏、四国（除く徳島）の三地域からの転入が多く、および転入する年代についても、20代、30代の移動が多く、先の人口移動調査に見る結果とほぼ同じ結果が出ている。

続いて、県外からの転入についてみると、その転入後の家族構成は、単身での移動が多く、転入理由は大学進学と仕事に関することが多い。その点から考えると、やはり県外からの転入については、大学進学や就職や転職を機会に発生することが多いと考えられ、鳴門市における鳴門教育大学の影響は大きい。

また県内からの転入を見ると、転入後の家族構成は単身での移動も多いが、親と子（2世代）や夫婦のみの移動も多く、また転入理由についても、仕事に関わるものが最も多いが、結婚、家族との同居近居、より良い住居、住環境を求めてのものも多い。県内からの転入については、仕事に関する移動が最も多いが、県外からの転入に比して定住する場所を求めて移動する割合が多いことも改めて確認しておかなければならない。

第3章 鳴門市の産業別人口

1. 産業別就業者数の推移

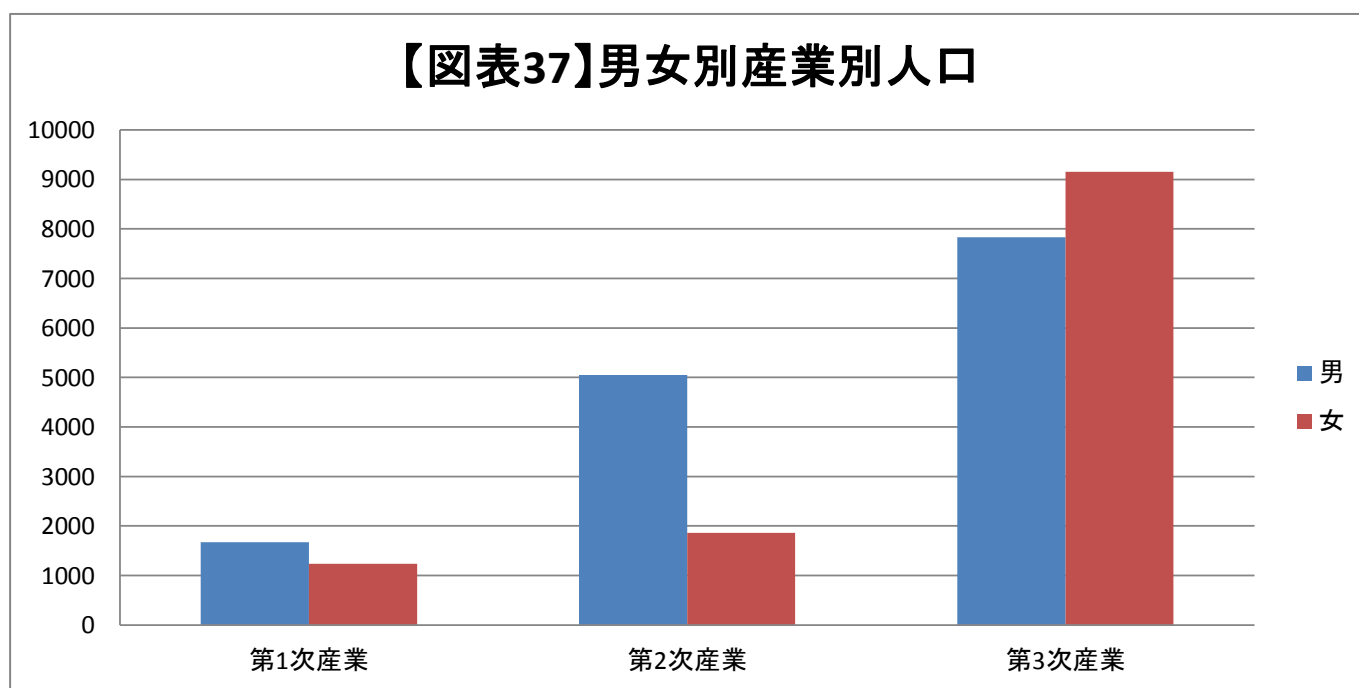
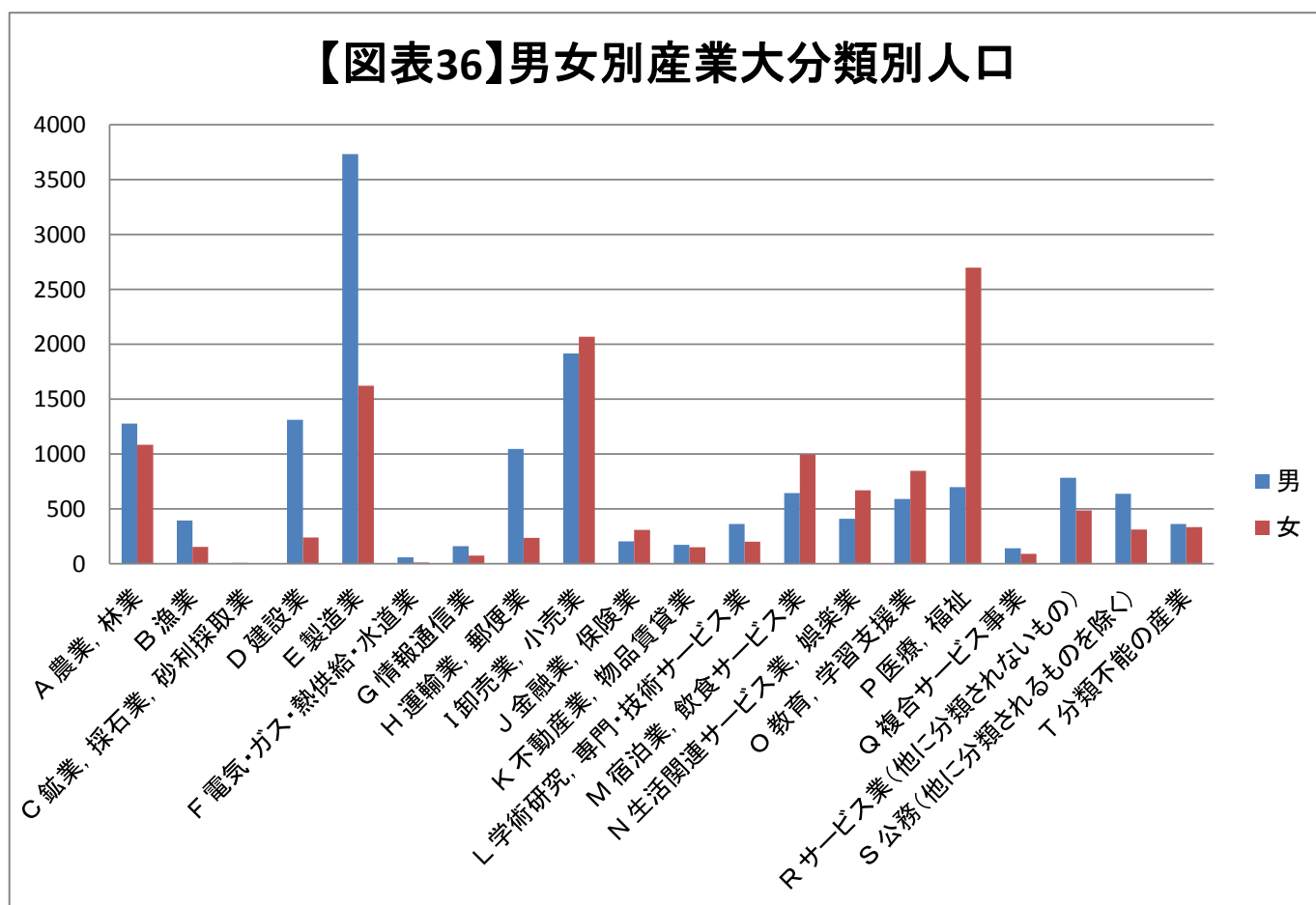


(出典) 国勢調査より。

鳴門市の就業者数は、ここ数年減少を続けている。中でも第二次産業がここ15年で、約3000人の減少となり、第一次産業も1000人の減少となっている。第三次産業も平成12年をピークに緩やかに減少している。

鳴門市は就業者の構成は、比較的第一次産業多い構造が、徐々に第三次産業の割合が増加しつつある。

2. 男女別産業別人口

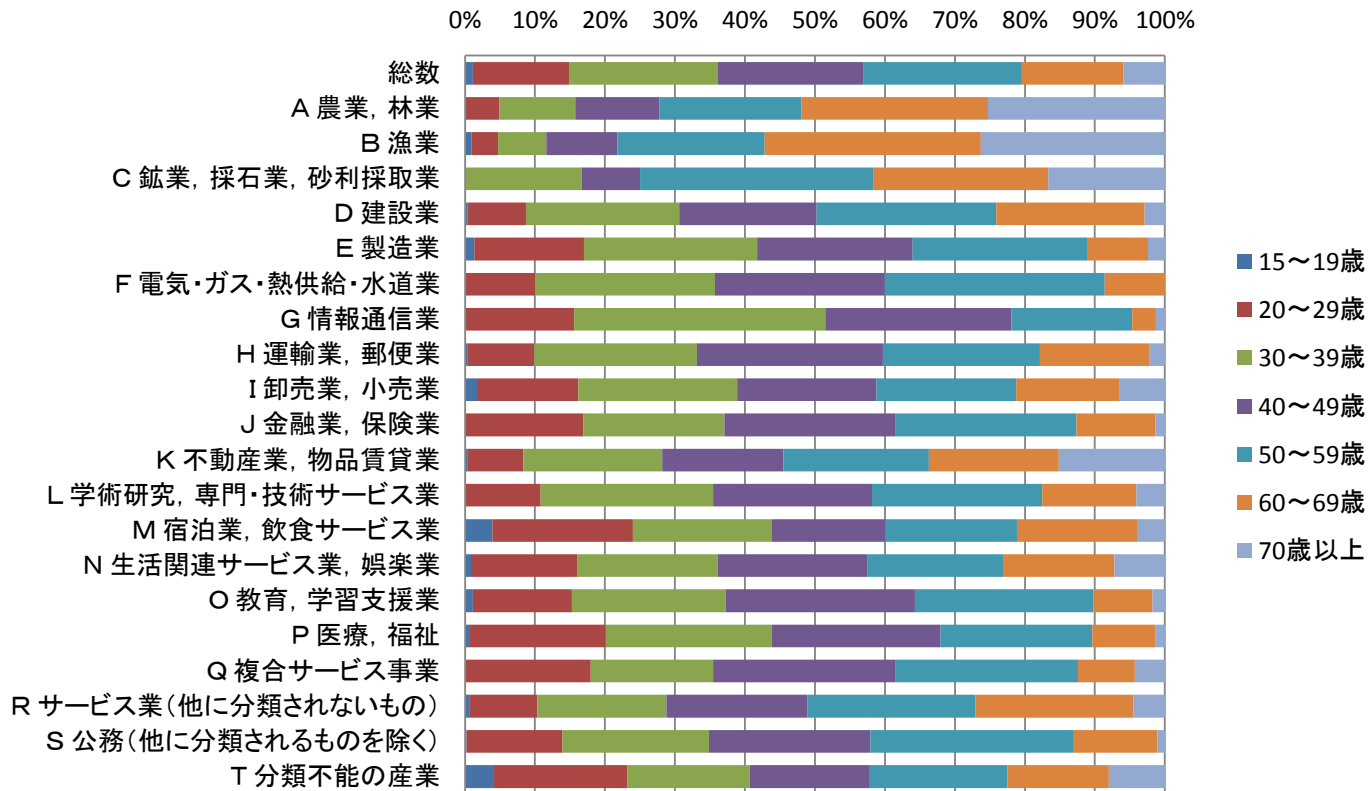


(出典) 国勢調査より。

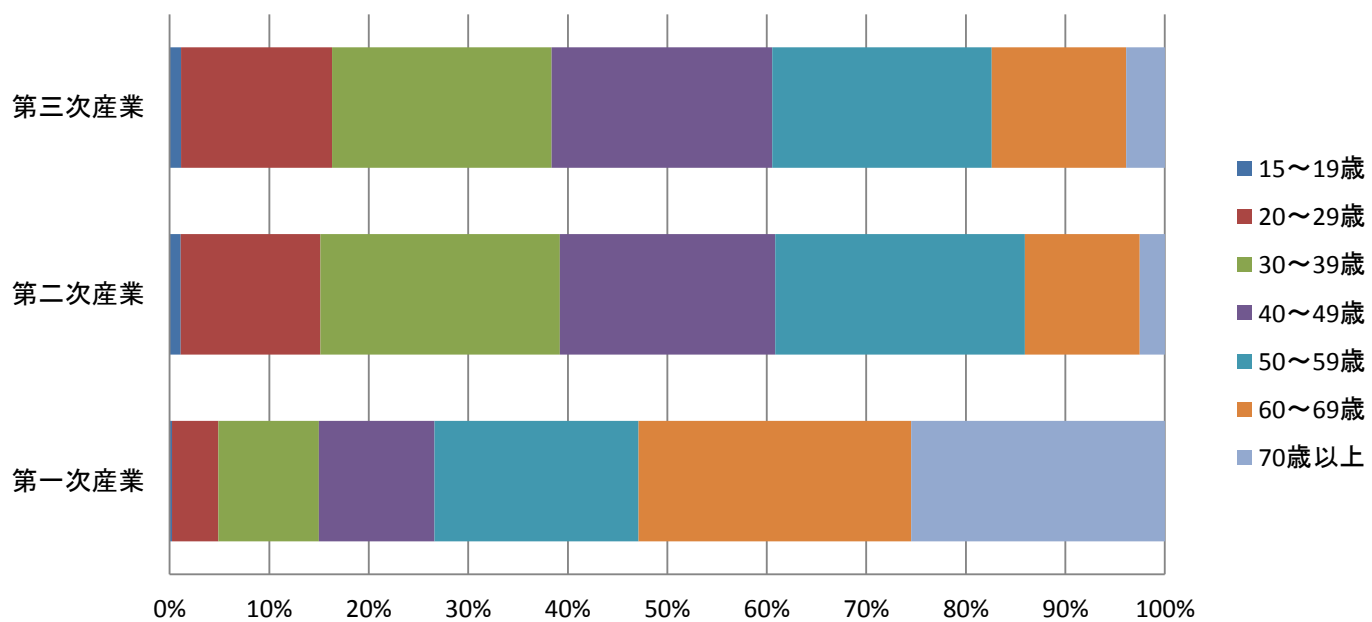
鳴門市では、男性は製造業、卸売・小売業、建設業、農業の従事者が多い。女性については、医療・福祉、卸売・小売業、製造業、農業の従事者が多い。

3. 年齢階級別産業別人口

【図表38】年齢階級別産業人口構成



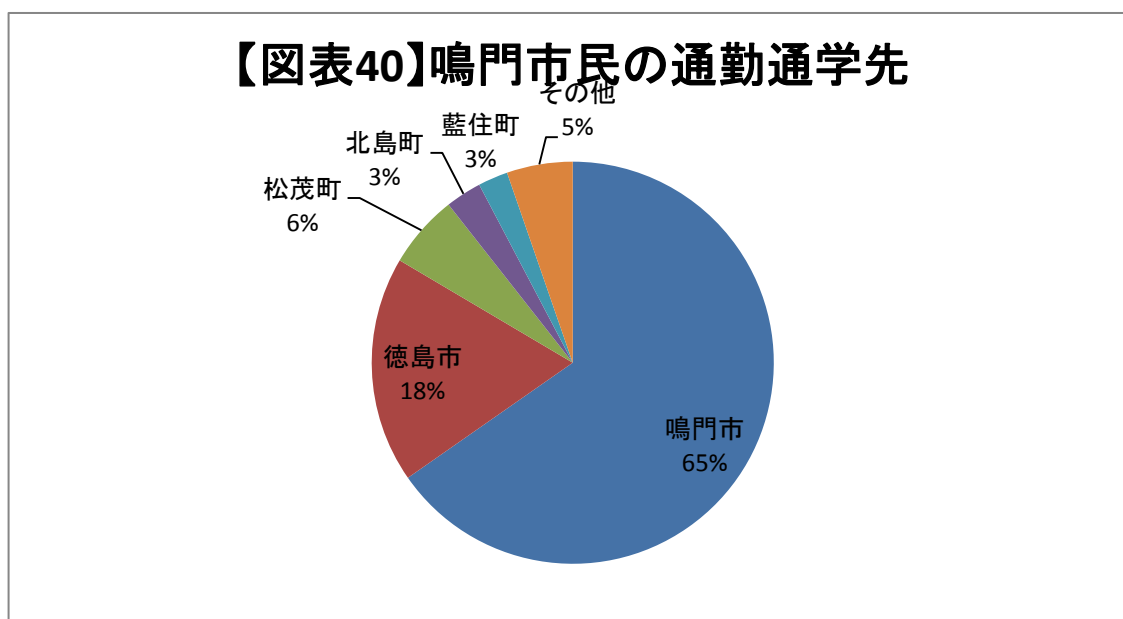
【図表39】年齢階級別産業人口構成



(出典) 国勢調査より。

第二次産業、第三次産業では、30～39歳、40から49歳、50～59歳の従事者が多い。第一次産業では、50から59歳、60～69歳、70歳以上の従事者が多く、高齢化が進んでいる。

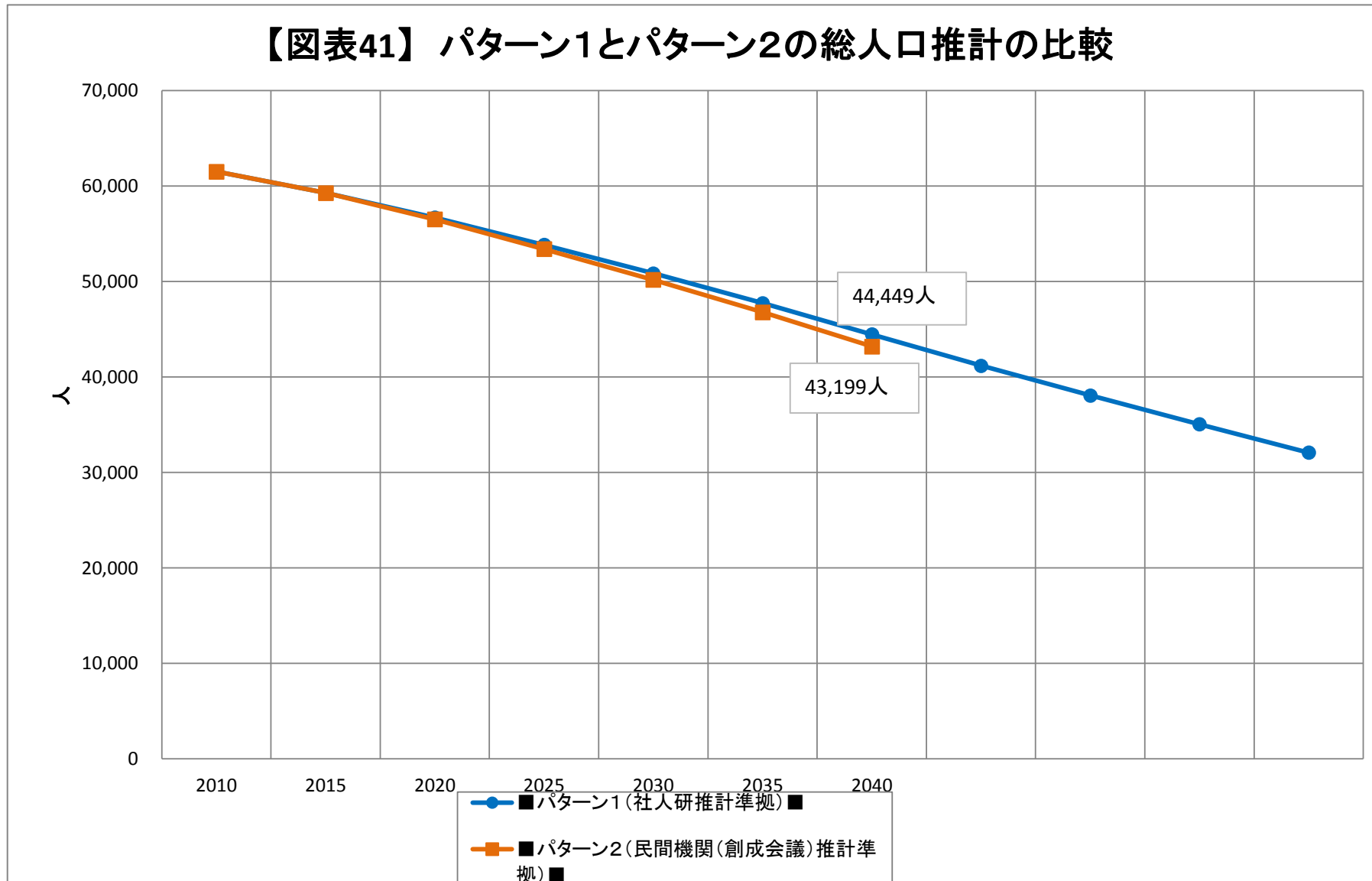
4. 鳴門市民の通勤通学先



鳴門市の昼夜間人口比率は0.964となっており、市外に通勤通学する人が、市内に通勤通学してくる人より多くなっている。通勤通学先は65%は鳴門市で、18%は徳島市、6%が松茂町となっている。

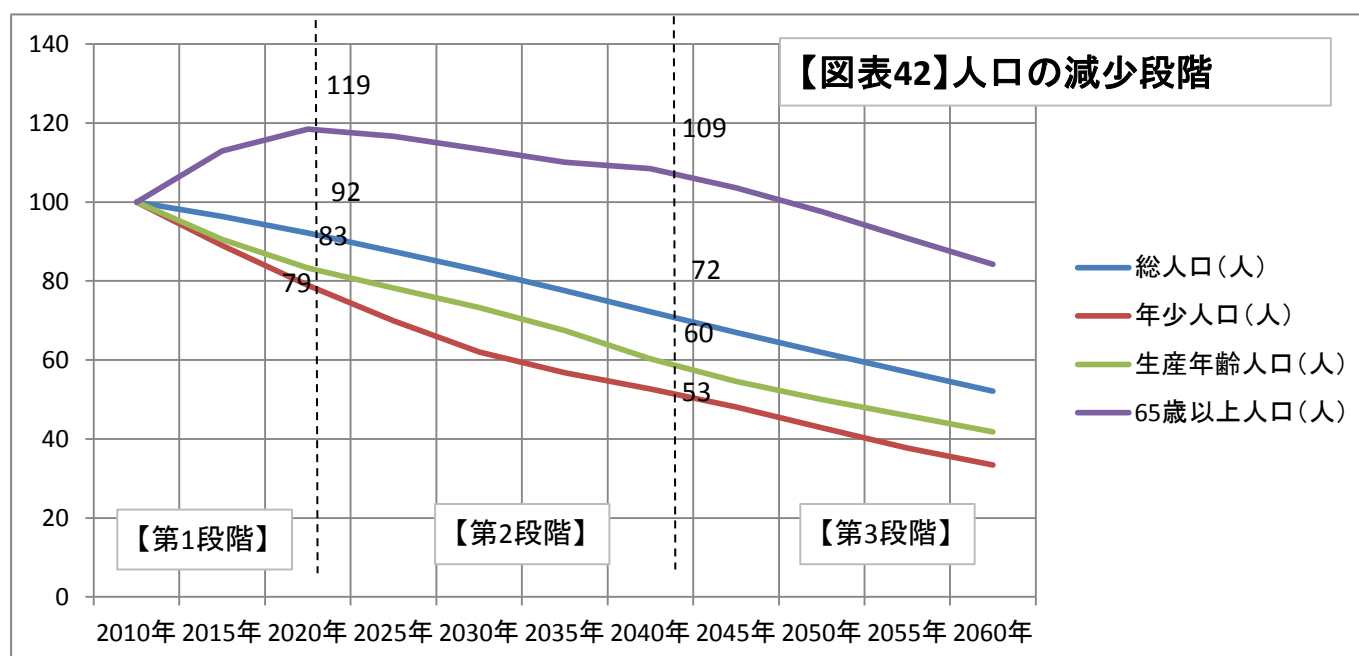
第4章 鳴門市の人口推計

1. 鳴門市の人口推計



パターン1の社人研推計は、都市部への流入が徐々に低下していくと仮定しているが、パターン2の創成会議の推計では都市部への流入は同程度で推移していくと仮定している。この2つのパターンを比較すると、パターン2がパターン1より、約1,200人ほど下回る推計となる。

2. 鳴門市の人口減少段階



(出典) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月)」より作成

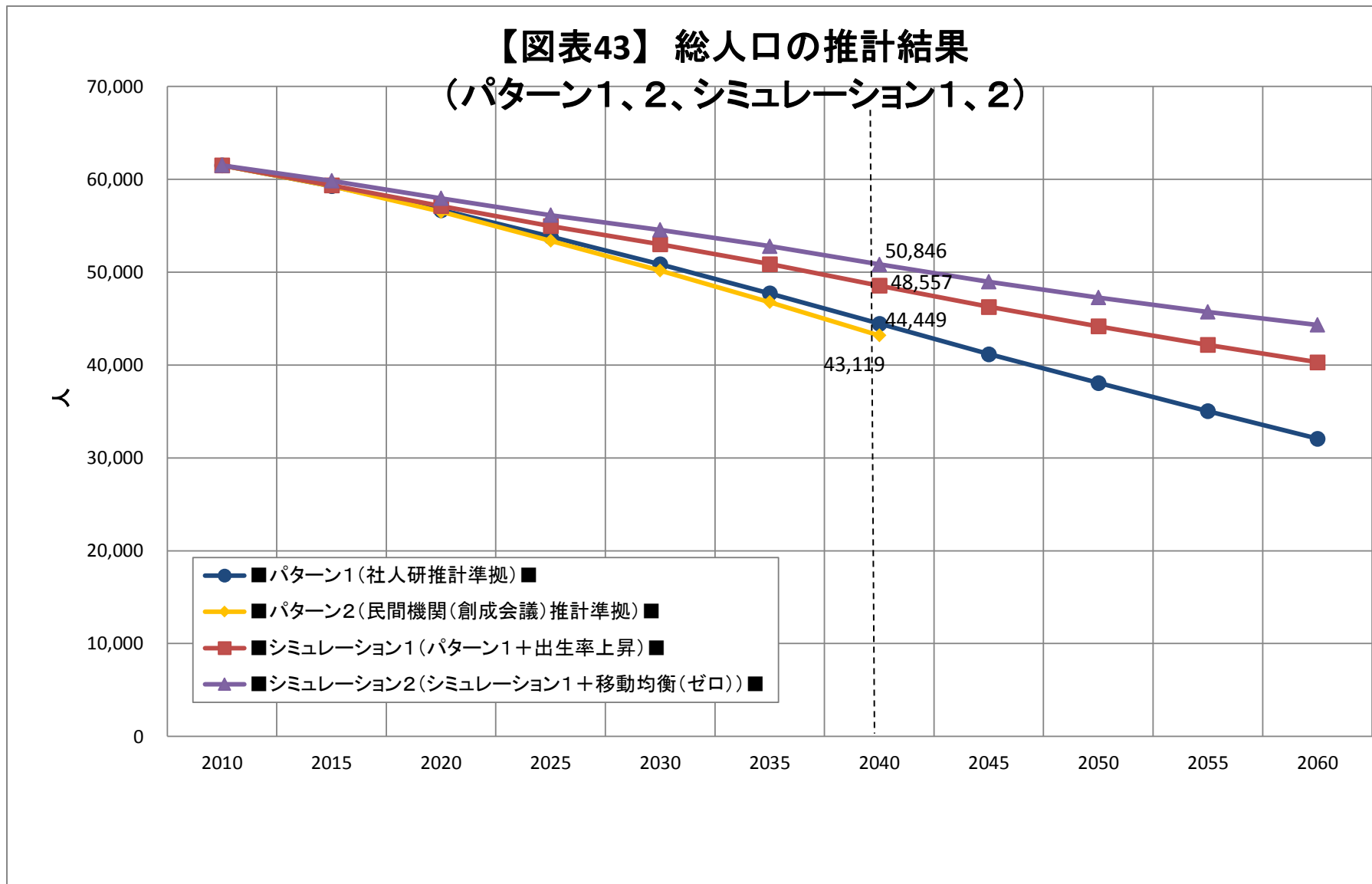
【第1段階】 老年人口増加、年少・生産年齢人口減少 2020年まで

【第2段階】 老年人口維持・微減、年少・生産年齢人口減少 2040年まで

【第3段階】 老年人口減少、年少・生産年齢人口減少 2040年まで

鳴門市では、パターン1を基に推計し、上の3段階で分類をすると、2020年まで老年人口は増加を続け、【第1段階】に分類される。2020年から2040年までは、老年人口の減少が始まり、【第2段階】に分類される。2040年以降、老年人口の減少率が大きくなり、【第3段階】に分類される。

3. 鳴門市人口推計のシミュレーション



(注) シミュレーション1については、将来人口推計における社人研推計準拠（パターン1）において、合計特殊出生率が平成42年(2030)までに人口置換水準(2.1)まで上昇すると仮定している。シミュレーション2については、シミュレーション1かつ移動（純移動率）がゼロ（均衡）で推移すると仮定している。

分類	計算方法	影響度
自然増減の影響度	シミュレーション1の平成52(2040)年推計=48,557人 パターン1の平成52(2040)年推計人口=44,449人 ⇒48,557人/44,449人=109.2%	3
社会増減の影響度	シミュレーション2の平成52(2040)年推計=50,846人 シミュレーション1の平成52(2040)年推計人口=48,557人 ⇒50,846人/48,557人=104.7%	2

※自然増減の影響度については、上記計算方法により得た数値に応じて5段階に整理（1：100%未満 2：100~105% 3：105~110% 4：110~115% 5：115%以上の増加）、社会増減の影響度については、上記計算方法により得た数値に応じて5段階に整理（1：100%未満 2：100~110% 3：110~120% 4：120~130% 5：130%以上の増加）

本市ではシミュレーション1，2を比較した結果、社会増減より、自然増減の方が影響が大きいことがわかる。

4. 鳴門市の総人口分析

鳴門市

図表4.4 推計結果ごとの人口増減率

		総人口	0～14歳人口		15～64歳人口	65歳以上人口	20～39歳女性人口
				うち0～4歳人口			
2010年	現状値	61,511	7,414	2,155	37,622	16,475	6,814
2040年	パターン1	44,449	3,903	1,190	22,678	17,868	3,687
	シミュレーション1	48,557	6,928	2,199	23,761	17,868	3,887
	シミュレーション2	50,846	7,514	2,418	25,465	17,867	4,251
	パターン2	43,199	3,716	1,110	21,726	17,757	3,435

		総人口	0～14歳人口		15～64歳人口	65歳以上人口	20～39歳女性人口
				うち0～4歳人口			
2010年から2040年への増減率	パターン1	-27.7%	-47.4%	-44.8%	-39.7%	8.5%	-45.9%
	シミュレーション1	-21.1%	-6.6%	2.0%	-36.8%	8.5%	-43.0%
	シミュレーション2	-17.3%	1.4%	12.2%	-32.3%	8.4%	-37.6%
	パターン2	-29.8%	-49.9%	-48.5%	-42.3%	7.8%	-49.6%

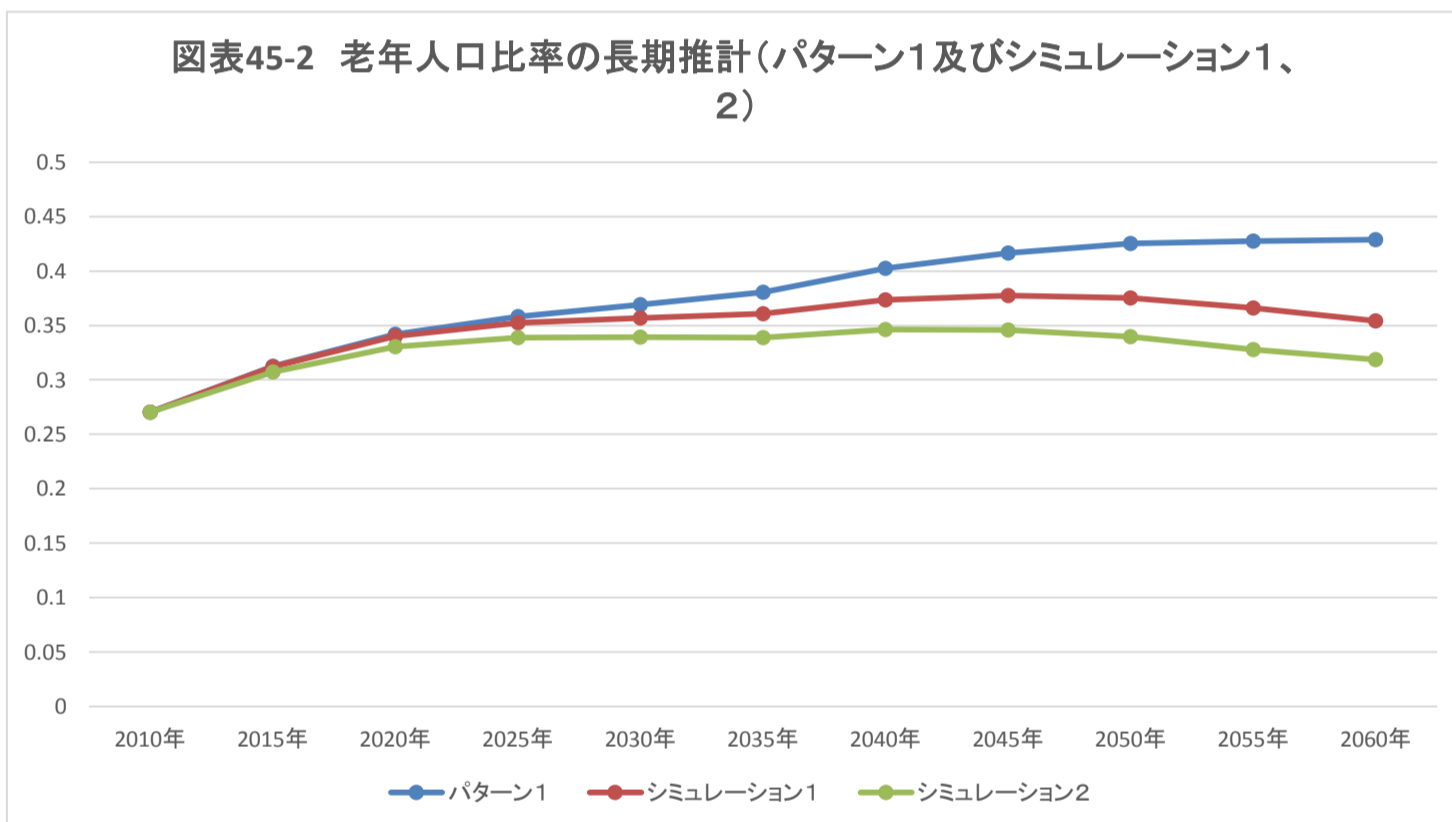
パターン1、シミュレーション1、2を比べてみると、0-14歳人口はシミュレーション1では減少率は低下し、シミュレーション2では、増加に転じる。また15-64歳人口、20-39歳女性人口の減少率も、シミュレーション1、シミュレーション2では低下する。65歳以上人口はどのシミュレーションでも変わらない。

5. 老年人口比率の分析

図表45-1 2010年（平成22年）から2040年（平成52年）までの総人口・年齢3区分別人口比率（パターン1及びシミュレーション1、2）

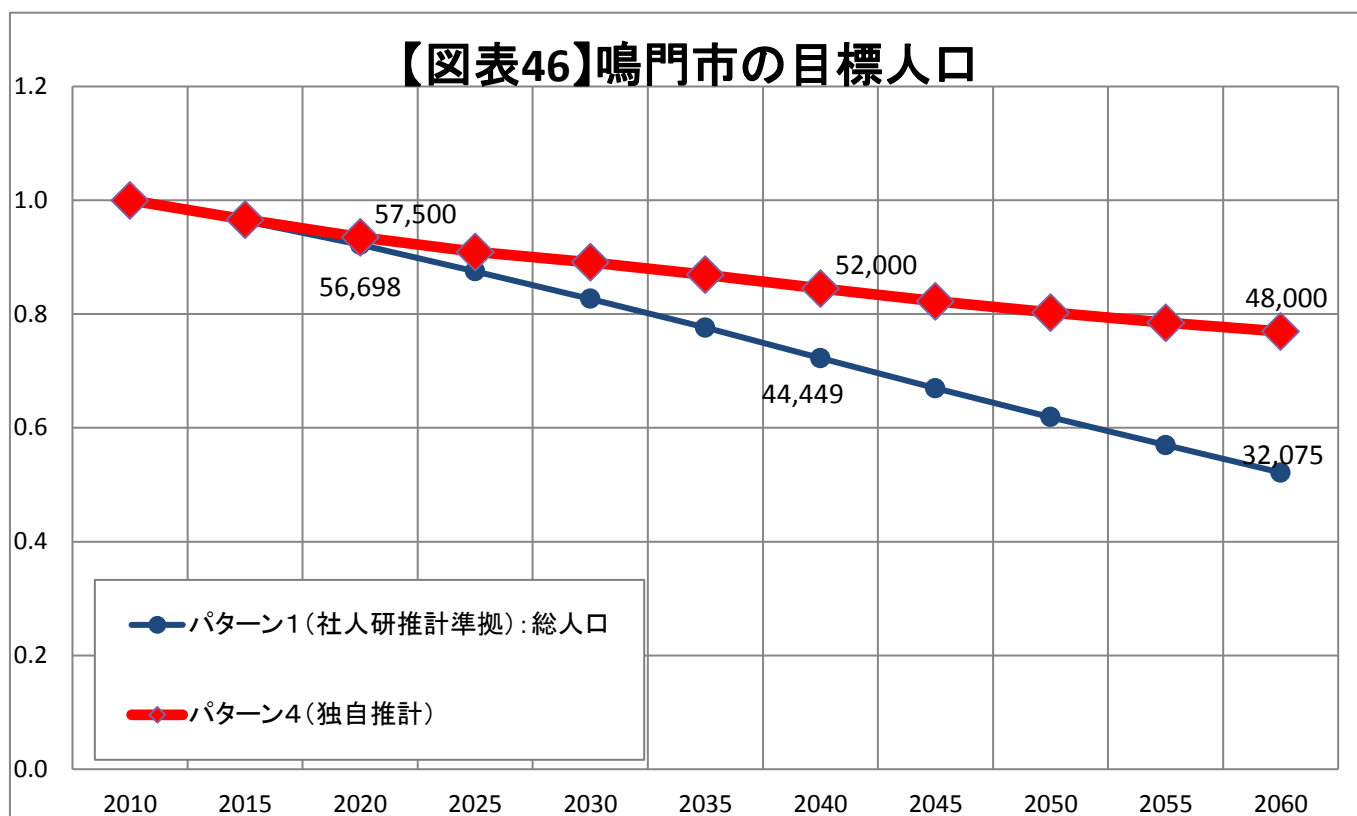
		2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年
パターン1	総人口（人）	61,511	59,272	56,698	53,829	50,857	47,733	44,449	41,182	38,073	35,047	32,075
	年少人口比率	12.1%	11.1%	10.3%	9.6%	9.0%	8.8%	8.8%	8.7%	8.4%	8.0%	7.7%
	生産年齢人口比率	61.2%	57.5%	55.2%	54.7%	54.2%	53.2%	51.0%	49.9%	49.4%	49.3%	49.0%
	65歳以上人口比率	26.8%	31.4%	34.4%	35.7%	36.8%	38.0%	40.2%	41.5%	42.2%	42.7%	43.2%
	75歳以上人口比率	14.2%	15.6%	17.5%	21.3%	23.7%	24.2%	24.4%	25.1%	27.3%	28.5%	28.8%
シミュレーション1	総人口（人）	61,511	59,349	57,126	54,972	53,014	50,869	48,557	46,280	44,168	42,175	40,309
	年少人口比率	12.1%	11.2%	11.0%	11.5%	12.6%	13.6%	14.3%	14.3%	14.3%	14.3%	14.6%
	生産年齢人口比率	61.2%	57.4%	54.8%	53.5%	52.1%	50.7%	48.9%	48.8%	49.3%	50.2%	51.0%
	65歳以上人口比率	26.8%	31.4%	34.2%	34.9%	35.3%	35.7%	36.8%	36.9%	36.4%	35.5%	34.4%
	75歳以上人口比率	14.2%	15.6%	17.4%	20.9%	22.7%	22.7%	22.3%	22.3%	23.5%	23.7%	22.9%
シミュレーション2	総人口（人）	61,511	59,852	57,956	56,140	54,559	52,794	50,846	48,967	47,279	45,729	44,326
	年少人口比率	12.1%	11.2%	11.0%	11.7%	12.9%	14.1%	14.8%	14.9%	14.8%	14.8%	15.1%
	生産年齢人口比率	61.2%	57.6%	55.2%	54.1%	52.8%	51.5%	50.1%	50.2%	51.0%	52.0%	52.8%
	65歳以上人口比率	26.8%	31.2%	33.7%	34.2%	34.2%	34.4%	35.1%	34.9%	34.2%	33.2%	32.1%
	75歳以上人口比率	14.2%	15.5%	17.2%	20.5%	22.2%	22.0%	21.3%	21.1%	22.0%	22.0%	21.1%

図表45-2 老年人口比率の長期推計（パターン1及びシミュレーション1、2）



パターン1のままだと、2040年には老年人口比率が40%を超えるが、シミュレーション1、シミュレーション2によれば、老年人口を30%台までおさえることができる。

6. 鳴門市の目標人口



上のグラフのパターン4は、独自推計のもので、総合戦略を策定する上での目標人口のグラフである。第6次鳴門市総合計画において、2021年（平成33年）の人口目標を57,000人としており、それをクリアすべく、2020年（平成32年）の人口目標を57,500人にする。

また、「鳴門市版総合戦略」の各施策を実施し、2040年（平成52年）の鳴門市の人口目標を52,000人とする。

第5章 まとめ

1. 鳴門市の人口減少に対する再認識

現在、鳴門市は人口減少社会をすでに迎えている。このままの推移が続けば、2040年には、45,000人を割り込むまでに人口が減少する。これからは、この人口減少を前提とした施策を行う必要がある。

2. 自然減少の趨勢

鳴門市はすでに少子高齢化となっており、人口構成では15歳未満の割合は減少を続け、65歳以上の老年人口の割合は増加の一途をたどっている。少子化は依然進んでおり、出生数は減少を続けているが、自然減少の大きな要因は、少子化はもとより高齢者の死亡数の増加に大きな要因となっている。現在、出生数と死亡数の差は年々広がっており、死亡数については依然増加傾向にある。

以上の点を踏まえて、出生数増、死亡数減となる施策を行い、自然減を緩和させていく必要がある。

3. 社会減少の趨勢

鳴門市の社会移動は転出超過であり、社会減となっている。転出超過については、20代、30代の移動が多く、進学・就職・転職・結婚・転居を契機に移動が発生している。鳴門からの移動の多くは県内、とりわけ徳島市、板野郡への移動が多数となっており、次いで関西圏、四国への移動が多くなっている。

このため、転出の抑制、さらには転入の増加による転入超過に転じなければ、自然減の状況を打開する可能性が低い状況では、人口減を緩和させる方策はない。そこで、雇用機会の創出や子育て環境の充実、住環境の向上や、教育環境の向上などを行い、鳴門で働くことができ、子育てがしやすく、そして暮らしやすい状況を作るとともに、それを効果的にPRしていく必要がある。

4. 鳴門市が取り組む基本的視点

以上の趨勢を踏まえて、鳴門市は人口減少対策として、以下の視点で取り組んでいく。

① 10代までの鳴門への愛着づくり

鳴門の人口減少のかたちとして、鳴門で育った子どもたちが、大学進学を機会に、市外へと転出し、そのまま転出先や都市部で就職し、鳴門に帰ってこないという状況がある。そこで、10代の鳴門の子どもたちをターゲットに、鳴門に誇りを持てる施策を実施し、大学卒業後、または転職の機会に鳴門に戻ってくるよう意識形成を図る。

② 20代からの出会い～子育てを支援

鳴門市の自然減対策として、20代から40代まをターゲットに、出会い、結婚、出産、子育ての環境の充実を図り、出生数の増加を目指す取り組みをおこな

③ 30代まで（生産年齢人口前期）の雇用と就労環境を整える

30代までをターゲットに、雇用、就労環境を整備し、鳴門にずっといたい、また鳴門に帰ってきたいという人たちの受け皿をしっかりと作り、社会増を促す。

④ 40代までの定住を支援

40代までをターゲットに、住環境整備や教育施策を充実させ、鳴門での定住を支援し、社会増を促す。

⑤ 50代からの健康寿命をの延伸を支援する。

50代以上をターゲットに、健康寿命を延伸させる取り組みを行い、死亡数の減少に取り組む。